

# 大宰府条坊跡42

—第251・255・257次調査—

平成24(2012)年

太宰府市教育委員会

太宰府市の文化財 第114集

# 大宰府条坊跡42

—第251・255・257次調査—

平成24(2012)年

太宰府市教育委員会



第 251・255・257 次調査および第 236 次調査合成写真（上が北）



大型掘立柱建物 (第 257 次調査 SB300 Fig. 56 ~ 58)



奈良三彩火舎 (第 251 次調査 Fig. 23-18)



SB300 柱材 (第 257 次調査 Fig. 93-23)



帯金具鑄型 (第 257 次調査 Fig. 66-10)

## 序

本書は、太宰府市朱雀2・3丁目に所在する西日本鉄道二日市車庫跡地の開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書です。

調査地は大宰府条坊跡の中央付近に位置し、近年は西日本鉄道二日市車庫があった場所で、その機能が筑紫野市に移転するまで、大きな建物が建ち並んでいました。

今回の調査では「天下之一都会」(『続日本紀』)と称された大宰府を物語るように、奈良時代から平安時代にかけての遺構や遺物が多数見つかりました。その中でも奈良時代の大型掘立柱建物跡は、第236次調査の成果と合わせて南北に2棟並ぶことがわかったほか、奈良三彩の火舎など珍しい遺物も発見され、古代大宰府の歴史を知る上で貴重な所見を得ることが出来ました。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、ひいては文化財愛護の精神が高揚することを心より願っております。

最後になりましたが、本調査に対しご理解ご協力いただきました、関係各位ならびに諸機関の方々には心からお礼申し上げます。

平成24年3月  
太宰府市教育委員会  
教育長 關 敏治

1. 遺物の位置と歴史	1
II. 調査体制	5
III. 調査資料および整理方法	6
IV. 調査報告	7
1. 第251次調査	7
(1) 調査に関する経緯	7
(2) 基本編位	7
(3) 出土遺物	7
(4) 出土遺物	7
(5) 小結	16
2. 第255次調査	37
(1) 調査に至る経緯	37
(2) 基本編位	47
(3) 出土遺物	47
(4) 出土遺物	54
(5) 小結	60
3. 第257次調査	76
(1) 調査に至る経緯	76
(2) 基本編位	76
(3) 出土遺物	78
(4) 出土遺物	105
(5) 小結	181
V. 第257次調査自然科学分析	229
VI. 調査まとめ	259

## 写真図版 …… 平女遺跡および遺物写真

付録 …… 第251次調査 第1面遺構全体図 (1/200)	
第251次調査 第2面遺構全体図 (1/200)	
第251次調査 遺構略図 (1/200)	
第255次調査 遺構全体図 (1/200)	
第255次調査 遺構略図 (1/200)	
第257次調査 第1面遺構全体図 (1/200)	
第257次調査 第2面遺構全体図 (1/200)	
第257次調査 第3面遺構全体図 (1/200)	
第257次調査 第1面遺構略図 (1/200)	
第257次調査 第2面遺構略図 (1/200)	
第257次調査 第3面遺構略図 (1/200)	
付録 …… ① (遺構および遺物写真)	

- 本書は大学府出水巻2・3丁目で行われた大学府本分館の発掘調査報告書である。
- 遺構の図解には、匠土調査班(1)南越兵を利用した。したがって本書に示される方位は特二北記のない限りN.E. (南東北)を示す。本文中に記される遺構の角度もこれを基準としたものである。
- 調査対象地の表土剥ぎおよび埋め戻しは(有)和田園土社に委託した。
- 遺構の発掘および写真撮影は宮嶋、駒、森若知子、久保木理恵が行った。
- 遺構全体の作成図は、第251・255次調査を宮嶋、駒、森若知子、久保木理恵が行い、第257次調査の図解については、(株)写真エンジニアリングと国際映画(株)が行った。
- 遺構の空中写真撮影は(有)空中写真企画(代表取締役松本)が行った。
- 出土品の科学分析はパトリック・サウーグエイに委託した。
- 出土した鉄製品・木製品の実存形態は(株)オタクが行った。
- 遺物の図解は、森田真子、杉本理恵子、福井日、久家幸美、木村雅彦、宮嶋が行った。
- 表入力・写真撮影は藤井おひな子、市川晴美が行った。
- 遺物の整理梱包・復元作業は東澤由美、佐山美子、末永亜由子が行った。
- 遺物の写真撮影は(有)文化写真工房(代表 阿紀久夫)が行った。
- 図の浄書は、藤井日、久家幸美、吉澤千穂、今岡一恵、宮嶋が行った。
- 本書に用いた図版は以下のとおり。

15. 編者は、宮嶋が担当した。

紀年表	AD	大宰府土器型式	磁器区分	国産陶器型式 (型式の上層)		標準磁器	準標準磁器
				灰胎	緑胎		
⑥	700	I	A B				
	725	II					
	750	III					
		IV					
	800	V		緑板0-10 井ヶ谷10-78	長門?・畿内	白磁I類	唐三彩・二彩 紋胎
	825	VI	A B	黒磁K-14	長門・洛北・(河 西)・(黒磁K-14)	越州系青磁I, II類 長沙系青磁・黄胎 褐彩・褐胎	
	850			黒磁S-4 黒磁K-90	洛西 黒磁K-90		青磁褐彩・褐胎 初期イスラム陶器
	900	VII	A				
	925	VIII					
	950	IX		(A新)	虎渓山1 (折戸0-53)	近江	
1000	X			新戸0-53		越州系青磁III類 白磁XI類	
1050	XI		B	東山牛-72 (丸石2)			
⑦	1100	XII	A B			白磁II, III, VI~3, VI, XII, XIII類 III, IV, V, VI, VII類 青白磁	初期龍泉系・阿安系青磁0類 羅州系青磁 越州系青磁I, II, III類 青白磁
		XIII		丸石2 百代寺 東山牛-105 藤岡S-1			白磁II類, Ⅲ類, Ⅳ類
	1150	XIV				龍泉系青磁I-1~4, 6 ⅢI類	白磁VII, V-4 ⅢIII類増加
	1200	XV				阿安系青磁I~IV, ⅢI類	白磁VII, ⅢV(III)-1類
	1230	XVI		D		龍泉系青磁II-a, b類	白磁ⅢVIII-2類
⑧	1250	XVII		E		龍泉系青磁III類 白磁IX類	龍泉系青磁III-c類 白磁X類 黒胎陶器
		XVIII		F			
⑨	1300	XIX				龍泉系青磁IV類	白磁B, C類 安南鉄胎
	1350	XX		G			
⑩	1450						
⑪	1500						

紀年表資料 ①A. D. 927 延長5年, 大宰府74次S02056溝  
②A. D. 1091 寛治5年, 平安京朱雀4条195E8井戸  
③A. D. 1224 貞治3年, 大宰府33次S0605溝  
④A. D. 1304 嘉元2年, 大宰府109, 111次S03200溝  
⑤A. D. 1330 元徳2年, 大宰府45次SK1200池  
⑥A. D. 784 延暦3年, 長岡京102次SD10201溝  
⑦A. D. 1459・1465 長祿3・寛正5年, 福岡市井箱田C11・S016池  
⑧A. D. 1501 文龜元年, 大宰府70次SD1805溝  
⑨A. D. 1265 文永2年, 博多62次713土橋

文献 ①九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査報告」1982  
②財団法人三・吉川機構「平安京跡発掘調査報告北西4条一坊」1975 平安京調査会  
③九州歴史資料館「大宰府史跡昭和49年度発掘調査報告」1975  
④九州歴史資料館「大宰府史跡昭和63年度発掘調査報告」1969  
⑤九州歴史資料館「大宰府史跡昭和52年度発掘調査報告」1978  
⑥長岡京市埋蔵文化財センター「長岡京市埋蔵文化財調査報告書第1集」1988  
⑦福岡市教育委員会「井箱田C溝跡1」『福岡市埋蔵文化財調査報告書179』1988  
⑧九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査報告」1982  
⑨福岡市教育委員会「博多48」『福岡市埋蔵文化財調査報告書397』1995

Fig. 1 大宰府土器型式と国産陶器・貿易陶磁器年









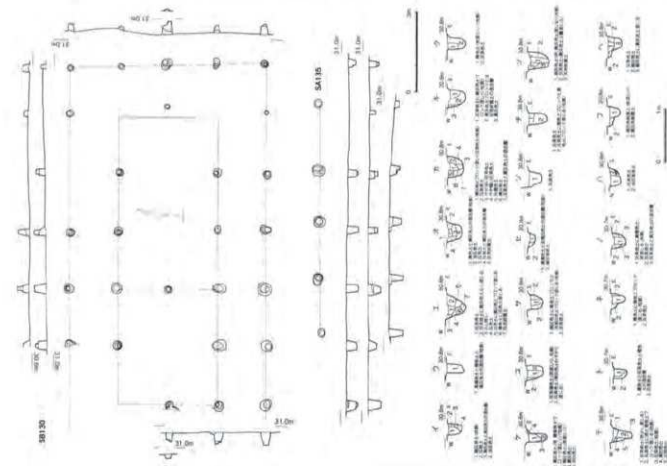


Fig. 4 2518530 - SA135 遺構実測図 (1/100, 1/50)

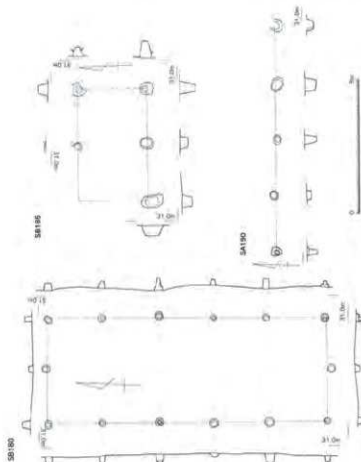


Fig. 5 2518210 - 185, SA160 遺構実測図 (1/100)

柱間は2.1mを測る東西4間の地列で、長さ8.4m、幅は約1.1' 35" -18"を測る。掘り方は後0.3' ~0.5mの間で、深さは0.4m前後である。

Ⅲ

2518005 (Fig. 6)

柱長24.92m、幅0.9 ~ 1.0m、深さ0.25m前後で、南側が西側に向かってレベルは下がっている。掘りは土質 41' 20" -Sの東西溝であるが、若干控れている。埋土は灰色土と黄灰色土の混合層である。断面は左図形をしている。出土遺物のほとんどは3世紀後半であるが、白磁器 IV 類と赤褐色の白磁磁片の2点が出た。平安後期の遺物が掘りに入る前様が多いことから、この遺構はこの2点の遺物の年代を埋没時期と判断した。

2518010 (Fig. 6)

柱長0.65 ~ 1.0m、幅0.7 ~ 0.9m、深さ0.05 ~ 0.15m、幅は36' 28" 27" 30'の南北溝、東西10'は柱間を示している。この溝の北側延長上に30016が出土されたが、遺構発出時に復元したような新しい遺物は上面から出土し、溝206-2 次調査の30065の一部の可能性も考えられる。

2518015

柱長0.3m、幅0.65 ~ 1.0m、深さ0.45m、埋土が一面池田と段原並ぶ状態であったため、検出時に確認できた範囲から埋没範囲はなくなった。途中からU字形に埋没に追いついている。西側約2.5mの位置に30016の溝が平行しているため、前後があるかもしれない。検出状態から池田の下にあった遺

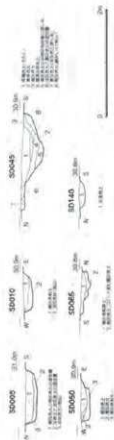


Fig. 6 第 251 次調査第 1 遺溝土器実測図 (1/50)

際、つまり 2 面目の可能性が考えられる。

251S0045 (形見 4)

S0045 によって途中分析されているが、検出長 27.35m、幅は 0.63 ~ 1.28m で全体として 1.1m 前後、深さ 0.17 ~ 0.16m で底面の高低差はほとんどない。幅は E 1° 30' 25" S の東西溝、埋土は土層が灰色砂土、下層は灰色粘土である。東側の土層はやや砂質じりであった。北面に中央を避け、縦り方断面はおおそそ半円形をしている。

251S0050 (形見 4)

検出長 11.9m、幅は 1m 前後だが部分的に出入りがあって 0.85 ~ 1.0m、深さ 0.15 ~ 0.26m、埋土は E 1° 53' 2" S の南北溝、1 面目遺構発出時にはプランはびんやりした状態であった。2 面目でこれに平行する溝 (S0055) が東側 3m の位置で検出している。東側は S0055 に切られて残っており、南側は S0059 に切られているが、その延長に溝構が確認できないため、ほぼこの付近で終わっていると考えられる。この溝の下から S0060 が検出された。

251S0062

検出長 11.55m、幅 0.50 ~ 0.75m、深さ 0.63 ~ 0.16m で西側に向かってレベルは下がっている、埋土は E 3° 9' 42" S の東西溝。

251S0063

検出長 10.35m、幅 0.3 ~ 0.6m で埋土 0.5m 前後、深さ 0.02 ~ 0.12m、埋土は E 4° 22' 20" S の東西溝、建物では藍染赤切りの土器型片が出土している。

251S0065 (形見 6)

検出長 16.0m、幅 0.65 ~ 1.15m、深さ 0.12 ~ 0.23m、埋土は E 9° 46' 27" S の東西溝、東側は S0055 の覆土によって切られているが、その遺構を越えた側では確認されていない。埋土は灰色粘土である。

251S0068

検出長 1.8m、幅 0.24 ~ 0.7m、深さ 0.14 ~ 0.02m、埋土は E 3° 46' 20" S の東西溝。

251S0069

検出長 0.725m、最大幅 1.2m、埋土は E 4° 17' 54" S の南北溝、ほとんど埋平され、溝底の高岡とみられる深さ 0.1m 前後の小穴 4 箇所ほど多数残っていただけである。

251S0112

検出長 5.55m、幅 0.4 ~ 0.65m、深さ 0.15m、埋土は E 4° 38' 42" S の東西溝。

251S0140 (形見 6)

検出長 14.0m、幅 0.45 ~ 0.68m で埋土 0.6m 前後で、深さ 0.12m 前後、埋土は E 7° 46' 2" S の東西溝、埋土面は 0 字序で、埋土は灰色粘土である。東側は全体的に遺構が希薄になって、僅かにその底

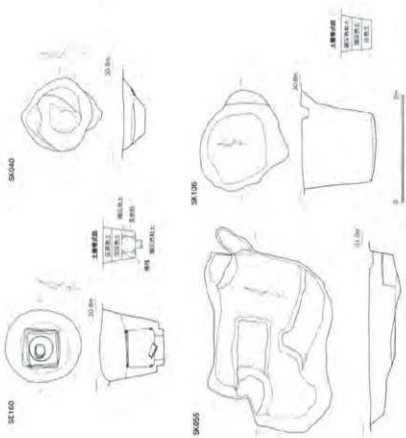


Fig. 7 251S160, S0040 - 055, 106 遺構実測図 (1/50)

跡のような痕跡が散見していることから、この溝は東側ほど大きく開すなれと推測される。

251S0145

検出長 6.65m、幅 0.4 ~ 0.5m、深さ 0.08m 前後、埋土は E 1° 28' 42" S の東西溝、西側は S0125 で遮切れ、それを越えた側面でも未検出である。東側は S0099 の南側延長ラインで終わっている。

251S0150

検出長 6.75m、幅 0.3 ~ 0.5m で埋土 0.4m 前後、深さ 0.23m、埋土は E 4° 53' 0" S の東西溝。

251S0155・170

検出長はそれぞれ長さ 5.15m、4.1m、途中東側のレベルが上がりつつあるため 6m ほど分離されている、幅 0.4m 前後、深さ 0.05 ~ 0.17m、埋土は E 1° 28' 18" S の東西溝、両溝は延長上にあるため一連の 7 の考えられる。埋土は台から S0140 と同時期の可能性が考えられる。

251S0165

検出長 9.5m、幅 0.2 ~ 0.4m、深さ 0.05 ~ 0.2m で東側に向かってレベルは下がっている、埋土は E 7° 46' 2" S の東西溝、部分的に埋土のような残構が残っていた。この溝に接続する S0125 は埋土が細山と区別が難しく、この溝は土層で埋平される。



Fig. 8 2513001 土器家跡 (1/50)

**道路遺構**

25137195

S945とS965が道路跡と考えられ、2つの境に挟まれた部分が道路の可能性が考えられる。しかし、御堂川内に道路に伴う基礎や通行痕跡は確認されていない。掘削はE-07、40°、33°、Sで、御堂川分の幅は1.5~2.2mを測る。

25137200

S905とS962が道路跡と考えられ、2つの境に挟まれた部分が道路の可能性が考えられる。しかし、御堂川内に道路に伴う基礎や通行痕跡は確認されていない。掘削はE-4、7°、3°、Sで、御堂川分の幅は3.7~4.6mを測る。S962は南側面跡ということになるが、平行するS905・908は御堂川の入り直しやそれを構築した区画の痕と考えられる。

**井戸**

25132160 (Fig. 7)

掘り方は東西1.35m、南北1.4m、深さ0.41mの円形土坑であり、その中央に井戸枠が残存していた。井戸枠は磚塊が2段分残っており、それぞれの内径は上段が1.05m、下段が1.01mである。上下の磚塊間は0.4mで、縦横と横割られる枠材の面跡が確認されたが、腐食し殆ど残っていない。縦横も腐食の目立ち、殆どなくなっており、一部原形に近い部材から、辺り0.9m前後の断面方形の部材を使用したと推測される。また、上の横塊はコブ積みであったことは確認できたが、下の横塊の組み方は不明である。井戸枠内には柱0.41m、深さ0.11mの垂物痕跡が確認されたが、曲輪そのものは全く残っていない。この曲輪の埋土上には矢張り用とみられる厚0.21m、深さ0.2mの遺物が出た。

**土坑**

25130440 (Fig. 7)

深さ1.4×1.52m、深さ0.41mの円形土坑である。埋土は磁器片が全くない暗灰色粘土である。井戸のようにも見えるがその断面に乏しい。

25130555 (Fig. 7)

東西3.2m、南北2.5m、深さ0.05mの長方形の不定形土坑で、埋土は大きく上2層で、上層は灰黄色土、下層は黒灰色土と暗灰色土の混合層である。

25130106 (Fig. 7)

掘り方は南北1.5m、東西1.9m、南北1.7m、深さ1.4mを測る。周囲の地面はF平が薄い砂層で埋土はない。埋土中に暗灰色土からは板の破片が出た。裏面に近いほど砂質になっている。埋土中に井戸枠の部材等は確認していないが、形状から井戸の可能性も考えられる。

**その他遺構**

土取り遺構

25130001 (Fig. 8)

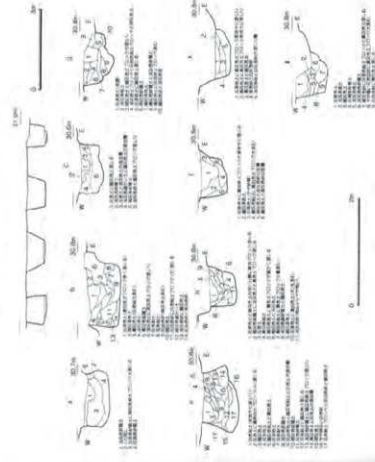
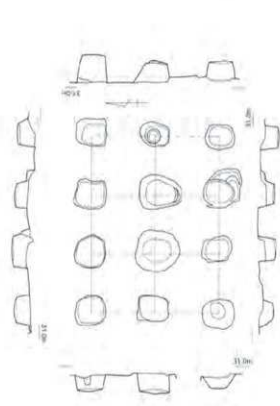


Fig. 9 25130460 遺構家跡 (1/100, 1/50)

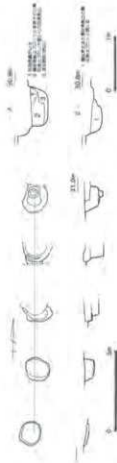


Fig. 10 25150100遺構横断面 (0/100, 1/50)

調査区南端部に広がる大谷みで、堀跡はおおよそ東西 29.6m × 南北 15.0m で、さらに南の調査区外に伸びている。底部が凸していることと堀跡の断り下部分も多く、自然発露によるものでないことは明かである。深さは0.3m前後で、最も深いところで0.5m前後であり、堀跡は凸凹である。ちようど明瞭な形状を示した遺構で堀跡が結核しており、積土層の目的であったことが理解でき、土取りの跡が観察される。土取り後の埋土は粘土や砂質土が層間に堆積しており、自然発露ではなく、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物はほとんどが奈良時代のものであるが、南から北平野時代の白磁片が出土する。

25150205 - 030 - 005 - 070

調査区中央付近に広がる大きな窪みで、埋土は褐色土に黒色土が混じり、堀跡はおおよそ東西 40.0m × 南北 24.3m で、深さは0.4m前後で、堀跡は凸凹である。出土遺物はほとんど奈良時代のものであるが、南から平野時代の白磁片が出土する。北端では赤切り調整の土器片が多く出土した。

25150209

調査区西端で出土されたため、全容は不明であるが、南北 3.4m、東西 4.5m 以上、深さ 0.04 ~ 0.1m で、方形の浅い遺構である。埋土は茶褐色粘質土である。

25150325

調査区北端を中心とする大きな窪みで、埋土層はおおよそ東西 13.7m × 南北 33.8m である。黄褐色土の堆土に埋り込んでいて、東部の影響に注視して埋り込まれていない。深さは0.5m前後で深い部分では0.7mあり、表層は凸凹である。また、埋り込みが東部の方にも多く、人為的に埋り込んで七次遺構と推定される。埋土は明褐色土で奈良時代の遺物に混じって僅かに白磁など平安時代の遺物も出土する。

25150906

竪柱遺構

25150906 (Fig. 11)

整地や遺構が存在しない部分では、建物の一部が1面目で確認されたが、それ以外には骨董物の下か敷や土器など、切り欠きから空洞の調査では最も古い遺構のひとつと考えられる。建物は3間×3間の礎柱の東西棟で、東西 6.6m、南北 4.8m、柱間は東西 2.2m、南北 2.4m、礎柱はほぼ正方形をとっている。埋り方は0.85 ~ 1.0m のゆるみのある方を示し、深さは0.35 ~ 1.05m であるが底部のレベルはほぼ同じである。埋り方のゆるみを見れば柱間を確認でき、埋土状況からも柱間は横並びであったものと推測される。

この建物の25%程度で25150909の北辺が掘って入り、同一時期に存在した可能性は十分考えられる。一方で、2棟の遺構は異なるもの北辺が掘って入り、同一時期に存在した可能性は十分考えられる。

25150909

第23号北端直線で掘り出していたS3006の一部。全容の調査によって、その続きとみられる2つの埋り方が確認され、230-S3006はよまの間の南端の礎柱遺構と推定した。

25150910 (Fig. 10)

埋土の埋り方をS3009の埋り方とほぼ同じにして掘り出されたため、S3060との間に近い関係は不明である。南北の4本の堀跡で、長さ 9.0m、柱間は 2.25m、堀は約 3' 5" ~ 4' 1" の大きさがある。0.4m前後で、柱間は明確な埋土でつながったため埋りかがある。また、礎柱のレベルが互いにほぼ一致している。これは前期ほど明確な埋土のつながりがない。

Fig. 11 第25号北端直線第2遺構土層横断面 (0/50)

掘り出された。埋土は明褐色土で、深さは0.3m前後で、堀跡は凸凹である。また、礎柱のレベルが互いにほぼ一致している。これは前期ほど明確な埋土のつながりがない。この遺構の南側には、約 1.5m 埋り方が入り込んでいて、S-47 の埋土と S3060 の埋り方の間に混ざっていることから、S3060 ~ S-47 ~ S3120 の有用関係が成立し、S3205 との併存の可能性も考えられる。ただし、この遺構の周囲には同層級の遺構として用途不明な S3009 があるだけで、掘の目的が明確でない。よって、調査区南の両側に関係する遺構が存在する可能性が考えられる。

25150200 - 030 (Fig. 11)

埋土の下から掘り出されたが、東部の埋土がなかった部分で掘り出された S3009 と同一遺構と推定される。棟出長 19.8m、幅 0.6m 前後で、西端が広く 2.0m、深さ 0.2m。埋土は E-3' 10" ~ 2' 4" の硬質土。西側は S3095 によって埋められている。埋土は茶褐色粘土と灰土である。

25150905 (Fig. 11)

1面目で確認していた S3009 と対応する遺構とみられる。1面目掘り出段階で西側アラインはほぼ上下を確認していたが埋土は整地によって確認できていなかった。棟出長 11.6m、幅 1.1 ~ 2.2m、深さ 0.1 ~ 0.3m。埋土は E-3' 11" ~ 4" の硬質土で、南北棟で、南北端部とも土取り遺構によって埋められている。埋土は明褐色土である。

25150906 - 115 (Fig. 11)

15号の溝で、東西棟を S3100、南北棟を S3115 として調査している。S3100 は棟出長 16.5m、幅 0.45 ~ 0.75m で埋り 0.6m、深さは 0.1m 前後。埋り方は E-4' 10" 14" ~ 5"。S3115 は S3060 に寄りこんでいる。北端が S3025 に切り込まれ、棟出長 2.3m、幅 1.25m、深さ 0.3m。埋土は共に茶褐色粘土で確認して見えていたが、前部は長かったため、掘り出しに難しさが目立ってしまった。S3115 については、その延長上に S3054 が確認されている。同一遺構の可能性が考えられる。

25150908

棟出長 4.1m、幅 1.25m、深さ 0.05m 前後の南北棟。第1面調査時点で、築地以外の北端部分は確認できていた。前部は S3100 によって切り取られていて、それより南側には続かない。

25150910 (Fig. 11)

棟出長 7.3m、S3100 によって切り取られていて、埋り幅 1.5m 以上、深さ 0.03 ~ 0.15m。埋土は E-6' 29" 13" ~ 5" の硬質土。埋土は茶褐色土。

25150920

25150920

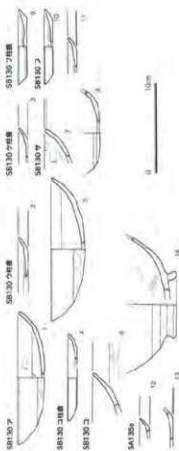


Fig. 12 251SB130-SAI30 出土遺物実測図 (1/3)

S0050 と S0005 の間が南北遺跡と考えられるが、那智や通行瓦葺等は残っていない。墓は北 $25^{\circ}$ 、 $10^{\circ}$ 、 $4^{\circ}$ 、 $8^{\circ}$ で、断面幅 3.4m 前後を測る。南側は S0001 で大きく削平されているため、終きは明確でない。北側は S0045 によって切られているが、最終築造の痕が確認できるもの、時期はほぼ同じである。遺跡は S0005 に属しているものと考えられる。また、那智が目立つが、その北側延長上に S0069 や S0064 などの遺の痕跡が見つかっているため、このラインで広範囲に遺跡や区画線が存在した可能性が高い。

(4) 出土遺物

○第 1 区

竪立柱遺物

251SB130 7 出土遺物 (Fig. 12)

土師器

丸底鉢 a (1) 径 14.8cm、器高 3.0cm、内面にはミチナギとそのコテで痕が残る。

251SB130 7 在産出土遺物 (Fig. 12)

土師器

小皿 a (2) 底面切り履しは凹縁へう切りで、底状圧痕が残る。その側は凹縁十字。

251SB130 7 在産出土遺物 (Fig. 12)

土師器

小皿 a (3) 底面切り履しは凹縁へう切りで、底状圧痕が残る。西面底面に十字、その他は凹縁十字。調子。

251SB130 7 在産出土遺物 (Fig. 12)

土師器

小皿 a (4) 径 14.8cm、器高 1.0cm、底面は径 8.8cm、底面はへう切りで、底状圧痕が残る。色調は淡茶褐色などを呈する。

251SB130 7 在産出土遺物 (Fig. 12)

土師器

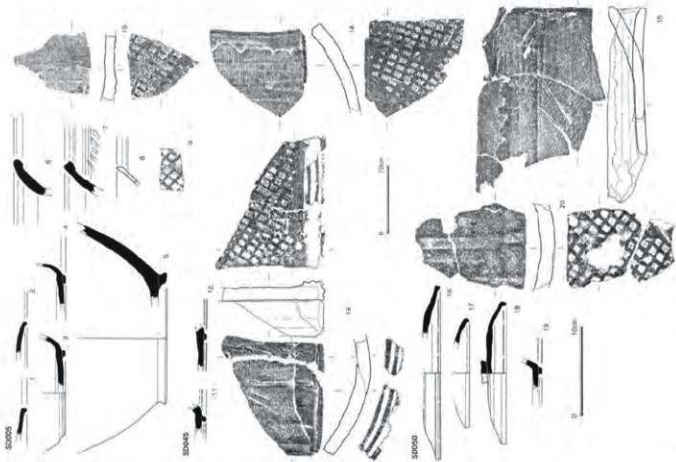
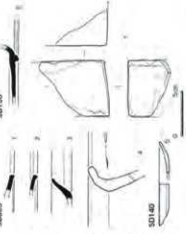


Fig. 13 251S0005-045-060 出土遺物実測図 (1/3、直は 1/4)



果(11, 12) 且はやや切れた高台を帯び、  
 果は不良で淡灰色を呈する。内外面同転ナ  
 ズ。はは狭い高台を帯び、内面不定方向のナ  
 ズ、外面へラ切り後ナズ、明背灰色を呈す。  
 果形

幹字丸(13) 幹字は0.3cm以下の幹粒を多く  
 含む。果成は良好で淡灰色を呈する。其方面の凸面  
 に短葉を帯び、凹面は平直、凸面は「目」の  
 ような鋭角を帯び、

平直(14, 15) 14の幹字は0.3cm以下の幹粒  
 を多く含む。果成は良好で背背灰色や淡灰色を呈す  
 る。凹面は凸面と垂直方向が残り、凹面は同転  
 する。凸面は「目」のような鋭角を帯び、

15の幹字は0.4cm以下の幹粒を多く含む。果成は良好で淡灰色を呈する。凸面が縦方向のナズ濃葉、  
 凹面は長背葉と垂直方向が残る。凹面同転部はへラケズリし面取りする。

25130659 出土遺物 (Figs. 12)

果形図

果(16, 17) 16は還元口径19.1cm、外面上半部は同転へラケズリ、内面上半部は丁寧なナズ、そ  
 の他は同転ナズで、色調は背背灰色で、窪部は黒い焼きのため黒灰色を呈する。口は還元口径11.7cm、  
 果成不良で背背が著しい。色調は淡灰色を呈する。

果(18) 口径15.6cm、器高2.8cm、外面上半部は同転へラケズリ、内面上半部は不定方向のナ  
 ズ。果成良好で背背灰色や淡灰色を呈する。口縁窪部は斜に焼きのため黒灰色を呈する。

果(19) 方形高台を帯び、内面底部以外同転ナズ。果成良好で明背灰色を呈する。

果形

果(20) 凸面には太い方形の幹字を帯び、凹面は厚減するが背背が僅かに露出できる。幹字は0.3cm  
 以下の幹粒を含み、他成不良で背背灰色を呈する。

25130065 出土遺物 (Figs. 14)

果形図

果(1, 2) 口縁窪部の腹片で、窪部は僅かにつまんで凹面三角部をなしている。背成還元良好で、  
 色調はやや明背灰色を呈する。

果(3) 内外面とも同転ナズ。他成還元は良好で、色調は淡灰色を呈する。

土器

果(4) 口縁より側面がゆるタイとみられる。全体的に背背高。幹字は0.1cm前後の幹粒を多く  
 含む。果成灰色や淡茶褐色を呈する。口縁窪部の内面には僅かに背背が

25130140 出土遺物 (Figs. 14)

土器

果(5) 還元口径9.4cm、器高1.1cm、還元口径2.5cm、他成不良で背背が著しいが、外面底部には反  
 射面が現れる。色調は淡灰色を呈する。

25130150 出土遺物 (Figs. 14)

果形図(6) 内面はミガキで、外面下部は平し出しの短頸部が現れる。背背淡灰色を呈する。

25130130 ナズ出土遺物 (Figs. 12)

土器

果(8) やや丸い器部で、底部はへラ切りで、その他は同転ナズ。果成は良好で淡灰色を呈する。  
 丸形短口(7) 口縁部の腹片だが、凹面にミガキが確認でき、外面は同転ナズで、下部はさらにナズ  
 濃葉する。

25130130 フ仕成出土遺物 (Figs. 12)

土器

小皿(9) 還元口径8.4cm、器高1.0cm、還元口径6.5cm、底面はへラ切りで、背成が僅かる。内  
 面底部は同転ナズで底面が調整する。色調は淡灰色などを呈する。

25130130 フ仕成出土遺物 (Figs. 12)

土器

小皿(10, 11) 10は還元口径8.4cm、器高1.6cm、還元口径6.2cm、器部はへラ切りで、背成が僅  
 が現れる。内面底部は同転ナズで底面が調整。色調は淡灰色などを呈する。11は同転ナズだが底面切り  
 廃しは不明。

壺

25130135a 出土遺物 (Figs. 12)

土器

小皿(12, 13) 2点とも他成不良で背背が目立つ。12の色調は同転白色を呈する。13は外面底部  
 に背成が現れる。色調は淡茶褐色を呈する。

壺

果(14) 外側に丸く残った高台を帯び、還元口径7.4cm、器高が目立つが、内面に僅かにミ  
 ガキが現れる。果成

25130005 出土遺物 (Figs. 11)

果形図

果(1, 2, 1) 1は同転ナズの本と、内面だけナズ調整。他成良好で淡灰色を呈する。2は外面ナズ  
 調整。その他は同転ナズ。他成良好で明背灰色を呈する。

果(3, 4) 器部内外面ナズ調整。その他は同転ナズ。他成は良好で背背灰色を呈する。3は還元  
 口径9.5cm、

果(5) 還元口径13.6cm、内外面とも同転ナズで、内面中に当て其儀のような短頸が現れる。他  
 成は良好だが、還元はやや不良で背背灰色や淡茶褐色を呈する。

果(6, 7) 6は他成良好だが器部はやや不良で、淡茶褐色を呈する。調整は同転ナズ。7は口縁窪部  
 を斜に削げる。外面には比喩を添え、縦方向のへラ式残が現れている。

白磁

果(8) 口縁部の腹片である。

果形

平瓦(9, 10) 9は凸面が丸み付き。10は凹面に垂直面と斜角が残り、凸面には「目」のようの  
 な幹字向きを行う。他成は良好で同転白色を呈する。

25130045 出土遺物 (Figs. 13)



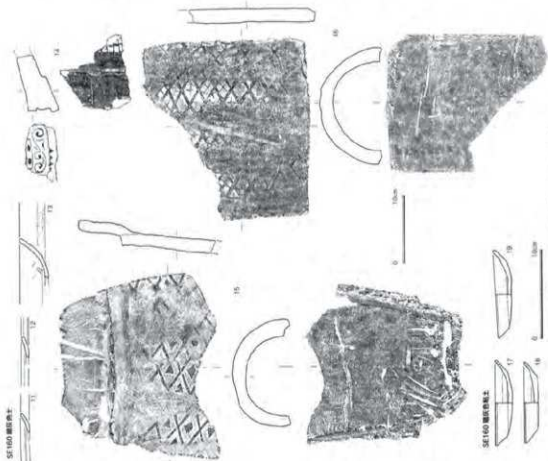


Fig. 16 2513E160 出土遺物(黒磁土) (1/3, 裏は1/4)

須磨器

片c. (6) 内底面は十字、外面底面はへら型り横十字、その間は田舎十字、焼成良好で顔面白色を呈する。

土灰出

片 (7) 幅 6.4cm、胎土は 0.1cm 以下の砂粒を多く含む、焼成良好で顔面白色を呈する。

片厚

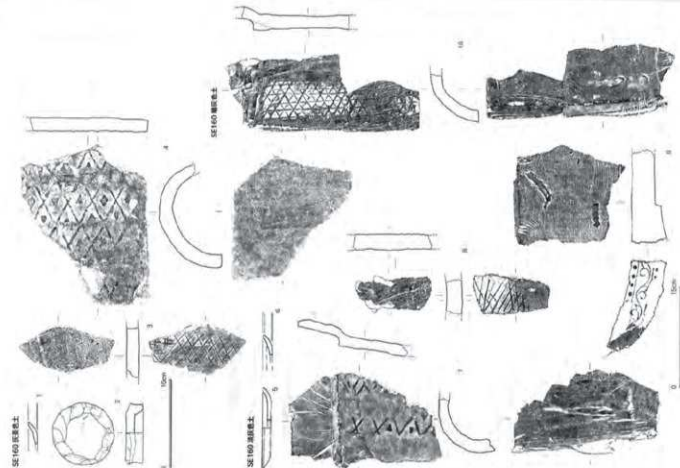


Fig. 15 2513E160 出土遺物(黒磁土) (1/3, 裏は1/4)

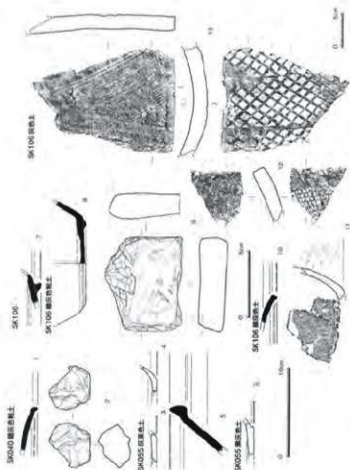


Fig. 17 2515040・655・106出土遺物写真図 (1/3, 9は1/2, 写真は1/4)

2515E160 灰茶色土出土遺物 (F1c.15)

土器類

小皿 a (1) 全体的に磨滅する。赤褐色を呈する。

白磁

皿 (2) 皿縁で、高台を壊し、体部は意図的に打ら壊れている。

瓦類

平瓦 (3) 斜縁不明さに「平井」の文字がみえる。一部向きをナゲ消す。

丸瓦 (4) 凸面は差部のような部分が入った大きな斜縁子を呈す。胎土には0.1mm程度の砂粒が散在し、赤褐色や不長で磨滅が目立つ。

2515E160 灰白色土出土遺物 (F1c.15)

土器類

小皿 a (5, 6) aは底面口径9.0cm、器高1.0cm、腹径4.8cm、縁高は不長で全体的に磨滅する。凸面は磨滅した赤褐色を呈する。bの底面口径は9.0cm、器高は不長で赤褐色を呈する。

瓦類

斜平瓦 (9) 胎土はやや粗く0.4mm以下の砂粒を多く含む。縁高は良好で赤褐色などを呈する。凸面は磨滅化された粗い草文の上下に草文を配している。凸面は斜縁のケイズリでナゲ消す。

平瓦 (8) 凸面は不定形な斜縁子印まである。縁高良好で赤褐色を呈する。

平瓦 (7) 凸面は差部のような部分が入った大きな斜縁子で、部分的にナゲ消滅がある。凸面はヘラ削り痕を呈する。縁高良好で赤褐色などを呈する。

2515E160 黄灰色土出土遺物 (F1c.15・16)

土器類

小皿 a (11, 12) 11は底面へラ削りで縁高が壊れる。縁高良好で赤褐色を呈する。12は底面凹陥へラ削り、縁高良好で灰白色を呈する。

丸瓦類 a (13) 外面中央に凹陥縁高が残り、底面は凹陥へラ削りの残すナゲ消滅。凸面は工具の滑り跡が残る。凸面は赤褐色を呈する。

瓦類

斜平瓦 (14) 凸面は均等草文で、凸面はナゲ消滅。凸面は印色とナゲ消滅である。縁高良好で赤褐色などを呈する。

丸瓦 (15, 16, 10) 10は三角形の斜縁子印まで一部ナゲ消している。凸面は粗い瓦目瓦。15は凸面が大さい斜縁子印に差部が入った印まで、凸面は赤瓦目瓦だが、粗い瓦目と粗い瓦目がある。凸面は凹陥平瓦までへラ削りながら、残り半分は凹陥縁高が残る。縁高良好で赤褐色を呈する。16は大きな斜縁子印まで、断面は凹陥へラ削りし、粗瓦りしている。凸面は赤褐色を呈する。

2515E160 黄褐色粘土出土遺物 (F1c.16)

土器類

小皿 a (17・18) 底面切り磨しは凹陥へラ削りで縁高を壊す。凸面は赤褐色や赤褐色を呈する。17は口径で7.3cm、器高1.95cm、底径2.6cm、18は口径6.8cm、器高1.05cm、底径6.0cm、19は口径6.0cm、器高1.7cm、底径3.45cm。

土器類

2515040 黄灰色粘土出土遺物 (F1c.17)

瓦類類

皿 (1) 凸面は灰白不長で磨滅不明。凸面は凹陥ナゲの残す不長方向の粗いナゲ。口縁縁部は凹陥ナゲ。赤褐色や赤褐色を呈する。

土器類

土器 (2) 胎土は0.3mm以下の砂粒を多く含む。赤褐色や赤褐色を呈する。部分的に凹陥平瓦が残る。

2515055 灰茶色土出土遺物 (F1c.17)

土器類

小皿 a (3) 底面切り磨しは凹陥削り。縁高不長で赤褐色を呈する。

平瓦 (4) 縁高不長で底面切り磨しで不明な部分の粗瓦りになる。凸面は赤褐色を呈する。

瓦類類

斜平瓦 (5) 内外面凹陥ナゲで、内面下半はその他ナゲ消滅。凸面は灰色で、玉縁部分だけ磨滅を呈す。縁高良好で赤褐色を呈する。一部胎土の緑色瓦目が確認できる。草書系。

2515065 黄灰色土出土遺物 (F1c.17)

土器類

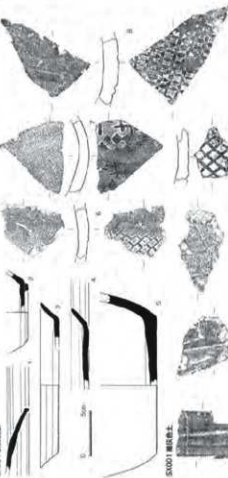
小皿 a (6) 底面切り磨しは凹陥削りで縁高を壊す。縁高不長で粗い赤褐色を呈する。

25150106 土出土遺物 (F1c.17)

瓦類類

平瓦 (7) 外面赤台を外側に露出させている。縁高や不長で赤褐色を呈する。

SX001 黒色土



SX001 黒色土

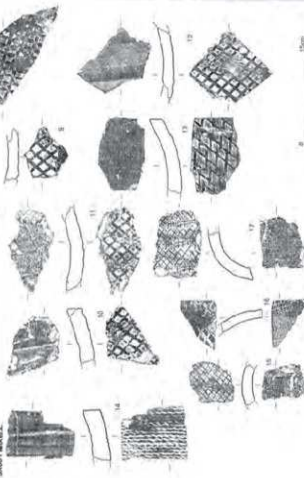


Fig. 18 25130001出土遺物(赤土系) (1/3, 5は1/4)

25130106 褐色土出土遺物 (Fig. 17)  
 赤土系  
 片 (a) やや直線的に外開する体部で、底部強に磨かれた低い高台を貼付する。腹口径8.9cm。焼成不良で調製不明。色調は淡褐色や乳白色を呈する。  
 石製品  
 磁石 (b) 縦5.7cm、横7.0cm、厚さ1.9cm。4面使用されている。安山片製。  
 25130106 褐色土出土遺物 (Fig. 17)  
 赤土系

SX001 黒色土

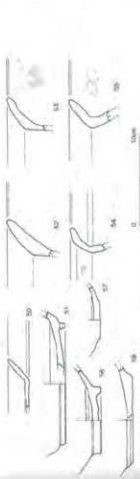
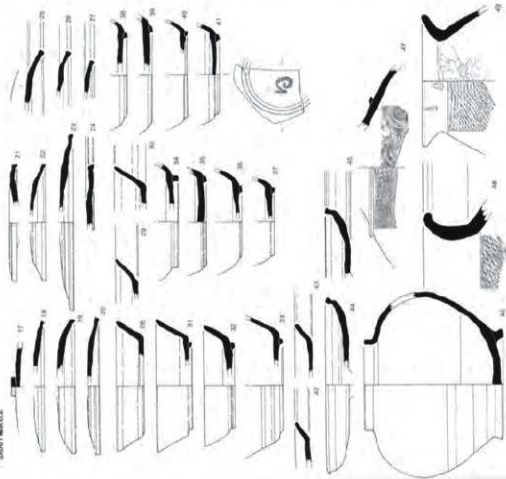


Fig. 19 25130001 出土遺物(赤土系) (1/3)



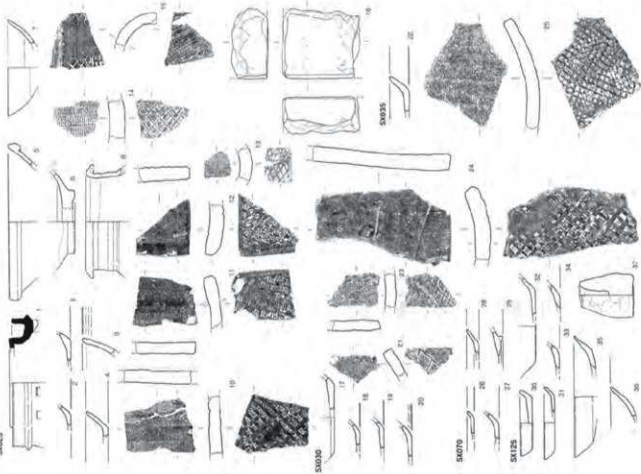


Fig. 20 25150025・030・035・070・125出土陶物実測図(1/3、其は1/4)

平瓦 (10~11) 10~12は凸面には布目切の格子印あり、10~12の凸面には布目切に覆背形が施る。13は平や丸口の斜格子印あり。側面はヘラ切り痕が顕著。14は横目切。側面はヘラ切り。凸面の途中に分割線が深く入り。そこで欠損する。趣向的に割ったとは思えず、ヘラ印人を間違えたと可能がある。

丸瓦 (15~17) 15は筋文の布目切で、内面は布目切と赤切り痕が見える。17は格子目に「平瓦凡」である天下瓦。

#### 25150022 出土遺物 (Fig. 20)

##### 瓦部

凹面瓦 (1) 縦面は縦長径8.8cmで、使用によつてやや平薄である。側面には灰色の薄かし意が施されている。横面は長形。

##### 土師器

小皿 (2) 縁部不貞で破損する。胎土は粘質で、赤褐色か黄白色を呈する。

杯 (3, 4) 3は地色不貞で破滅しているが、表面は凹形ヘラ切り。4は器高3.5cm、底部切り履しヘラ切りとみられる。色調は黄灰色を呈する。

##### 白磁

椀 (5, 6) 5は口縁部でIV類。6は底面で、内面には波線が施る。IV-1a類。

皿 (7) II-1a類。内面底面に波線が施る。底材灰白色釉を施す時、外面下半は露胎である。

鉢 (8) 灰黒色の底の口縁部で、厚さ口徑は7cm、口縁部を平切り曲げている。胎土は黄灰色で、外面と内面底部が灰褐色色釉で覆く施されるが、縁の縁部も立凸。

##### 唐川窯青釉

鉢 (9) 口縁部外面に青帯と波線を施し、内外面に黄褐色色釉を施す。全体的に極は割度する。外面には砂状の付着物がみられる。

##### 瓦部

平瓦 (10~14) 10~12は凸面に「日」の字のような格子印を施す。10は縁部良好で黄褐色色を呈する。11は格子印がやや甘い。縁部はやや不貞で黄褐色色を呈する。側面はヘラ切りし、凹面底部は直取りヘラクスリを付与。12は凹面に赤切り痕が見る。縁部は良好で灰色を呈する。内外面底部は直取りヘラクスリ調整する。13は斜格子印あり。14は方型格子印。

丸瓦 (15) 凸面は筋文の格子印まで「平」の文字が見える。

##### 土製瓦

埴 (16) 胎土は0.5cm以下の砂粒を含み、灰色や暗灰色を呈する。調整は不明で、灰色や暗灰色を呈する。

#### 25150030 出土遺物 (Fig. 20)

##### 土師器

杯 (17~20) 17は腹元深径2.7cm、底部切り履しは凹形赤切り。縁部良好で黄褐色色を呈する。18は底部凹形赤切り。19・20は押滅しているが、20の外底部部に横状圧痕が施る。

##### 瓦部

平瓦 (21) 凸面にはやや大きい格子印を施す。側面はヘラクスリを施す。胎土は0.1cm以下の砂粒を含み、縁部は良好で黄褐色色を呈する。

#### 25150035 出土遺物 (Fig. 20)

##### 土師器

杯 (22) 外面底部切り履しは凹形赤切り。色調は黄褐色色を呈する。

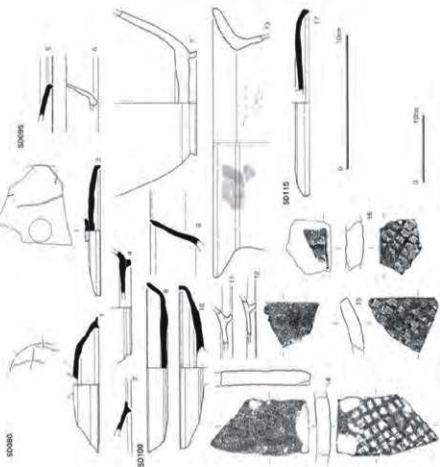


Fig. 22 25130060・095・115 粘土遺物群断面 (1/3, 真は 1/4)

蓋 c (1) 復元口径 1.1m, ツツミは欠落する。外面上半部はへつ切り履掛いナラ調製、内面上半部は同形ナラの底ナラ調製、その他は同形ナラ。色調は赤褐色などを呈する。

蓋 1 (2) 口縁部部の破片で、内外面とも同形ナラ。色調は赤褐色を呈する。

蓋 c (3) 復元口径 14.5cm, 器高 1.7cm, 外面上半部は同形へツクスリ、下半は粗いナラ調製され、そこへへつ切り身が施されている。焼成良好で褐色灰色を呈する。

坪 e (4) 復元器高 10.6cm, 断面は 0.1cm 以下の米粒を多く含む。色調は赤褐色で、外面下半は赤褐色を呈する。

25130095 出土遺物 (Fig. 22)

須恵器

蓋 3 (5) 口縁部はやや小さい三角部を作り出している。外面上半部は同形へツクスリで、その縁は同形ナラ。胎土は白色砂粒を多く含む。赤褐色を呈する。

土師器

土師器

瓦類

平瓦 (23～25) 23 は片脩子叩き、24 は焼成不良で全体的に華滅が目立つ。白面にほ 1 目 (1) のような女子叩きを施し、四角は様骨痕が残るが華滅し不明瞭。色調は灰白色を呈する。25 はやや小さな片脩子叩き、焼成不良で、赤褐色を呈する。全体的に華滅するが両面には着目土層骨痕が目立つ。

2515070 出土遺物 (Fig. 20)

土師器

小皿 a (26) 底面切り履掛しは赤切り。色調は赤褐色を呈する。

坪 a (27, 28) 色調は赤褐色を呈する。27 は底面赤切り。28 は器高 1.4cm, 厚減するが確認できる部分は同形ナラが残る。

黄色土器

坪 c (29) 三角形の低い或いは付けられる。焼成不良で華滅する。須恵。

2515125 出土遺物 (Fig. 20)

土師器

小皿 a (30, 31) 2 点とも底面切り履掛しは同形赤切り。色調は赤褐色を呈する。30 は口径 7.5cm, 器高 1.4cm, 器底 0.9cm, 形成不良で、31 は復元口径 8.2cm, 器高 1.2cm, 復元器底 0.1cm。

坪 a (32～34) 32 は復元器底 6.4cm, 底面外面には板状圧痕が残るが、切り履掛しは不明。33・34 の底面切り履掛しは赤切りである。

丸皿 a (35, 36) 2 点とも体部中心から口縁部にかけの破片で、断面が直立つ。35 は復元口径 13.5cm, 体部中心がやや膨らんでいる。

小皿 (37) は正定形で、口径 2.3cm, 器高 0.1cm, 底径 4.6cm, 体部はナラ調製される。色調は赤褐色を呈する。

○第 2 期

須恵柱状物

25130096 出土遺物 (Fig. 21)

須恵器

坪 c (1) 底面外面はナラ調製。その縁は同形ナラ。色調は赤褐色を呈する。復元器台径 7.8cm。

25130098 出土遺物 (Fig. 21)

須恵器

坪 3 (2) 口縁部部の破片で、内外面同形ナラで、焼成道は良好で褐色灰色を呈する。

須恵器

25150096 柱状出土遺物 (Fig. 21)

須恵器

坪 c (3) 復元口径 13.0cm, 器高 3.9cm, 復元器台径 7.7cm。

低く傾いた器台を有する。外面底部はへつ切り履掛調製、内

面は同形ナラ。その縁は同形ナラ。焼成道は良好で褐色灰色を呈す。

須恵器

25130080 出土遺物 (Fig. 22)

須恵器



Fig. 21 25130096  
出土遺物断面 (1/3)

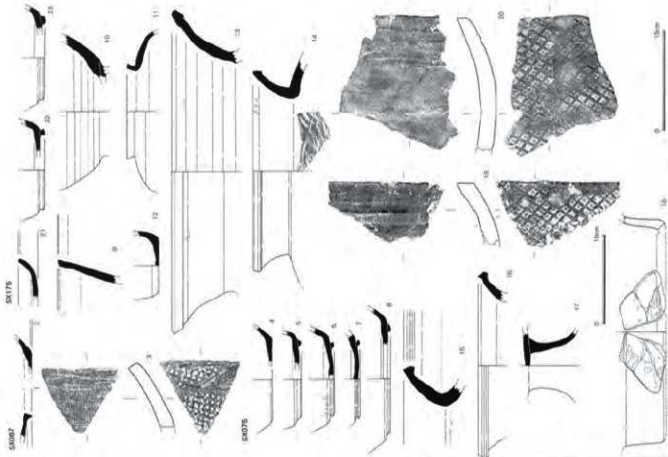


Fig. 23 25150087・075・175 出土遺物実測図 (1/3, 真尺 1/4)

杯 (6) 地成平良で全体的に磨滅する。胎土はやや粗く色調は淡褐色を呈する。  
 大杯 (7) 還元高台径 11.6cm。地成平良で全体的に磨滅する。胎土は 0.4cm 以下の砂粒を多く含む  
 やや粗い。色調は淡褐色を呈する。

25150100 出土遺物 (Fig. 22)

皿 (8) 還元口径 18.6cm、深高 2.35cm、還元底径 11.0cm。外面底部は同心へラケズリ。内面底部  
 は不定方向のナズ。その他は同心ナズ。地成良好で肉灰色や青灰色を呈する。

杯 (9) 体部の磨片で、内外面とも同心ナズ磨滅。還元平良で、内面は淡赤茶灰色を呈する。  
 高杯 (10) 還元口径 15cm。杯部内面は同心ナズ磨滅不定方向のナズ。外面は上半部が同心ナズで  
 一部工具が当たった磨滅が残る。下半は同心へラケズリ後ナズ磨滅。胎土はやや粗く、青灰色や褐色  
 を呈する。

土師器

杯 (11, 12) 2 品とも外面に磨滅した高台を呈する。胎土は砂粒を多く含むやや粗い。地成は  
 平良で淡灰色を呈する。

羹 (13) 還元口径 30.0cm。口縁部が体部より裏り出しているものと推測される。口縁部から体部  
 にかけてタテハダ、体部内面はへラケズリ。地成は良好。胎土はやや粗く淡褐色を呈する。

瓦類

平瓦 (14~16) 14 はやや大きい瓦形平瓦。凹面は磨滅が目立つが胎土が粗く平瓦に似る。地成がへ  
 ラケズリ磨滅される。底成はやや平良で淡赤灰色を呈する。15・16 は凸面に「目」のような磨片を呈し、  
 凹面に磨片が残る。15 は地成平良で淡赤灰色や褐色を呈する。側面へラケズリ。16 は灰色を呈す  
 る。

25150115 出土遺物 (Fig. 22)

実器類

羹 (17) 還元口径 20.8cm。グマシは欠損するが、その接合のための同心ナズ磨滅が確認できる。  
 外面の2/3は同心へラケズリ。内面上半部はナズ。その他は同心ナズ磨滅。色調は青灰色を呈する。

第 2 層 土師器の遺物

25150097 出土遺物 (Fig. 23)

実器類

羹 (1) 口縁部は明確な三角形で、地成良好で内外面とも同心ナズ。

杯 (2) 内外面とも同心ナズ。地成良好で淡褐色を呈する。

瓦類

平瓦 (3) 凸面に小さな瓦形磨片を呈す。凹面は有角状の磨片が残り側面近くの地成がナズ  
 ナズ磨滅される。側面はへラケズリ。地成はやや平良で淡赤灰色を呈する。

25150075 出土遺物 (Fig. 23)

実器類

杯 (4) 還元底径 9.6cm。地成平良で磨滅不明。色調は淡褐色を呈する。

杯 (5~8) 底成はやや平良で磨滅付する。底成外面はへラケズリ後同心ナズ磨滅。内面底部は同  
 心ナズ後不定方向のナズ。その他は同心ナズ。地成良好で色調は灰色や青灰色を呈する。5 は還元高台  
 径 8.5cm。6 は還元高台径 8.2cm。7 は還元高台径 8.7cm。8 は還元高台径 12.2cm。

鉢 (9) 胎土は磨滅した砂粒を含む。灰色を呈する。内外面同心ナズ。口縁部は地成を平らにするた

火舎(18) 底部付近の僅かな波片だが、黄元底層は24.6cm。粘土は濃褐色の砂粒を含むがきめ細かく、黄褐色の黄褐色を示す。和濁は北沢のある黄緑色。緑色。褐色の層が混ざっているが、内外面とも同様に、僅かに残るだけで、底部外面に0.1cmほどの細点で残る。底部も混雑とされているが、可能推定が考えられる。細点が混ざった面には、内外面とも同様にナツメ調の明瞭に確認できる。

瓦類

平瓦(19, 20) 2点とも凸面がやや大きい格子印まで、一部ナツメ印まで、一部ナツメ印内である。凹面は赤目色と褐色黄と混る。即ち確認部分の細点はへラ型であり、他は良好で淡灰色を示す。

25131出土土遺物 (Fig. 23)

銅器類

皿・(21) 体部と蓋部の厚はほぼ均等であって、内外面とも同様にナツメ調、赤目色を示す。  
 片・(22, 23) 22は黄元底層9.0cm。底部外面はナツメ、その他は同型ナツメ。23はよく低い面片を製付し、黄元底層5.4cm。確認良好で淡灰色を示す。

251 次期赤灰色土出土土遺物 (Fig. 24)

紀伊系銅器

柄(1) 内外面とも混雑され、明瞭な文様を描く。

石製品

不磨石製品(2) 幅3.5cm、厚さ1cm程度で、内面を滑り込み層のような形状を作り出している。磨石製。

剥片(3) 幅4.85cm、横2.65cm、厚さ0.9cm。厚層石製。

石筒(4-6) 4は全通を欠損し現存長2.15cm、幅1.1cm、厚さ0.4cm。黒曜石製。5は現存長2.85cm、幅1.35cm、厚さ0.35cm。灰田製。6は幅1.0cm、横1.55cm、厚さ0.4cm。灰田製。

瓦類

軒平瓦(7) 其凸面と凸面端部が三重の重畳式で、凸面に「日」のような格子印と赤色を施し、凹面に赤切り黒と赤目色が見える。粘土は0.2cm以下の白色砂粒や赤褐色を含み、黄褐色を示す。横成はやや良好。

平瓦(8-12) 凸面には「日」の文字のような格子印が混ざり、凹面に赤目が見える。粘土は0.2cm前後の白色砂粒を少量含む。横成良好もしくはやや不良で、赤褐色や灰色を示す。10・11は凹面に黄褐色が見える。

その他の遺物 (Fig. 25)

柄(1) 口縁部はよく仕上げた上、外面はミガキ、内面はミガキが混ざり、色調は灰色や暗灰色に黄褐色化している。5・10より出土。

瓦類

柄・(13) 黄元底層7.3cm。粘土は淡灰色で、外面平下と内面端部が輪郭に露出で、その他は淡緑褐色を施す。5・12より出土。

瓦類

軒平瓦(14, 15) 瓦当部と凸面端部が露出。14は粘土に0.1cm前後の砂粒を含み、横成良好でやや混濁で灰色を示す。5・14より出土。15の粘土は0.2cm以下の白色砂粒や赤褐色を含み、黄褐色を示す。横成は不良。5・16より出土。

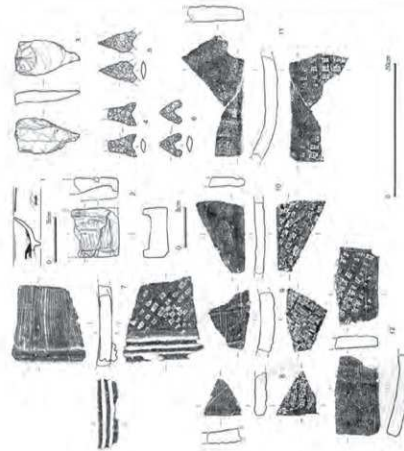


Fig. 24 251 次期赤灰色土出土土遺物実測図 (1は1/3, 2~6は1/2, 真は1/4)

めに繪まんで同型ナツメ調を示す。

蓋(10) 体部平下で黄台が僅かに残る。粘土は濃褐色の砂粒を多く含む。横成良好で淡灰色を示す。内面は強い同型ナツメ印。外面は同型ナツメ印。

蓋・(11) いちゆる短筒蓋で、黄元底層16.6cm。横成は良好で灰色や暗褐色を示す。内外とも同型ナツメ。

小皿(12) 外面平下と底面外面同様にナツメ。その他は同型ナツメ。内面確認は不定方向のナツメ。色調は灰色を示す。黄元底層6.3cm。

葉(13-16) 口縁部の破片で、内外面とも同型ナツメ。横成確認良好で淡灰色を示す。13は黄元底層30cm。一部に指痕が見える。14は黄元底層22.4cm。体部内面には同型ナツメ印の当て具。外面は印の横丁平なナツメ調。15は外面を中心に自然磨耗がみられる。体部内面は当て具をナツメ印している。16は黄元底層26.0cm。

高杯(17) 脚部の破片で、粘土は濃褐色の砂粒を多く含む。横成は良好で色調は淡灰色を示す。脚部内外面は同型ナツメ調。



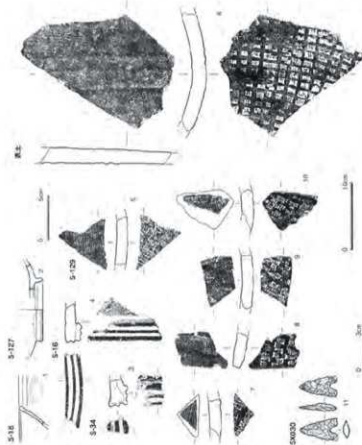


Fig. 25 その他の遺物出土物家断面 (1)は1/2、1-2は1/3、真は1/4)

平瓦 (9~10) 全て凸面に「目」のような格子印を施す。凹面には赤白釉が施る。胎土には  
 8.1cm前後の粉粒を僅かに含む。5は地成員が均一で褐色を呈する。S-129より出土。6は地成員良好で褐色  
 を呈する。基土より出土。8は断面がへら切りで、凹面断面は厚縁するがヘラズリを行っている。  
 地成層元が今や不具で褐色色を呈する。S-34より出土。9は地成層元が今や不具で淡褐色を呈す  
 る。凹面には横溝が施る。S-34より出土。10は地成層元が今や不具で灰色を呈する。S-34より出土。  
 石版瓦

石版 (11) 縦2.9cm、幅1.6cm、厚さ6.5cm、突山割製。S3006出土。

(4) 小橋

調査区の北西角を土取り遺構が占め、その南側を占めた部分で、柱状建物や条形瓦葺の溝が確認さ  
 れた。主な遺構は奈良時代と糸島朝越後の12〜13世紀代の遺構で、平安時代にはS3065やS3185など  
 の遺構があまりの遺構は少ない。

調査区で最も遺構として、8世紀前半に25133060や25133090 (226・23060) の柱状の建物が発見さ  
 れる。その建物付近は井上東坊屋の16系に位置し、ちょうどその付石間20m間で東西遺構が多く検出さ  
 れた。埋没時期がそれぞれ黒砂に基となるが、奈良時代がS3065とS3045 (S3185) で、平安時代には  
 南に下がったS3065とS3062間 (S3200) が16系の遺構と確認される。この付近が遺跡の埋没域であ  
 ったと考えられる。また、25133165に取り付く井上東坊 (25133200) があるが、これは25133060発掘  
 後に製造され、16系南より先に増設している。25133060が25133060 (236・25060) と共に竣工し間に  
 存在したものと推測される。

また、調査区内に広がる土取り遺構は、併結する第216・2302・2553遺構でも確認されている。土  
 取り遺構は前述した16系跡を横切っており、出土遺物は8世紀代の遺物であることから、奈良朝越後  
 の12世紀代に本規模な土取りが行われたと考えられる。土取り遺構の南には部今飯倉土みど自然種  
 類した遺構が見られないため、部今飯倉設置されることなく、途中に部今飯倉を行われたことが理解で  
 きる。

土取り遺構跡は後に条形の正方位と異なる形の柱建物 (S3130やS3185) や溝が検出された。条坊境  
 地帯に土取りが行われ、その後13世紀代に居住域として利用されたと考えられる。その後の遺構遺物  
 とは関係に等しい。









調査区	調査区名	調査区番号	調査区面積		調査区容積		調査区容積率		調査区容積率(%)	
			面積(m <sup>2</sup> )	容積(m <sup>3</sup> )	容積率	容積率(%)	容積率	容積率(%)		
調査区別	調査区1	調査区1	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000
	調査区2	調査区2	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000
	調査区3	調査区3	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000
	調査区4	調査区4	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000
	調査区5	調査区5	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000
	調査区6	調査区6	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000
	調査区7	調査区7	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000
	調査区8	調査区8	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000
	調査区9	調査区9	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000
	調査区10	調査区10	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000

## 2. 第255次調査

### (1) 調査に至る経緯

調査区は本学理工系棟3丁目305-7の一角で、2005(平成17)年12月5日から2006(平成18)年3月18日にかけて発掘調査を実施した。調査区は調査一帯相当した。調査面積は1113.0<sup>2</sup>である。

### (2) 基本情報

第255-1次調査の北側に全く同じ朝方位で、軒間などの建りの上りの下を流れる赤褐色土があり、その下に粘土とみられる赤褐色土があり、その下に包含層があり、その下に遺構が確認される。北西部で亀かに形跡があり、2面の遺構が存在した。また、遺構北面には現地から深さ約1.5m付近で、掘出時の遺物は灰褐色土で取り上げている。

### (3) 検出遺構

#### ○第1面

#### 遺構柱脚構

**25558015** (F16.35)  
南北2間(4.5m)×東西3間(5.6m)の東西構で、柱間は東西1.7~2.0m、南北は2.25mを測り、南北はなく北柱東西を測っている。S3001の粘土土を掘り出した段階で確認でき、4では掘り方がS3001によって切られている。掘り方は片断で、掘上は灰褐色土や赤褐色土などで掘山の表土より掘り上がったものである。

#### 25580045 (F16.36)

調査中は構と考えると、整理中に建物になることが判明した。東西2間(7.16m)×南北2間(5.6m)の東西構で、北側に西側にそれぞれ1間分(1.6m)の庇が付いている。南北は8<sup>1</sup>×7<sup>1</sup>、6<sup>1</sup>を測る。柱間は南北1.8m、東西2.1~2.3mで北西側の柱間は2.7mとやや広い。掘り方は約0.2~0.4mの片断で、掘上は沢を多く含んでいる。南東側の柱穴をS3001に切り込んで掘り出された。その柱穴はS3001の断面後に確認している。S3001の掘り込みの土と柱穴の掘上の区別が明確でなかつた可能性も考えられ、南東側の柱穴が確認できたことを重視し、S3001に切り込みで建てられたものとする。

#### 25580050 (F16.27)

南北2間、東西2間の建りの南に基が付く柱北構で、柱間は南北3.0m、東西1.5m、東との間は1.6mと1.4mを測る。南北は8<sup>1</sup>×7<sup>1</sup>、3<sup>1</sup>×7<sup>1</sup>である。庇は庇後して同じ柱間の柱穴が掘り出されており、建替えがあったと考えられる。北側の掘り方はS3001によって切られていて、その他の掘り方は調査時は建物の遺構がなく、掘削してしまつた。

#### 25580060 (F16.27)

調査区東端で検出されたため、内容は不明だが、隣接する第256-1次調査で掘出したS3060と合わせると南北5間、東西2間の南北構と考えられる。柱間は南北2.1m、東西1.8m、東との間は2.2mを測る。南北は8<sup>1</sup>×7<sup>1</sup>、3<sup>1</sup>×7<sup>1</sup>である。片断の掘り方で遺構検出時に柱脚は確認できる状態であった。柱脚間の径は約0.1mである。

#### 25580070 (F16.28)

調査区北西部に位置し、第257次調査と近い。第257次調査では柱穴が不明瞭だが、建物本体は第257次と合わせると市面する3間×3間の東西構で、南北東西共に北1間×1間×1間と推測される。柱間は東西2.1m、南北1.5mで、掘り方は片断で径0.25~0.45mを測る。S3000によって切られ

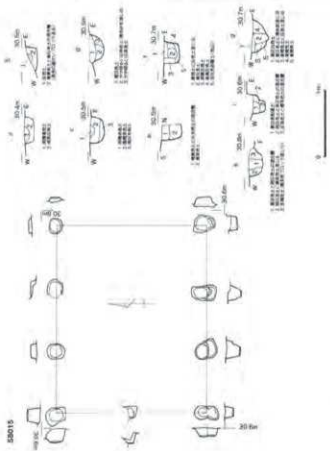


Fig. 26 25538015・045 遺構発掘図 (1/40, 1/80)

53015

53050

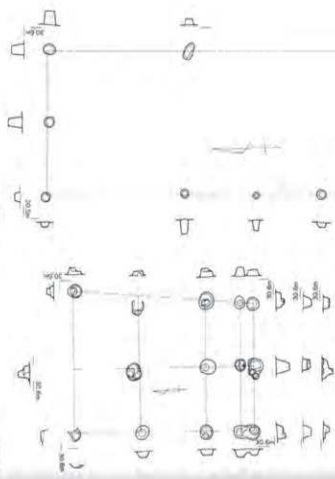


Fig. 27 25538050・060 遺構発掘図 (1/80, 1/40)

ている。

25538080 (Fig. 28)

南北8間以上、東西2間の南北棟で、柱間は全ての2mで、全体で南北は6m、東西1.6m、張力は8.3°、44°、48°である。

25538085 (Fig. 29)

南北2間、東西2間の東西棟で、柱間は南北1.20mと0.88m、東西1.6mで、全体で南北2.16m、東西3.6m、張力は23.3°、33°、38°である。

53045

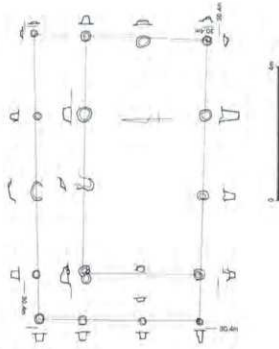


Fig. 28 25538015・045 遺構発掘図 (1/40, 1/80)

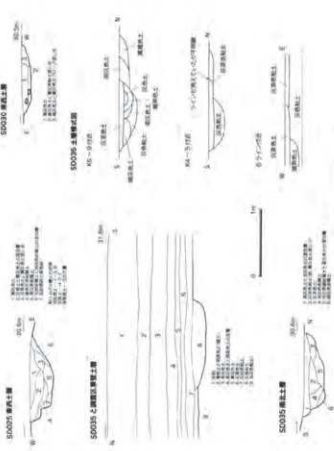


Fig. 29 S5000S・000・005 透視立面図 (1/40)

南

S5000005

南北側であるが、やや西に張れている。棟出長11.1m、幅0.6~1.3m、深さ0.00~0.10で、北側はS3001やや北によって切られ、その延長は確認できない。床土はやや傾斜しづかい灰色粘質土で、建物は上層から第2層と出上する。

S5550010

東 $2^{\circ}29'21''$ の東向きで、棟出長0.6m、幅0.20~0.65m、深さはほぼ一定で0.1mを測る。断面U字形で、床土は灰色土である。

S5550025 (F.16.29)

東 $5^{\circ}30'41''$ の南北側で、やや西に張れているが、S5000と平行している。棟出長19.3mで、幅1.05~1.3m、深さ0.2~0.3mを測り、前後は調査区外に隠れている。前後の一部は断面3段の部分を示しているが、全体としては1~2段で断面進行を示す。床土は腐葉土で、次ぎと上下2層(褐色土と灰色土)に分層され、上層に土師器を中心に遺物を多く含む。下層は上層よりやや粘質が強い。断面は白色粘砂や黄灰色土で、白色粘砂は層部が同質であることから、判別は困難な所もある。

S5550030 (F.16.29)

東 $0^{\circ}28'39''$ の南北側で、S5005と平行している。棟出長16.7m、幅0.42~1.12m、深さ0.05~0.1mを測り、前後は調査区外に隠れている。S5005と異なり、断面形状も良いU字形で、遺物も少ないが、マインより北側はS5005と同様に多い。階段の部が同じS5005との間は道面と考えられるが、一部床が段分かれし、道断面を横切っている。その横切っている床がS5003によって切られている

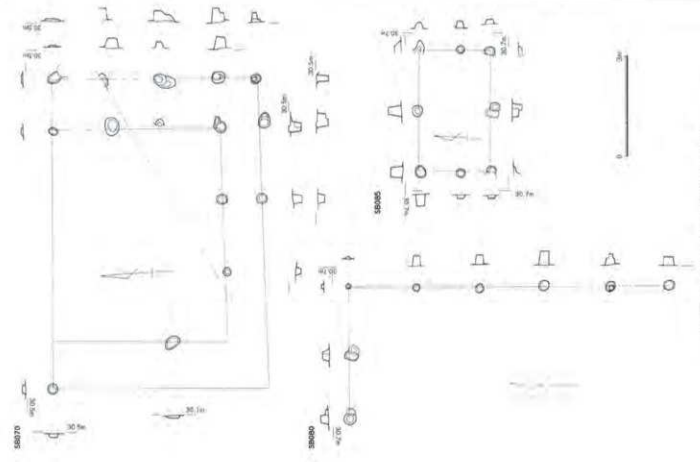


Fig. 28 S5550S70・080・085 透視立面図 (1/80)



ことから最終埋没は S0025 より前か同時かあったと推測される。

#### S0030035 (Fig. 20)

E-0° 7' 15" の東西横断は若干複雑で、埋没状況は若干複雑で、半分から南側の隆上層である灰茶色土は深さ 0.6m 程度で、11 世紀後半ごろの土師器の小皿や中皿の破片が多く見られた。北側プランはやや傾斜している。それを除去すると一帯層山から思える茶色土を含む埋没層があり、その下に灰茶色土が堆積している。北側はだらだらと灰茶色粘土・黒褐色土・黄褐色土が強く層積している。北側のぶらぶらしたやや不明な部分のみならず、灰色粘土は断面図で見ると、東西の明確な層になり、幅 0.45 ~ 1.4m、深さは埋没層から 0.2 ~ 0.4m を測る。埋土は 7 世紀末の遺物が殆どで、最上層と遺物・土層からも明確に分層できる。

以上のようになるとこの層は大きく分れば北側にクラス層がある 2 段に張り込まれた層であるが、埋没時期が明確に異なることから、400 年の期間に層が存在したとは言えないが何らかの区画として区画されていたため、同じ場所に何層も層が重なったと推測される。全体の検出長 19.6m、幅 3.5m、深さ 0.2 ~ 0.4m を測る。両端は埋没層外に傾いている。

#### 井戸

#### S25SE020 (Fig. 30)

S0001 の埋土に切り込んだ状態で確認できる。東西 1.4m、南北 1.1m の円形掘り方の井戸である。埋土の上層は灰茶色土と白灰色土との互層になり、最下層は黒灰色粘土と白灰色土である。埋土の上層には花崗岩層が主とまると検出された。井戸体部分には埋め込まれたものと推測される。埋土から井戸体や動物の破片は検出されていないが、以上のことから井戸と埋没層とを区別する。

#### S25SE040 (Fig. 30)

東西 1.5m、南北 1.65m、深さ 1.6m の円形掘り方の井戸である。埋土から井戸体確認らしきものは確認できなかったが、井戸体は全く確認できなかった。断面には大小 2 個の動物が上下 2 段で確認されたが、傷が木片が残る程度であった。上段の動物は径 0.57 ~ 0.03m、深さ 0.25m、下段は径 0.39 ~ 0.40m、深さ 0.19m を測る。動物の集込みは黄灰色砂質土である。

#### 土坑

#### S25S0055 (Fig. 30)

掘り方は東西 0.25m、南北 0.26m、深さ 0.16m の円形土坑で、そこに鉢を置き、その内部には灰土が逆さになった状態で埋められていた。鉢と掘り方の間は白灰色粘土だが、意図的な自衛的な土質変化の分は不明確。

東側は S0001 と接しているが、切り合い関係は不明確である。しかし、土層の東側の欠損が目立つため S0001 によって確認された可能性が考えられる。

#### S25S0055 (Fig. 30)

南北 0.45m、東西 0.47m、全体の深さ 0.46m の円形土坑で、灰茶色土に土師器の小片と灰が多く混じった埋土に、遺物が埋め込まれた。その埋土と縁を除去すると大きさ 0.23 × 0.26m、深さ 0.37m の円形ピットが掘られていた。このピットには灰土層と土質は少ない。

#### 土器埋没層

#### S25S0001

埋没層の東側を中心に検出された。東側の第 251 水溝管で検出された土取り遺層と全く同じである。土取りの東部は鋭く切り込んでいるところも見られる。埋土は埋没層と灰茶色土と黄褐色土の混合層

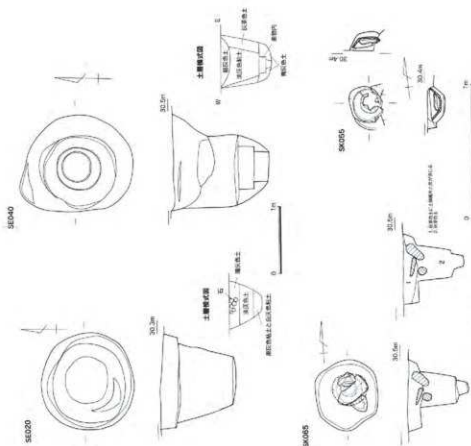


Fig. 30 S25SE020 - 040, S0055 - 065 遺構実測図 (1/40, 1/20)

である。調査地の自然は砂質土であることから、これが粘土質層の土取り層であったことが窺われる。

#### 遺構遺構

#### S25SE075

S25S0025 と S0030 を測線とする道路と考えられる。傾斜は N 2° 11' 14" - 北。道路の幅は 1.0m ~ 1.0m で、北に行くにつれて狭くなる。埋没層はほぼ同じで、S0030 から検出された層が S0025 によって切り取られていることから最終埋没は S0030 より前か同時にあったと推測される。

#### 〇第 2 面

北側で若干安定した埋没層が検出され、ピットや土坑が切り込み、西側を S0025 が切っているため、整理と判断した。整理は S-129 として調査を行った。

また、調査区両端で自然傾斜ではないとみられる埋土が半状に堆積され、50000 が埋り込んでいたため、造成積面と積層が明らかに異なるものと判断し、S-128と遺構番号を付し2断面として調査を行った。

(4) 出土遺物

埋立柱遺物

255380151 出土遺物 (F14.31)

埋立柱

遺 (1) 外面は叩き目が残り、内面は当て具跡を粗くナゲ削している。造成層云は良好で黄灰色を呈する。

255380425 出土遺物 (F14.31)

土器器

杯 a (2) 復元口径 7.4cm。底部は回転へつ切りで、板状圧痕が見える。

土器品

土器 (3) 胎土は 0.6cm 以下の砂粒を多く含む、スチ炭も残る。一部平坦面も残る。空筒部分が多いためか重さは軽い。

遺

25530005 出土遺物 (F14.31)

埋立柱

大筒 c (4) 高台径 12.2cm。造成不良で表面白色を呈する。

遺 (5) 口径 10.3cm。口縁部は回転ナゲが見えるが、その中は漸減により調整不明。造成層云は不良で淡緑白色を呈する。

鉢 b (6) 復元口径 27.2cm。内外面とも回転ナゲ。口縁部は回転ナゲ調整し平用に仕上げている。造成はやや不良で淡灰白色を呈する。

瓦類

軒瓦 (7) 瓦当の副縁部で、残欠部分が残っている。造成は不良で土質である。

瓦器類

25530010 出土遺物 (F14.31)

遺 (8) 復元高台径 8.2cm。体部外面下半は回転へつケズで、中位はその後粗くナゲ調整。内面は回転ナゲで、底部に付着物が見られる。造成良好で黄褐色を呈する。

土器類

25530025 土層出土遺物 (F14.32)

土器器

小皿 a (1, 2) 復元口径 8.0cm、9.2cm で、磨滅し調整不明。

埋立柱系埋立柱

遺 (3) 埋立柱面付近の破片で、胎土は 0.1cm 前後の砂粒を少量含む。造成は良好である。色調は黄灰色を呈する。内外面回転ナゲ。底部外面は切り履し層未調整。

25530025 淡灰色土出土遺物 (F14.32)

土器器

小皿 a (4 ~ 18) 4 ~ 16 は復元口径 8.0 ~ 10.0cm、器高 0.7 ~ 2.1cm、復元底径 6.1 ~ 8.1cm。底部切履しはへつ切りである。底部に板状圧痕が浅く残るものがある。16 はやや低い小皿である。17 は若

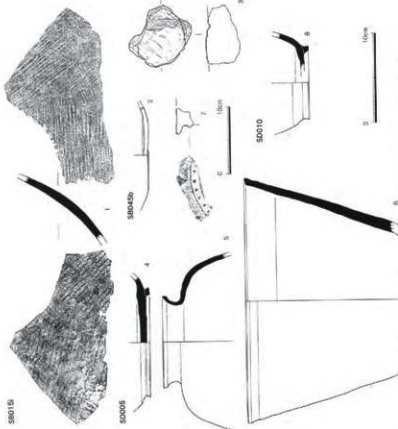


Fig. 31 25538015・045・50005・010 出土遺物実測図 (1/3, 7は1/4)

平大きく復元口径 11.9cm、器高 1.4cm、復元底径 9.1cm。  
 杯 c (19) 細い高台を付し、復元高台径 5.1cm。  
 杯 (20) 杯の底部付近の破片で、内外面に重畳が見られる。墨書は転写文字だが、内容については不明である。

杯 a (21, 22) 21 は底部は回転へつ切りで、その中は回転ナゲ調整。22 は復元口径 12.6cm、器高 3.2cm、底径 9.0cm、外底部はへつ切りで、板状圧痕が見える。その他は回転ナゲで、内面底部は一部ナゲ調整。色調は淡灰白色を呈する。

丸底杯 a (23 ~ 28) 復元口径 12.4 ~ 16.6cm、器高 2.65 ~ 3.6cm、23 の内面に粗かにミザキムが残るが、全体的に造成不良で磨滅が目立つ。色調は淡白褐色などを呈する。

器台 (29) 器蓋で、上下大筒形構成が目立つが外面には指形凹溝が浅く残る。胴部表面は 4cm 前後で、中央は 1.2cm 程度空筒になっている。

脚付鉢 (30) 胎土は 0.3cm 未満の砂粒を多く含む。淡い黄白色を呈する。造成はやや不良で磨滅が目立つ。

鉢 (31) 復元口径 22.6cm、胎土は 0.1cm 前後の砂粒を少量含む。淡灰白色を呈する。造成不良で外面は磨滅し調整不明だが、内面はナゲ調整。



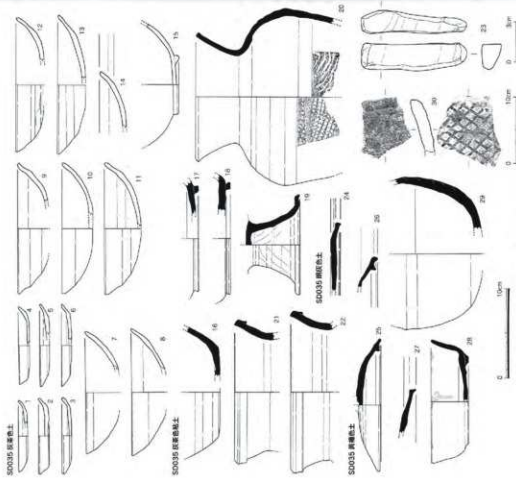


Fig. 33 25550035 出土遺物実測図① (1/3, 23 は 1/2, 30 は 1/4)

高杯 (19) 復元器高径 11.2cm. 器壁高 6.0cm. 胎土は精製され産成は良好。色調は褐色色や白灰色を呈する。内外面回転ナズ調整。  
 蓋 (20) 復元口径 14.5cm. 胎土は 0.1cm 前後の砂粒を多く含む。底成良好だが、還元不良で淡紫褐色を呈する。外部外周下半は叩きで、内面には当て具成も残る。その他の内外面は回転ナズで、外面局部はやや強い回転ナズ。  
 壺 (21, 22) 復元口径 16.0cm. 色調は外外面とも黄褐色で、内外面とも回転ナズ。22 は復元口径 18.0cm で、色調は内外面とも白濁した黄灰色で、内外面とも回転ナズ。  
 石製品

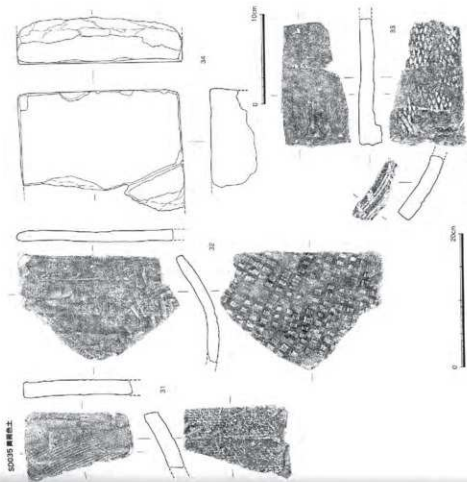


Fig. 34 25550035 出土遺物実測図② (1/4, 34 は 1/3)

砥石 (23) 長さ 9.8cm. 幅 2.0 × 1.5cm. 4 面使用されている。砂岩製。

25550035 明褐色土出土遺物 (Fig. 33)

須臾器

蓋 3 (24) 外面は回転ヘラクセスリ。内面は不定方向の丁寧なナズ。胎部は密かに三角を作り出している。色調は黄褐色を呈する。

25550035 黄褐色土出土遺物 (Fig. 33・34)

須臾器

蓋 1 (25) ツヤミは欠損する。外面上半部は回転ヘラクセスリ、下半は回転ナズ。内面上部は回転ナズ後ナズ調整。還元不良で軽い赤灰色を呈する。

蓋 1 (26) 胎部で回転ナズ。外面上半部は回転ヘラクセスリ。

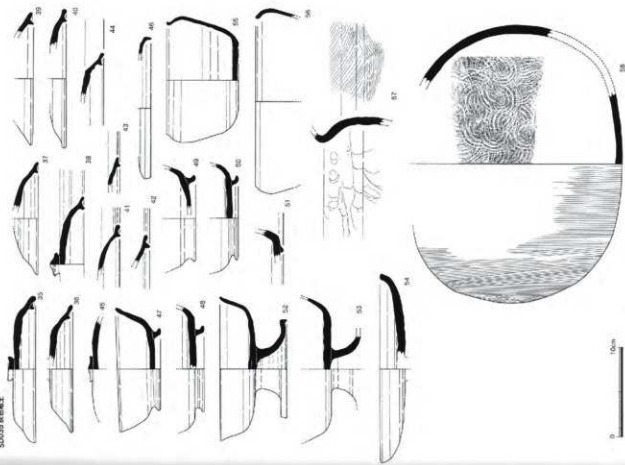


Fig. 35. 25530035 出土遺物銅器類(1/3)

蓋 3 (27) 縁部は細い三角形を呈する。外面上半部回転ヘラケズリ、その他は回転ナズ。外面の色調は黒灰色を呈する。

弁 (28) 復元口径 13.8cm、器高 4.2cm、高台径 9.8cm、低い右側の高台を帯付する。内面口縁部付近には横線が付着する。

冠 (29) 丸瓶のある体部で、外面回転ナズ、内面ナズ調整。軸上は砂眼を多く含む。焼成還元は良好で褐色灰色を呈する。

互刺

容瓦 (30 ~ 32) 30 は凸面に太めの筋方明きを施す。31 は罫目印きだけの筋線が目立つ。罫目には糸切り筋が残る。32 は筋子目印きで、筋子内に筋のみがあり、「目」の字のような向き目である。軸上は 0.1cm 前後の砂眼を多く含む。単成または還元調整に仕上がっている。表面は黒灰色を呈する。

軒瓦 (33) 互刺面は浅い直線文があるが腐蝕が目立つ。凹面は布目状で、凸面はやや大きい罫目明成が残る。軸上は 0.1cm 前後の砂眼を多く含む。焼成は不良で黒灰色を呈する。

土師皿

樽 (34) 胴 18.4cm、軸上は 0.1cm 前後の砂眼を多く含む。黒白褐色で表面の一部は黒褐色を呈する部分がある。

#### 25530035 灰色粘土出土遺物 (Fig. 35 ~ 36)

須臾器

蓋 c1 (35 ~ 38) 焼成還元は良好。35 は口径 18.3cm、器高 3.1cm、外面上半部回転ヘラケズリ、その他の内外面は回転ナズ。色調は黒灰色を呈する。36・37 はツマミを欠損する。外面上半部回転ヘラケズリで、その他は回転ナズ。内面上半部はその後ナズ調整。色調はやや暗い青灰色を呈する。38 は器底部のツマミを帯付する。外面は口縁調整の回転ナズ以外は回転ヘラケズリ。内面は回転ナズ。

蓋 1 (39 ~ 41) 口縁部部の破片で、回転ナズ調整。40・41・44 の外面上半部は回転ヘラケズリ。41・43 は還元不良で褐色灰色を呈する。

蓋 c (45) つぶれたツマミを帯付する。上半部の破片のため、外面は回転ヘラケズリ。内面は不定方向のナズで、やや滑らかになっている。復として再利用した可能性もある。

蓋 2 (46) 口縁部を長く削り曲げている。内外面とも回転ナズで、外面上部はその後ナズ調整。口径 15.4cm。

弁 (47 ~ 61) 51 以外は外側に筋に沿ったやや高い溝台を帯付する。47 は口径 11.7cm、器高 4.8cm、復元高台径 9.0cm、内外面回転ナズで、内面調整は縦交する 2 方向のナズ調整。色調は褐色灰色を呈する。48 は復元高台径 9.5cm で、底部外面にヘラ型筋を施す。49 は還元不良で淡褐色を呈する。50 は褐色灰色を呈する。51 は底の浅い小さな溝台を帯付する。

高杯 a (52, 53) 52 は復元口径 16.0cm、器高 7.5cm、胴部径 11.0cm、縁部は良好で青灰色を呈する。内外面還元不足方向のナズ。それ以外は回転ナズ調整される。53 は 52 とほぼ同じ形だが、上下端部欠損する。還元不良で淡褐色を呈する。2 点とも内外面とも回転ナズで、内面底部がナズ。高杯 b (54) 胴部の破片で、復元口径 21.0cm、外面下半部は回転ヘラケズリ。口縁部は回転ナズ。内面調整はナズ調整である。焼成は良好だが、還元不良で褐色灰色を呈する。

蓋 (55) 口縁部を内側向き、底部を僅かに外反させる。口径 12.5cm、器高 8.05cm、底径 7.7cm、軸上は白色粘土を多く含む。青灰色を呈する。外面底部は回転ヘラケズリ。その他は回転ナズで、焼成時に器面が膨張し、凸凹している。

鉢 (56) 口縁部を大きく内湾させる。復元口径 18.6cm、焼成還元良好で褐色灰色を呈する。

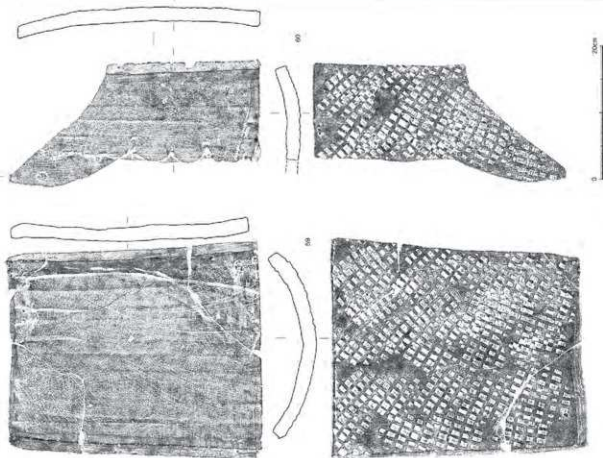


Fig. 36. 25530035 出土遺物実測図④ (1/4)

鏝 (37) 作部の破片で、胎土は0.3cm前後の黒色粒を多く含む。外面には舟形目、内面はヨコナツで相間作目が残る。焼成良好で灰白色を呈する。

轆瓶 (38) 外面は舟目、内面は同心円の当て足筋が残り、胴部部分だけ接合のためのナツがみみ入れ。焼成は良好で、褐色青色を呈する。

## 瓦類

平瓦 (59, 60) 2点とも同じ明き目で、格子内に刻み目を入れ、「日」の字のような明き目をしていり、内面は舟目と轆轤目が残り、側面はへラケズ加工している。59はほぼ完形だが、全体が若干ねじれている。縦33.8cm、横27.78cm、厚さ2.0cm。胎土は0.4cm前後の砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。内面は舟目筋が明瞭に残り、上面の相間作部はヨコナツし組残っている。60は胎土に0.3cm以下の砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は暗灰色や灰白色を呈する。

## 井戸

25530020 暗灰色土出土遺物 (Fig. 37)

## 瓦類

平瓦 (1) 内面に格子形とナツ調様され、「半井」の文字の一部が確認できる。胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好で暗灰色を呈する。

25530040 淡灰色胎土出土遺物 (Fig. 37)

## 土師器

小皿 a (2) 口径10.0cm、器高1.2cm、覆元底径7.8cm。調様は磨滅し不明。

25530040 灰褐色土出土遺物 (Fig. 37)

## 土師器

小皿 a (3-5) 覆元口径8.6-10.6cm、器高0.9-1.3cm、覆元底径5.6-8.3cm。全体の磨滅し調様不明瞭。色調は淡白褐色を呈する。

## 黒色土器

陶 c (6-8) 6は若干丸い高台を胎付する。高台径5.6cm、A頸、7は高台径5.9cm、B頸、8は口縁部が僅かに外反し、口径16.5cm、高台は欠落している。内外面はミガキが見られるが、外面は調様が目立つ。外面底部には胎付圧痕が残る。

25530040 青灰色土出土遺物 (Fig. 37)

## 土師器

丸底鉢 a (9) 内面ミガキ、外面下半はへラケリ後ナツ調様。色調は淡白褐色を呈する。

## 土坑

25530055 出土遺物 (Fig. 37)

## 土師器

丸底鉢 (10) 覆元口径15.2cm。焼成不良で調様不明瞭。

片口鉢 (11) 口径24.3cm、器高7.65cm、底径14.0cm。胎土は0.5cm前後の砂粒を多く含む粗い内外面ともナツ調様される。焼成は不良で、色調は黄褐色を呈する。

## 朝鮮系陶器類

鏝 (12) 底部付足の破片で、外面底部はナツ調様で、一部工具痕が残る。内面は明きの相間作ナツ、外面は同心円胎ナツ調様。

25530065 出土遺物 (Fig. 37)

## 石製品

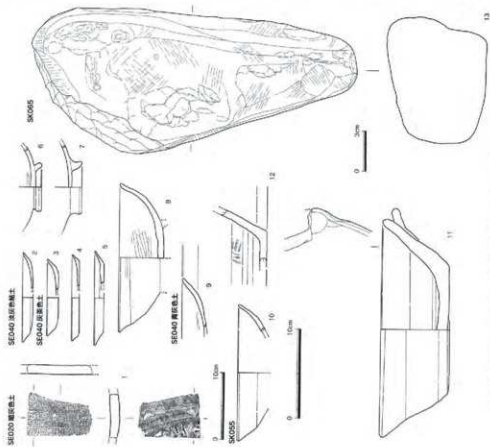


Fig. 37 255SE020-040, SK055-065 出土遺物実測図 (1/3, 1は1/4, 13は1/2)

磁石 (13) 縦24.4cm、横9.45cm、厚さ8.2cm、上面使用され、一部破損面がみられる。赤みがかった灰白色の砂分混。

土製刀遺構

255SK001 出土遺物 (Fig. 38)

須置器

内裏は(1) 硬面は使用により滑らかになり、一部破損もみられる。断面には粘土の露出面が確認できる。焼成は良好で暗褐色を呈する。

脚付盤 (2) 第206-1次調査で多く出土した最も同様のものである。胎土は0.1cm前後の砂粒を多く含み、焼成は不良で灰白色を呈する。

土製器

小皿 a (3, 4) 3は底径11.8cm、器高1.0cm、復元底径6.8cm、全体薄減し調整不明、4の底部切り崩しは糸切りで、底部圧痕が現る。

杯 a (5~7) 5は底径薄減し焼成は良好である。高台は若干厚みがある。6・7は体部が若干反るよう外反する。7の底面切り崩しは糸切りと思える。

陶 c (8) 大きく低い高台を帯付する。焼成は不良で淡褐色を呈する。

土底杯 a (9) 復元口径14.6cm、外面下半は指頭圧痕が残るが、全体的に磨滅する。

須置土器

鉢 (10, 11) 肥厚した口縁部の痕跡。色調は灰青色などを呈する。裏面系。

器輪陶器

皿×椀 (12) 縁は剥落し、高台断面部に僅かに黒白色輪が残る。高台はケズり出しの腕の肩高台である。焼成は灰白色か灰褐色を呈する。復元高台径8.2cm、高底径。

片磁

鉢 (13) 内面と外面は薄く磨滅されるが、高台内面と管付はほぼラケズリのまま磨滅である。II小皿。

小皿 (14) 底径2.9cm、外面には高い化粧が施されている。胎土は緻密な砂粒を混かに含む。内外面には淡褐色輪が薄く磨滅され、内面底部には輪が少し磨滅している。底面外面は磨滅である。

皿底紫系青磁

柄 (15) 高台内面に磨痕が見られるが欠損しているため文字はわからない。I類。

瓦類

平瓦 (16~19) 焼成は良好で淡灰白色を呈する。16は格子目に「平井」の文字がある。17は「平井五郎」と文字の一部が欠されている。18は二重の格子目直下で、側面に分断線で切開するもその裏未調査。19は格子目の内面に磨痕が見られる向きである。

丸瓦 (20, 21) 20は格子目に「平井」の文字がある。21は格子内に部分的に十字字のような模様が入る向きで、側面は「ラケズリ」。

土製土

土製 (22~29) 胎土は0.1cm前後の砂粒を多く含み、高褐色を呈する。スチル痕もみられる。22~25は背腹みに巻いていったような磨滅する。22・29の背腹面は底縁から径1.5cm以上の大きさである。24の背腹面は底縁から径2.5cm以上の大きさである。28の背腹面は底縁から径1.5cm以上の大きさである。28は土製器残片が一組に纏りこまれている。

土質

第205次調査区褐色土出土遺物 (Fig. 39)

黒色土器

埴 c (1) 低い高台を帯付し、復元高台径6.4cm、焼成やや不良。II類。

須置土器

鉢 (2) 肥厚した口縁部で、外面はやや粗いナツラ磨滅。

器輪陶器

文目皿 (3) 内外面に光沢のない黒褐色胎土を露出するが、体部下半は磨滅。復元高台径3.9cm。焼成は良好である。

初期高麗青磁

碗 (4, 5) 4はI類、内外面に淡褐色輪を呈し、高台管付は磨滅で、口縁のような磨滅が見ら

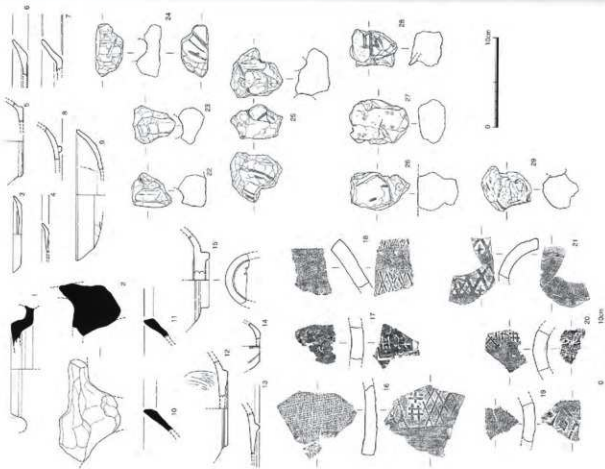


Fig. 38 255SX001 出土遺物実測図 (1/3, 瓦は1/4)

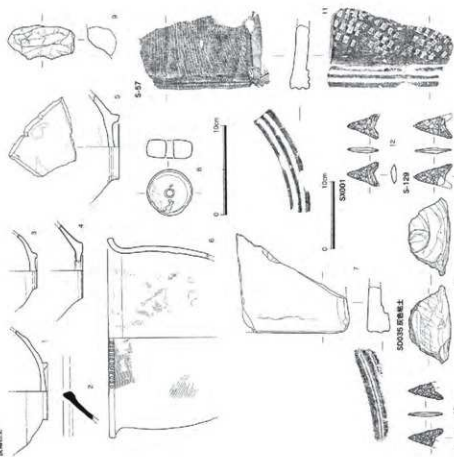


Fig. 39 著 255 次調査区得遺土・その他の遺構出土遺物実測図 (1/3, 石類は1/2, 瓦は1/4)  
 れる。5は皿・2瓶。内外面に鮮黄緑色釉を施し、高台部分だけ釉をふき落している。

赤生土器

標 (6) 口縁部に斑み目を施す。体部外面はタテハケ溝型。内面は付着物があり不明視。胎上は砂粒を多く含む、茶褐色や黄褐色を呈する。

瓦類

軒平瓦 (7) 瓦当は彫りの浅い透氣文で、それ以外は筋溝が目立ち、凸面には小さな格子目が見られる。胎土は0.3cm以下の砂粒を多く含む。底成は平や不具で、色調は淡灰白色である。

土製品

胎種成 (8) 径5.0×高3.1cm、厚さ2.1cm、色調は淡灰色を呈する。



トリアベ (9) 破片で全面はつらつかにく。筋土は縦紋を多く含む灰褐色を呈する。

石製品

石鏝 (10) 縦2.6cm、横1.25cm、厚さ0.3cm、黒曜石製。

その他出土遺物 (P14, 39)

瓦類

軒平瓦 (11) 瓦当面と凸面は縁は墨書文を施す。凸面は目目の字のような格子暗きを施す。筋土は0.4cm程度の砂粒を多く含む。底面は長尺で灰色を呈する。S-57より出土。

石製品

石鏝 (12, 13) 12は縦2.35cm、横1.8cm、厚さ0.4cm。安山岩製。SK001より出土。13は縦2.75cm、横1.2cm、厚さ0.4cm。安山岩製。S-129より出土。

破片 (14) 楕円形片で、自然面も残す。縦3.1cm、横4.5cm、厚さ0.8cm。安山岩製。SK035灰色粘土より出土。

(8) 小輪

確認された遺構面はほとんど1面で、北端や東端で幅かに2面確認できた。調査地の半分近くを土取り遺構が占めている。

土取り遺構に重複しながら、大規模ではない立脚柱礎物が7棟確認されている。時期判断が難しいが、SK015が若干古く奈良時代の可能性があるものの、殆どが平安時代後半頃のものと推測され、井戸2基あるが、いずれも11世紀後半～12世紀代で、奈良時代の遺構はSK035のほかSK005やSK010など僅く3基のみで、調査地の南側に多く確認されている。

調査区中央で検出された25SS0035は、上部が11世紀後半～12世紀前半、下部が7世紀末～8世紀前半の埋没で、埋土は明確に分離される。この状況から埋没は竣工1期に掘削され、8世紀前半には一度完全に埋没し、その後平安時代になるまで掘り直されることなかったと推測される。また、第236-2次調査で検出された236-2SK001やSK002やSK003の延長上であり、その南側4.8mの所に236-2SK0035が平行していることと考えると、同じく埋没で検出された25SS0022をおとした道路がある可能性が考えられる。土取り遺構が25SS0035を境んで南側にあり、この溝を掘した上で土取りが行われた可能性も考えられる。つまり、SK035は構として南側であり、溝を越えて表土区画設計上埋没されたと推測される。

調査区南側にあるSK035とSK030の溝は2本の溝に挟まれた空間は平安時代後期の遺跡と考えられる。概は埋没部が最も広くて3.0m、最も深い埋没部で1.06mを測る。SK030から派生した溝がSK025によって切られていることとSK025が遺物を多く含むことなどからSK025だけはSK030より長く使用されたことが推定される。よって、東側溝であるSK035の最上層と最終埋没段階である可能性が考えられる。井上条分堀から推測すると条分堀には該当しないため、その他の遺跡や区画と推測される。

表 3 調査区調査 遺構一覧表

番号	遺構名	形状	位置	用途	年代
1	SK001	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
2	SK002	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
3	SK003	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
4	SK004	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
5	SK005	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
6	SK006	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
7	SK007	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
8	SK008	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
9	SK009	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
10	SK010	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
11	SK011	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
12	SK012	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
13	SK013	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
14	SK014	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
15	SK015	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
16	SK016	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
17	SK017	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
18	SK018	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
19	SK019	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
20	SK020	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
21	SK021	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
22	SK022	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
23	SK023	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
24	SK024	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
25	SK025	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
26	SK026	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
27	SK027	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
28	SK028	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
29	SK029	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
30	SK030	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
31	SK031	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
32	SK032	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
33	SK033	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
34	SK034	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
35	SK035	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
36	SK036	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
37	SK037	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
38	SK038	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
39	SK039	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
40	SK040	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
41	SK041	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
42	SK042	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
43	SK043	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
44	SK044	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
45	SK045	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
46	SK046	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
47	SK047	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
48	SK048	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
49	SK049	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
50	SK050	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
51	SK051	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
52	SK052	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
53	SK053	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
54	SK054	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
55	SK055	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
56	SK056	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
57	SK057	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
58	SK058	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
59	SK059	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半
60	SK060	石製品	調査区北東部	石鏝	7世紀後半







### 3. 第25次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市東家3丁目305-7の一部で、2006(平成18)年3月20日から、2007(平成19)年3月31日にかけて発掘調査を実施した。調査は竹崎高一、下地大輔が担当した。調査面積は1805㎡である。

2006(平成18)年11月22日には西鉄

機車部が地調査の中間報告という形で、記者発表を行い、翌日新聞各社に掲載される。そして、一般向け児童誌『少年』を11月25日(土)に表紙し、約120名の参加があった。

(2) 基本層位 (F140・41・54・61)  
第20回1次調査の北側と全く同じ層位で、砂利など程度草草の遺物が1m前後全面に散見し、その下に断片土とみられる灰褐色土があり、その下は粘土とみられる黒灰色土、包含層とあり、厚さから1.4m前後で遺物が確認される。

遺構面の層位を基準にまとめると以下のようになる。

Fig. 40 調査区土層断面

- 第1面・・・堀立柱建物 S3001・120等の検出面・・・11世紀後半～13世紀  
2面目の表の面跡が部分的に基土隠れする状況だが、それらの噴土に切り込んだ遺構が中心であるが、場所によっては古い遺構も検出される。
- 第2面・・・林忠勝 S2025の検出面および堀立遺構検出面・・・9世紀代～11世紀後半  
9世紀の遺構に切り込んだ遺構であるが、堀立遺構が未検出の箇所については、1面目と2面目の違いが不明瞭であり、場所が異なる。
- 第2面基層面・S3010より北側に遺構が広がっており、その厚み半分が厚さ0.1～0.2mの灰褐色土で、その厚み半分が0.05m程の厚さで、黒灰色土・黒褐色土・茶褐色土がメーベークに広がっている。この西側半分はその下にはやや硬質で一見基山のような灰白色土や灰褐色土が広がっている。
- 第3面・・・2面目基層面を踏襲して確認した遺構面・・・奈良時代  
9世紀代の基山より古い遺構で、大型堀立柱建物 (S3000)
- 第3面基層面・堀山の内部を穿るように厚さ0.1m前後の遺構がみられるが、この遺構が戦国女の包含層なのか明確でない。これを除去するとやや凹凸のある淡褐色シロト土質土の地盤となる。
- 第4面・・・3面目基層面を踏襲して確認した遺構面  
大型堀立柱建物 (S3000) 以下の遺構より古い遺構となるのだが、今回の調査では土層の遺構の掘り戻しとみられる遺構を確認した以外は、目立った遺構は確認できなかった。

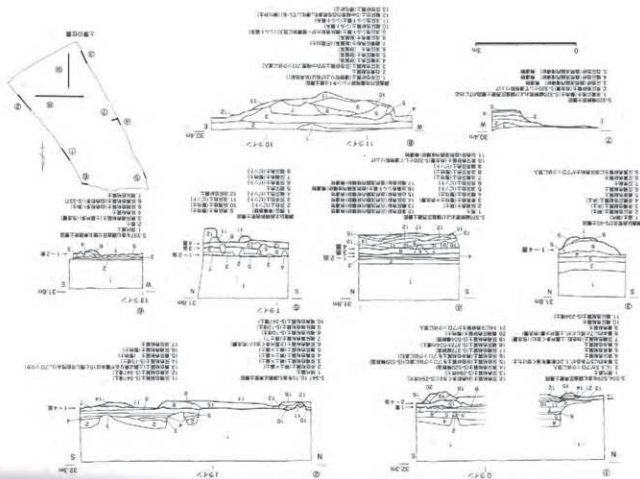


Fig. 41 調査区土層断面 (1/80)

(3) 発出機構

○第1室

第20~1次調査で1面目として調査したが、その中でも切り合いがあり、今回の調査ではそのうち新しい方が重的に覆面していることができたため、1面目として調査した。よって、257次調査の2面目は、20~1次調査の1面目の下の1段階のものといふことになる。調査初期段階で切り合いは殆どなかったため、S016・020・025には一部掘削してしまっただが正式には2面目で記録報告している。

竪柱状建物

25738001 (Pl.42)

2間×3間の東西棟で、周囲全面に1間の庇が付く。庇は梁、桁行先に若干はらつきがあるがほぼ東西を示している。柱間は東西が1.85mで、南北は1.55mを測る。庇の柱間は北面が1.95m、南側が1.9m、東西は5間分確定され、0.7~1.48mと柱間にばらつきがあり、某柱のようなものも含まれているものとみられ、柱先の深さから4間であったと推測される。並と本柱との間隔が北面1.0m、南側2.0mであることから、南側した建物であることが推測され、全体として6.18×9.3mの建物である。掘り方は柱高0.25~0.48m、深さ0.4m前後の円形で、柱高は概0.15m前後である。

この建物は15条路と推測される 2573770・375の真上に建築されており、S8001が建築された直には、この場所が道路として使用されていたことを物語るている。

25738005 (Pl.43)

2間×3間の南北棟で、南側と東面に1間の庇が付く。庇はおおよそN-1° 37' -Eを測る。東側は調査区外で、東面の南20~1次調査で確認されている。掘り方が南円形のものが多く、建群もしくは柱基の除去が行われた可能性が考えられるが、柱穴面前後に建物と認識したため掘り方の照土状況がわからず明確に言い切れない。柱間は南北2.0m、東西は1.5mと2.0m、庇との間は東側が1.0m、南側1.0mである。全体として4.5m×7.0mの建物である。また、建物前面を25738001の南面とラインを一括させていることから、両者は併存していたと推測される。

25738055 (Pl.44)

2間×4間の南北棟で、北と西面に1間の庇が付く。庇はN-1° 45' -Eを測る。掘り方は概0.3m前後の円形を呈し、柱間は桁行1.95m、桁行2.0mで、南側の1.85mを測り、北側に柱間1.0~1.15m離れた庇が付いている。全体として4.9m×9.0mの建物である。

25738120 (Pl.45)

4間×4間の竪柱建物の状況を示しているが、掘り方大ききで深さから、2間×4間の南北棟と推測され、東面それぞれに1部分の庇が付いた建物と考えられる。庇はほぼ北方向を示している。柱間は1.5~2.0mとばらつきがあるが、北面の1間が2.0mと広く、南側の1間が1.0mと狭い傾向にある。全体として建物はほぼ7.2mの正方形を成している。建物の中央には某柱のような柱穴が穿んでいる。また、1ヶ所だけであるが、柱穴に重なるように花崗岩が使用されたため、礎石の役目を果たしていた可能性も考えられる。

25738350 (Pl.46)

2間×3間の東西棟で、南側に庇が付く。庇はおおよそN-1° 50' -Eを測る。掘り方は円形で庇の列は若干深い。柱間は桁行が1.85mで、桁行は若干ばらつきがあり南側1.75~2.0m、全体として4.35m×5.75mの建物である。

25738355 (Pl.46)

1間×3間の東西棟で、南北それぞれに1面分の庇が付く。掘り方は円形で、柱間は桁行2.45m、桁

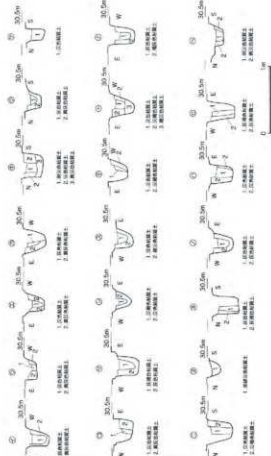
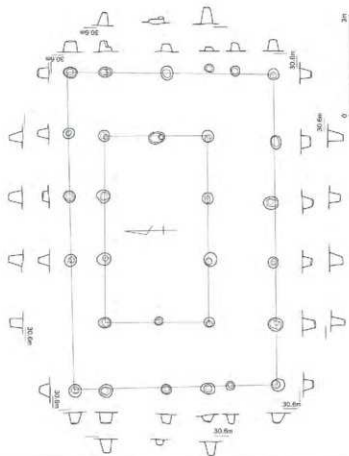
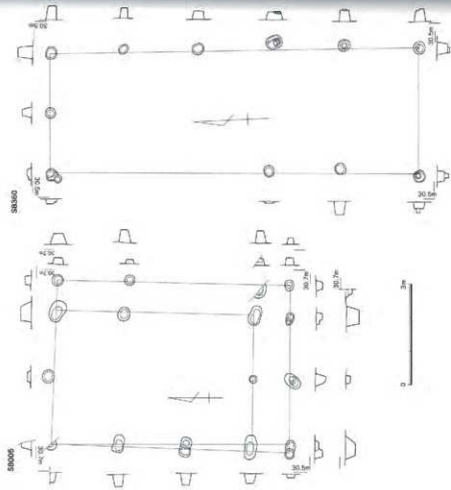


Fig.42 25738001遺構平面図 (1/80, 1/40)



S0005

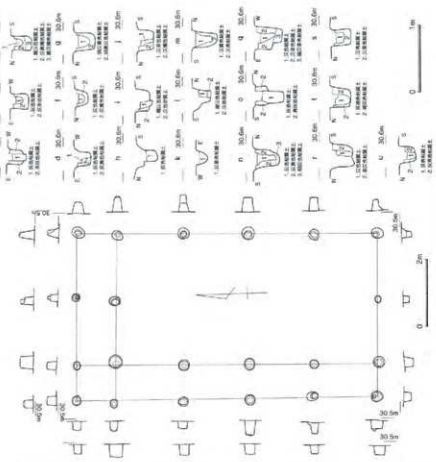


Fig. 44 257S0065 遺構実測図 (1/30, 1/40)

行 2.2m、壁は南北それぞれ 1.1m の位置に付られ、全体として 4.6m × 6.6m の建物である。壁はおよそ N<sup>2</sup> 10° -N を測る。

257S0060 (Fig. 43)

2期 × 5期の南北棟で、壁はおおよそ N<sup>2</sup> 51° -E を測る。柱間は梁行が 1.75m、軒行が 2.2m で、全体として 3.5m × 11m の建物である。

遺列

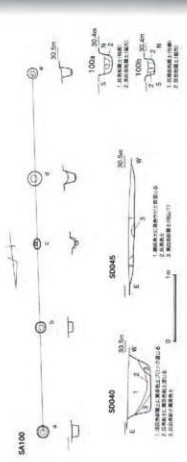
257SA100 (Fig. 43)

S0005 の壇上に切り込んだ南北の廊下で、柱間 1.05 ~ 3.1m の 4間分除出した。廻り方は行目で、壁は独立柱建線と若干異なり、N<sup>2</sup> 30° -E を測る。

溝

257S0000

第 255 次調査で確認した S0000 の延長部に位置する南北棟で、これはど明瞭でなく、先づりになり



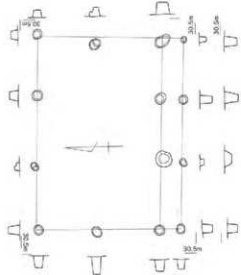
S0100

S0045

S0040

Fig. 43 257S0005・360, SA100, S0040・045 遺構実測図 (1/30, 1/40)

58350



58355

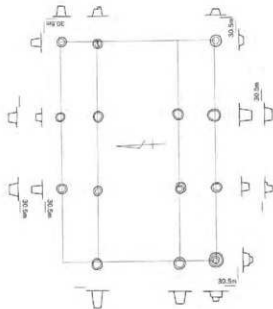


Fig. 46 25758350 - 355 遺構検出図 (1/80)

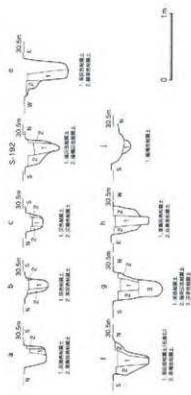
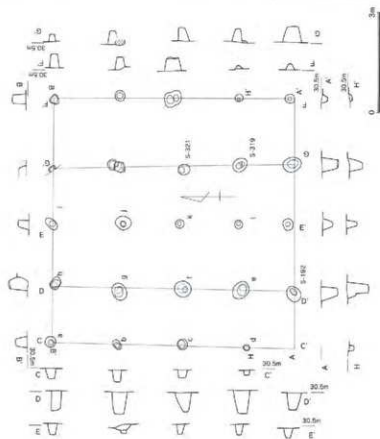


Fig. 45 25758120 遺構検出図 (1/80, 1/40)



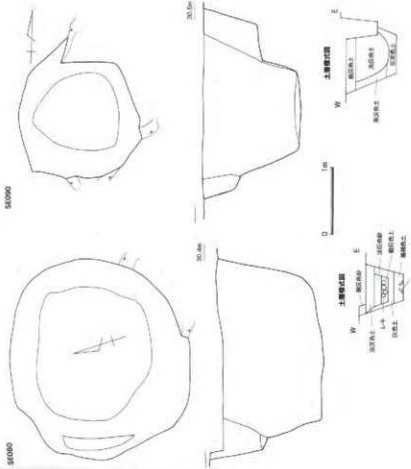


Fig. 46 25750040・000 遺構実測図 (1/40)

消滅している。S-409はこの跡の張り残しである。

25750040 (Fig. 43)

S-07・S5・#の南北溝で、検出長20.8m、幅0.9m、深さ0.15~0.1mを測り、断面形状を呈している。周囲の地形は、調査中も所で徐々により平らされていくほどの柔らかい地盤であり、土層の状況から、下層に粘土や砂が多く相層しており、自然堆積の層に形成した状況が窺える。北側は遺構遺構 (257503370) を横切り、道路遺構の北辺の溝 (SD160) の崖土に切り込んで終わっており、道路側は埋戻後もこのラインに何らかの境界であったことが推測される。

25750045 (Fig. 43)

調査区西端で、N-6°54'47"・#の南北溝と推測される。途切れているが、S-59も同じような土質のため、同一遺構と考えられる。検出長8.2m、幅1.2m、深さ0.05~0.1mを測る。

25750065

調査区東端で、検出長は短い。N-1°55'31"・#の南北溝と推測される。検出長5.09m、幅1~1.2m、深さ0.2m前後を測る。東側の第256-1次調査でその跡をSD128として調査している。合わせれば長さ7.35mと短い。ちょうど東側に平行する南北溝 (256-130070・075) が跡跡状になっている部

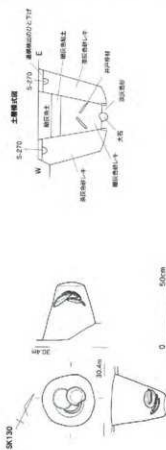
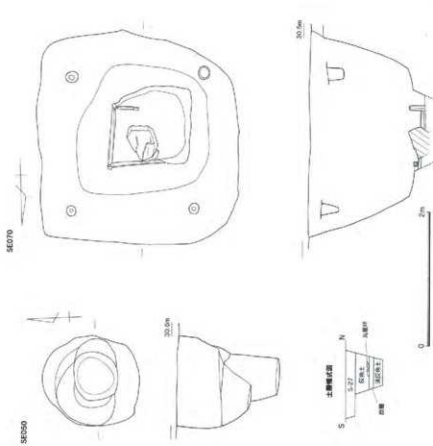


Fig. 47 25750060・010, 25750060 遺構実測図 (1/40, 1/20)

分を遮るようにならされている。埋土は1層が灰褐色ブロック土層じりの茶褐色土で、下層が暗灰赤土で明確に分離できる。

井戸

25735000 (P14.47)

東西1.35m、南北1.45m、深さ1.52mの円形土坑である。埋土の中心には周縁が傾斜していた。周囲の地層は下半が砂質で、僅かに湧水があった。埋土から水け等は確認されなかったが、形状から考え合わせる上井戸の可能性が考えられる。

25735010 (P14.47)

掘り方が東西3.0m、南北2.7m、深さ1.7m以上で、円形をした井戸である。検出段階の埋土は砂質灰じりで、若干掘り下げた状態で掘り方の埋土に廻り込まれた1間×1間(2m×2m)のピットを4つ検出した。井戸枠を囲んでいる状況から井戸の上部は埋土と推測される。井戸枠周囲は検出段階で確認していたが、井戸枠の一部とみられる木片が傾斜した状態で残された。田位置を保持したのは最下の傾斜のみであった。井戸の形状は支柱で傾斜を定めていたか支柱なしの構造だったと推測される。横杭は幅×長さとも0.40mの角材で、両端はホウキ組みの加工が行われている。横杭の高さや枚数から、井戸枠は内径もろの形であったと推測される。しかし、そのレベルになると湧水となる。井戸枠内を掘削すればそれは別面が傾斜している状況であった。また、横杭に埋まれた中央には大石があり、投げ込まれたものと推測される。その掘りは傾斜した土物が確認できたが、その掘りにはより調査川原な状況になり、完成することではなかった。この井戸は現物が残った状態でも、一定量の湧水量が得られた。

25735000 (P14.48)

掘り方が東西3.0m、南北2.7m、深さ1.7mで、円形をした井戸である。埋土は地山に似たような砂質土で、時々灰褐色土と互層になっている。埋土を覆っている限り、井戸枠の意図めとの区別は確認できなかった。埋土中心で花崗岩層が中央付近までまよって出土しているが、範囲広く検出された井戸枠は傾斜しており、これらの傾斜は井戸傾斜面に投げ込まれたものと推測される。井戸枠の断面は傾斜に上出し、幅0.12m、厚さ0.065mの厚板が北向きに斜れた状態で出土した。

25735000 (P14.48)

掘り方が東西1.9m、南北1.7m、深さ1.6mで、円形をした井戸である。北東側は段階で囲まれていた。埋土は灰褐色の砂質土で、下層で木片が僅かに出土した。井戸傾斜面や意図めが明確に傾斜しなかったため、井戸枠は傾斜したものと考えられる。

25735010 (P14.47)

深さ0.30m、深さ0.38mの円形ピットに、底部より若干掘り下げた位置に4枚の上層器の丸底片が出土した。殆ど重なりあって上面を向いているため、人為的に置かれたものと考えられる。

○第2面

1面目で多くの遺構が見え隠れしていたが、1面目調査時高では完整なプランを確保できていない遺構も多かった。2面目調査時に傾斜した、全体的に数cm掘り下げたところ朝顔にプランを確保し遺構調査を行った。この再検出に掘り下げた土色は、1面目検出時と分けるときであったが、検出の際味合いが当り合わせであった。1面目の土色は灰褐色土で取り上げている。時期については朝顔に似て込んだ遺構全てを対象としたため、平安時代前期のものから、1面目と全く同じ平安後期の遺構まで含まれているが、調査手帳に2面目で調査を行ったため、第2面として報告する。

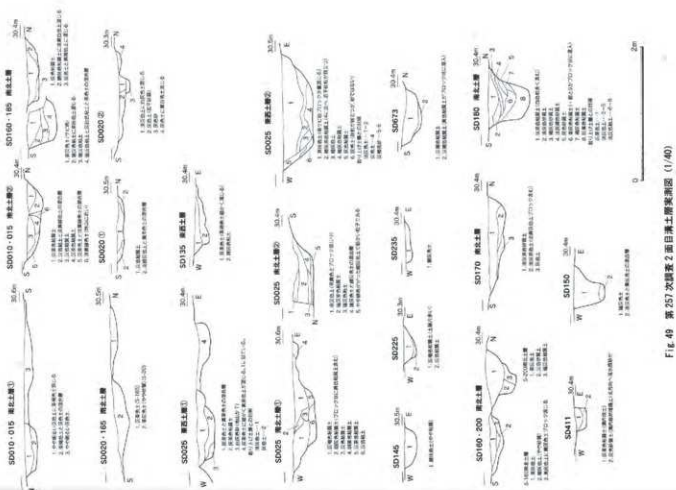


Fig. 49 第257次調査2面目埋土調査範囲(1/40)

## 2575002 - 165 (Fig. 49)

東西溝であるが、西に行くほど僅かに北側に湾曲していく状態で、S002はE-0° 50' 54" S、S015はN-9° 16' 53" Sの傾斜を示している。S002の幅員長18.7m、幅0.4～0.8m、深さ0.02～0.05m、S015の幅員長7.1m、幅1m前後、深さ0.03～0.1mと比較的浅い。溝は南北溝(S002S、S004)の直前で急切れており、それぞれに遺物番号を付したが、同じ意味を持った溝と推察され、合わせて長さ25.2mを測る。この東西溝と南北溝が同時に存在していたと推察される。

## 25750010 (Fig. 49)

E-1° 20' 41" Sの東西溝で、幅員長約12.2m、幅0.75～0.9m、深さ0.15m前後を測る。S002Sを挟んで東側はS0010と015が寄りあいが平行しているが、西側は一本の溝のように見え、明確に分けることができなかった。よって、調査区域では両品を避けるため、S0160とした。S0160の埋土は大きく2層に分かれ、上層は灰色粘土質土で、下層は灰色粘土である。S010とS013のどちらがS0160同一遺層なのかについては、S002Sに切り入れられている調査に判断できなかったが、切り合い傾斜や埋土の状況からS010とS0160が同一遺層であったことが、調査途中から2本の溝が平行していることが明確になった。古い層についてはS0185とした。S0015との層間にはやや間隙があったが、遺物についてはS010の方が新しい遺物を含み、その内からS0160と同一遺層の可能性が考えられる。

## 25750185 (Fig. 49)

E-1° 11' 3" Sの東西溝で、幅員長17.2m、幅1.1～1.3m、深さ0.05～0.0mを測り、西側ほど深くS0185では断面台形を成している。11°ライオンから西側が明確で、S0160によって切られていることが確認できた。それより東側は、S0160・015によって切られ、不明瞭であった。

## 2575015 (Fig. 49)

E-1° 42' 16" Sの東西溝で、やや傾斜している。幅員長14.5m、幅0.95～1.0m、深さ0.15～0.2mを測る。S002Sを挟んで東側はS010に切り込む形で確認できたが、西側は明確に確認できず、調査段階では混乱をきたるため、S0160としている。S010との層間については自然炒だが、遺物についてはS010の方が新しい遺物を含んでいる。西側のS0185と同一遺層かと。

## 25750160 (Fig. 49)

E-4° 41' 3" Sの東西溝で、幅員長17.7m、幅1m前後、深さ0.2m前後を測る。S002Sを挟んで東側はS010と015に分かれているが、S002Sの層間には不明瞭で、調査段階では混乱をきたるため、S0160とした。S010と015のどちらがS0160と同一遺層かについては、ちょうどS002Sによって切られていたため混乱をきたるため、西側は急に立ち上がり急切れている。S0160の埋土は大きく2層に分かれ、上層は灰色粘土質土で、下層は灰色粘土である。遺物の内容からS010と同一遺層の可能性が考えられる。

## 25750200 (Fig. 49)

E-1° 58' 25" Sの東西溝で、幅員長30.2m、幅0.8～2.5m、深さ0.1～0.2mを測る。S002S・040によって切られている。調査区中央付近から西側は深層がやや広がっており、溝底の北側に流氷跡とみられるのみで埋設した小房も使用された。

また、S002Sと平行する溝(15-239・411・414)がS0020と接続しているが、埋土の遺りはなく、切り合いも明確でできていないため、同時期に存在した可能性が考えられる。

## 25750205 (Fig. 49)

調査開始当初は1層目で確認できたが、埋土に調査員住建物(S0055)が切り込んでいることが確認

されたため、その後は2層目で調査を行った。N-0° 4' 38" Eの南北溝で、やや西に傾斜しているが、S000やS004と平行している。幅員長36.7m、幅1.3～2.2m、深さは概算で0.55m、全体的に深さ0.2から0.3mの断面台形を成し、ほぼ水平に近い。埋土は大きく2層で、上層は灰色粘土で埋められた可能性が高い。下層は灰色粘土で溝が急切れている時に傾斜したものと推察される。途中で2mほど埋土を直し、2層状態に深さが0.1～0.4m高くなっている所がある。この傾斜状の高まりは第2層1時間溝でも2m前後である。それよりも中心は北から12.5mと14.5mである。しかし、両側の遺物面より0.1m前後低い方が、これは何の目的に造られたのかは明確でない。

## 25750135 (Fig. 49)

S0020に接続する溝だが、幅員長約11.5m、幅0.5～0.7mで、全体的に深く、南側E-0° 37' Eと斜めに傾れ、全長12.5m、幅1.1m前後、深さ0.15～0.3mで、埋土は主に上下2層で、下層は灰色粘土質土である。

## 25750145 - 219 - 235 (Fig. 49)

N-1° 25' Eと傾いた南北溝。幅員長N-3° 30' 54" Eで、幅員長32.7m、幅0.5m前後、深さ0.1～0.25mを測る。南側はS000と接する切り合いは微妙だがS000によって切られているように見え、南側の溝の深さは接続し終った。切り合いは意識できる箇所があれば、不明瞭な部分もある。しかし、積り状の溝に比べると遺物層が多く、深の傾や深さが異なっている。この溝にS0198・075が成角に接続しており、溝の区間溝としての機能はもろろん、敷地内部を区画する機能も有している可能性があると思われる。

## 25750073 - 718 (Fig. 49)

S0073とS0718は途中で急切れているが大ききや方位から同一遺層とみられる。幅員長E-1° 30' 00" Nで、幅員長18.1m、幅0.3～0.9m、深さ0.2～0.3mで、西側に行くほど傾きが下がっている。S0145・218に接続する東西溝で若干の切り合いは確認できたが、この区間溝部分から南北溝(S0218)の方位がやや変化することから、ほぼ同一時期と考えられる。S0073の埋土は黒褐色土である。

## 25750150 (Fig. 49)

N-1° 33' 33" Eの南北溝。長さ8.6m、幅0.4～1.4m、深さ0.4～0.7mで、全体的に深く、南側ほど狭くなっている。

## 25750170 (Fig. 49)

S0040付近から西側調査区外へと続く東西溝で、S0040付近で急切れている。幅員長E-2° 51' 47" Nで、幅員長5.5m、幅1.4～1.7m、深さ0.2m前後を測る。

## 25750180 (Fig. 49)

E-8° 19' 20" Sの東西溝で、幅員長7.2m、幅0.8～1.1m、深さ0.17～0.55mを測る。埋土は最下層が灰色粘土で、その上層はやや砂質の灰色粘土であった。

S002・165の延長上にあるが、深さが浅いことから、性格が異なる可能性が考えられる。S0020と平行していることに加え、溝の深さや東側の基点がほぼ同じであることから、同じ性格の遺構と推察される。

## 25750200 (Fig. 49)

E-0° 20' Sの東西溝で、幅員長11.6m、幅0.5～0.75m、深さ0.6m前後で、西側に向って傾きが深くなっている。S0180と平行していることに加え、溝の深さや東側の基点がほぼ同じであることから、同じ性格の遺構と推察される。

## 25750239 - 411・414 (Fig. 49)

SK023に平行する南北溝で、幅は北が0° 31' 24"、東で、掘出長16.1m、幅0.28～0.55m、深さ0.05～0.2mを測る。SK025に北へ傾斜に細く深い。南側の第255号溝で発出したSK030とは繋がらない。北側はSK030に接続するが切り合いは不明瞭であった。SK020より北側で深は確認できない。

#### 2575250

N-0° 51' 2" Eの土坑状の南北溝で、長さ4.4m、幅1～1.2m、深さ0.4mを測る。埋土は黒灰色土で、頂上中心で20cm前後の花壇土が同じレベルで6割程度出し、その花壇土の間でかなり腐食した円形形状の径0.25m前後の薄い板材が発出した。また、北端からは土師器の小皿の完形品が出土した。溝として調査を行ったが、別の特殊な遺物の可能性も考えられる。

#### 井戸

##### 2575075 (F1g. 50)

掘り方が東西3.7m以上、南北1.55mの円形をした井戸である。SK070に切られているが、遺物からみると同層位は殆どないとみられる。遺構発出で中央付近に径1.7mほどの円形の埋土を確認したが、井戸中は残っており、埋土中に板材が少量確認できた程度であった。板材に幾片のうち両端をカゴの遺りのような痕跡を残すものがあった。

掘り方の底面からは若干平たい位置に板材が発出した。板材はボロボロであったが、0.05m四方の角材を利用し、内辺南北1.07mの方形枠を作っていた。井戸内からは自然木や板材の一部が内側に残っていた。また、南側に曲板材が出土した。

##### 2575095 (F1g. 51)

掘り方が東西2.55m、南北2.4m、深さ2.0mの円形をした井戸である。井戸中は朝り貫き材を主に使用したもので、井戸枠の内径は0.8～0.90mで、井戸枠は1.50m残っていた。

その構造はやや手前の込んだもので、中央におよそ4分割された朝り貫き材を置き、その周囲に隙間を敷くように約22枚の板材を立て並べている。中央の朝り貫き材と井戸枠の一部が内側に残っていたが、良好な状態で残されていた。

最も奥の長い朝り貫き材はクスノキを使用していて、縦1.50m、幅0.90m、厚さ0.02～0.04mで、両側に0.05m四方の0.04m四方の方形孔があり、後者には板材が刺さっていた。他の朝り貫き材にも方形孔がみられた。これは大きな材を井戸内に挿入する際に使用されたものと推測される。井戸枠の底部には曲板や朝り貫きなどの板材は確認されなかった。井戸枠内の朝り貫き材からは牛の骨とみられる小片が出土。

なお、この井戸には西蔵車庫の礎石が露出し、井戸枠や埋土全てが礎で隠された状態で保存することになった。

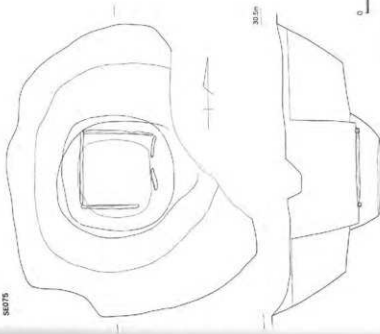
##### 2575105 (F1g. 50)

掘り方が東西2.1m、南北2.05m、深さ1.45mの円形をした井戸である。埋土の上段で花園道の石が出土した。遺構部から0.5mほど掘り下った付近から方形の黒色の埋土が確認され、井戸枠の板材が発出した。遺物は北部が斜めに残る。西側は未検出。その他は木質の残りは悪いが形状を保持している。板材は幅0.1m前後の板材を中心に形成され、南側については不規則に重なり合っており井戸枠と成し尖にはるかに厚い0.05mほどの木材で東西0.40m、南北0.4mの方形枠が作られていた。井戸枠と井戸枠との間には乱石の層が敷かれており、方形枠は木機能を持っていたと推測される。

##### 2575190 (F1g. 50)

掘り方が東西1.85m、南北1.65m以上、深さ1.35mの円形をした井戸で、南側はSK180と接している。

SK075



SK100

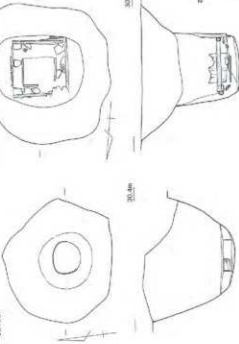


Fig. 50 2575075・105・190遺構発出図 (1/40)



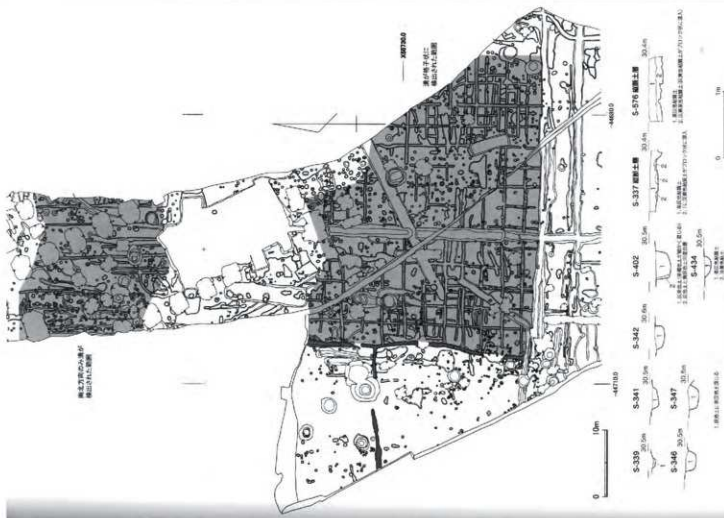


Fig. 53 畑林遺跡調査埋蔵品図 (1/400, 1/40)

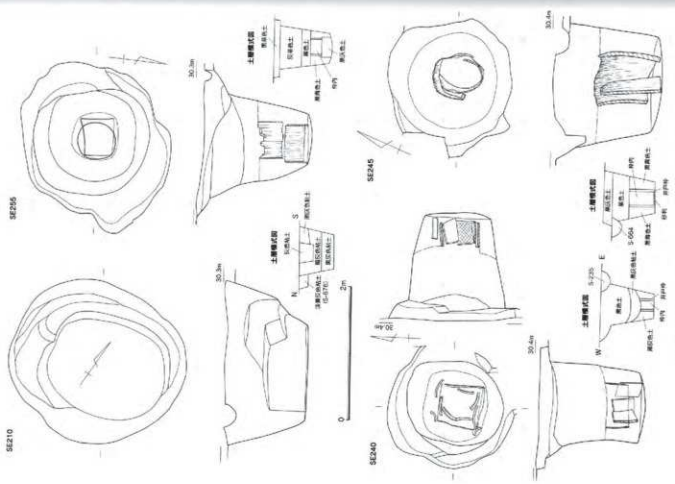


Fig. 52 257SE210・240・245・255遺構発掘図 (1/40)



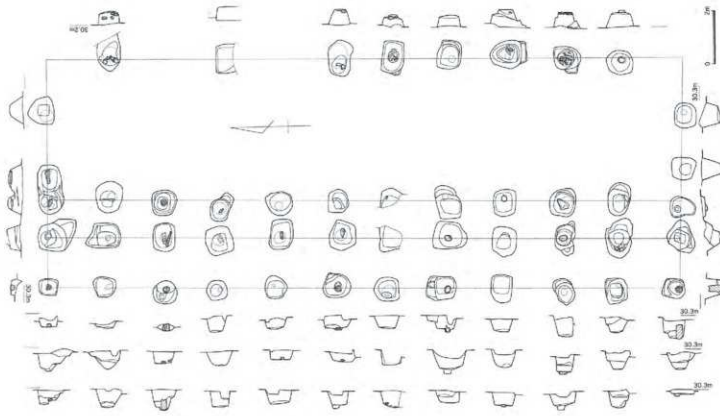


Fig. 56 25738300 剖面素描图 (1/100)

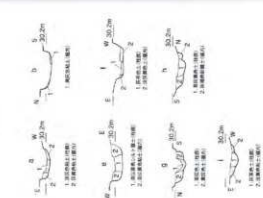
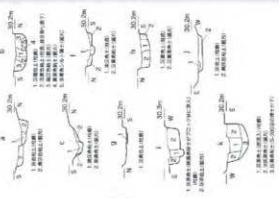


Fig. 55 25738295、305 剖面素描图 (1/80、1/40)



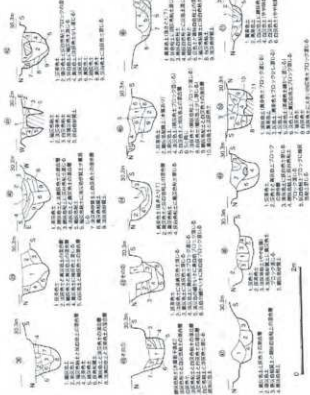


Fig. 56 25758300 土層断面図② (1/50)

25758305 (Ft. 65)

SK300 の掘り方に沿り込みながら掘り出された2間×3間の南北構で、掘りはおおよそN<sup>30</sup> 24°-Eを測る。西側はSK298の延部から検出された。掘り方は竪木方で、一切0.5~0.7m、深さ0.2m前後を測る。柱間は竪行を22m、桁行2.4mで、全体として竪行4.5m、桁行7.25mを測る。

25758306

南北2間の掘り方が確認され、東側の層296-1は調査で掘り出されたS-500と対応する状態を示している。第2層-1は調査SK480とSK70との位置関係から、この建物が門の可能性も考えられる。門と考えた場合、四脚門の可能性が考えられるが、このSK305とS-500との遺構間が約5mあるため、その間を柱間に構えを行ったが、いくつかの間隔の掘り方は確認されたものの、柱間がずれているなど明確に建物に作るものと言いがたい状況であった。

溝

25758307S N<sup>3</sup> 33° 10'-Eの南北溝で、理土は灰褐色土で、断面形状は2段になっていて、幅は長20.0m、幅0.65~1.0m、深さは0.2mを測る。北端はSK300に切られる形で検出している。

25758308S

N<sup>1</sup> 29° 26'-Eの南北溝で、SK300を切る形で掘られている。南端はSK385に接続し、終結している。幅は長22.2m、断面は浅いU字形で、幅0.4~2.4mで、平均的に1.5m前後で、幅は2箇所になっている。深さは0.02~0.1mを測る。理土は灰褐色土である。

井戸

25758345 (Ft. 59)

SK306に切られるが、SK306 溝底中に首線な確認を意図してしまい、4趾目調査中に掘り出された。

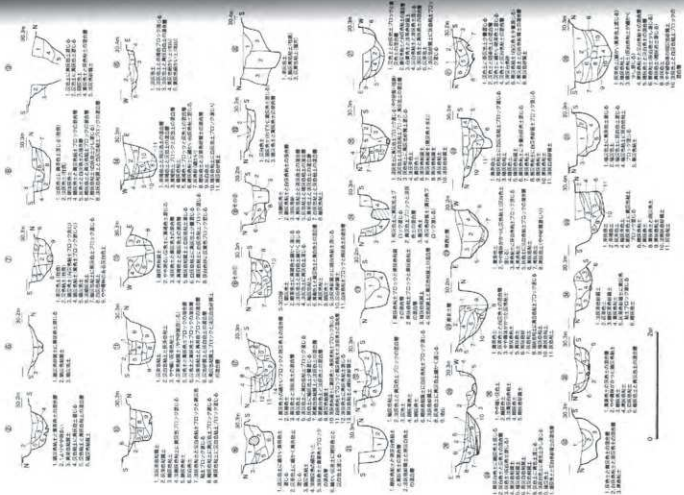


Fig. 57 25758300 土層断面図① (1/50)

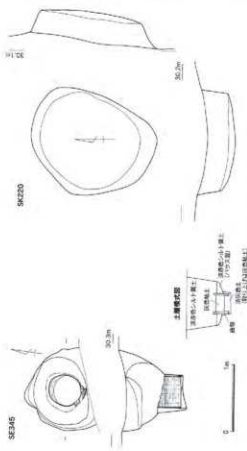


Fig. 59 2573K345・SK220 遺構断面 (1/40)

埋り方が東西1.2m、深さ1.0mの円形をした井戸で、深さ0.6m付近で径0.41mの曲物が残存していた。曲物の上部は腐食していた。曲物は径0.56mの狭い通り方に設置されている。ウラゴメ内からは径0.27mの曲物の底盤が出た。深さが異なる井戸に比べ狭いことや曲物の設置状況が若干異質であることから井戸以外の可能性も考えられる。

#### 土坑

##### 2573K175 (F16.60)

東西3.9m、南北3.6m、深さ1.2mの円形土坑で、横山跡は井戸のようなプランを示しているが、掘土中に井戸内装飾や木片は殆ど含まれず、井戸と見える痕跡は全く確認できなかった。掘土の上部は灰褐色土であったが、中位から底まで黄褐色を帯びた砂質を含まないべっとりとしたとも粘質が強い硬質色粘土であった。その硬質色粘土の上面付近の南東部で土器がまつた径0.38～0.48mの曲物を検出した。曲物は底盤がない状態で、最上面に頸部部の平面が露みれ、その下に頸の破片、木片、細かい土器片の順で検出され、人為的に入れられたものと見られる。これらの内装物は深さ0.2m前後までみられるが、曲物の側面は0.1m前後しか覆っていないため、視察して判断したものなのか明確でない。この土坑と曲物の性格については、トイレの可能性も考え、この褐色粘質土の科学分析を要したが(第V章参照)、それと分かる結果は得られず、用途は不明である。

##### 2573K220 (F16.09)

東西1.52m、南北1.5m、深さ0.57mの円形土坑で、掘土の上部は若干深さが異なる粘質土で、下層が灰褐色である。

#### ○第4区

ピットが散在する程度で、顕著な遺構は確認できていない。遺物は弥生時代後期頃のものが多く見られた。しかし、調査区内を航行する黒色砂があり、弥生時代以前の成層が広がっている。調査区の地山は安定地盤とは言いがたく、トレンチを入れるのと相かい溝が確認され、僅かに野石を念んているところもあった。

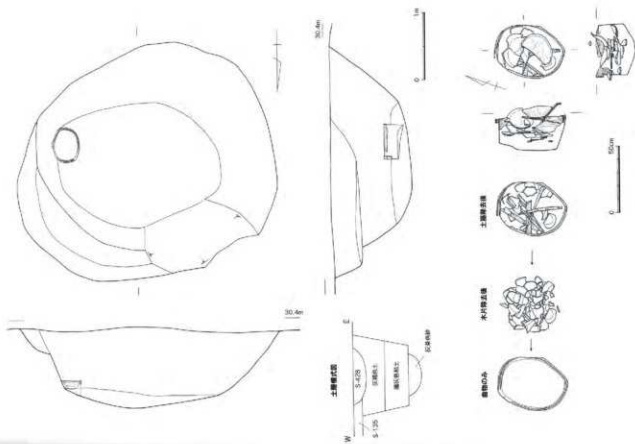


Fig. 60 2573K175 遺構断面 (1/40, 1/20)

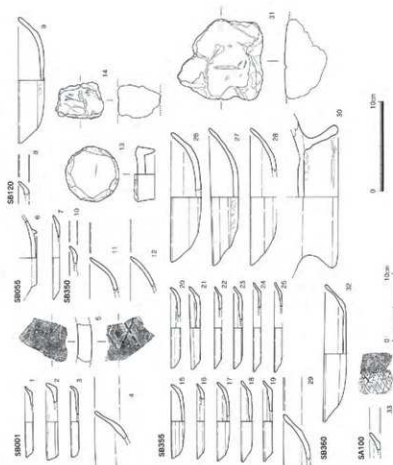


Fig. 62 257S8001・055・120・350・355・360、5A100 出土遺物平面図 (1/3、互は1/4)

(A) 出土遺物

○第1期

楕円柱形物

257S8001

257S8001 ヌ出土遺物 (Fig. 62)

土師器

小皿 a (1) 復元口径 8.0cm、底径 6.9cm、器高 0.9cm、復元底径 6.4cm、底部切り離しは半切りにも見えるが破片で復元である。

257S8001 シ出土遺物 (Fig. 62)

土師器

小皿 a (2) 復元口径 8.4cm、器高 1.3cm、復元底径 8.0cm、口縁部面に窪が付着する、底部切り離しは確認し不明瞭。

257S8001 ナ出土遺物 (Fig. 62)

土師器

小皿 b (3) 復元口径 7.3cm、器高 0.9cm、復元底径 6.4cm、底部は確認し不明瞭。

257S8001 ホ出土遺物 (Fig. 62)

土師器

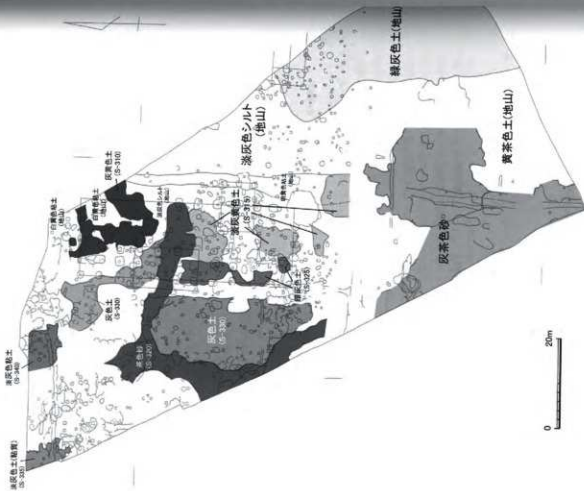


Fig. 61 3 期基層平面図

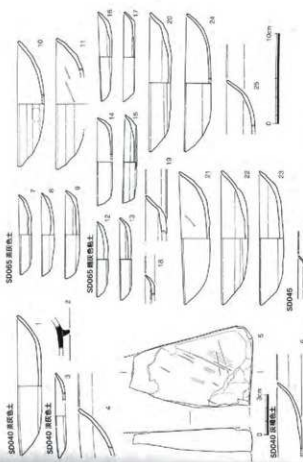


Fig. 63 25750040-045・065 出土遺物家画像 (1/3, 5は1/2)

25750360 出土遺物 (Fig. 62)

土師器

杯 a (32) 復元口径 15.8cm, 器高 2.5cm, 復元底径 11.7cm, 腹縁が直立つが底部には腹状圧痕が残る。色調は白褐色を呈する。

種別

2575A100 出土遺物 (Fig. 62)

土師器

小皿 a (33) 器高 1.2cm, 内外面は磨滅し磨滅不明。

瓦器

丸瓦 (34) 凸面に筋子明とナメ調整が残る。

溝

25750040 茶灰色土出土遺物 (Fig. 63)

土師器

丸底杯 a (1) 復元口径 15.6cm, 器高 2.7cm, 全体が磨滅し磨滅不明。

25750040 茶灰色土出土遺物 (Fig. 63)

瓦器類

杯 c (2) 内面が滑らかになつていて、筋子の痕跡に茶色顔料が付着する。

土師器

小皿 a (3) 復元口径 9.6cm, 器高 1.3cm, 復元底径 7.6cm, 磨滅不明。淡白褐色を呈す。

丸底杯 b (4) 磨滅するが僅かに内面にミチガキがみられる。色調は淡茶褐色を呈する。

石製品

土師器  
丸底杯 (4) 全体的に磨滅する。色調は鈍い茶褐色を呈する。

25750011 八出土遺物 (Fig. 62)

瓦器

平瓦 (5) 凸面は大きな格子内に菱形を入れた文様の押きである。色調は灰褐色。

25750055

25750055b 出土遺物 (Fig. 62)

瓦器

例 c (6) 平や丸い底面に装飾的な高台を盛付する。高径 5.8cm, 磨滅不良で灰白色を呈する。

25750057 覆方出土遺物 (Fig. 62)

土師器

小皿 a (7) 復元口径 5.3cm, 器高 0.8cm, 復元底径 7.4cm, 磨滅不良で磨滅不明。

25750120

25750120a 柱礎出土遺物 (Fig. 62)

土師器

小皿 a (8) 磨滅して磨滅等は不明。器高 1.2cm。

25750120c 覆方出土遺物 (Fig. 62)

土師器

丸底杯 a (9) 復元口径 14.1cm, 器高 2.9cm, 底面は同転へつ切り後に押し出しし、体部中央に僅かに歯状部がある。腹状圧痕が残る。

25750350 出土遺物 (Fig. 62)

土師器

小皿 a (10) 全面磨滅する。器高 0.9cm。

丸底杯 a (11, 12) 全面磨滅している。色調は淡褐色を呈する。

白磁

例 (13) V 面の底面が体部を意図的に打ち欠いている。

土器

土器 (14) 胎土は 0.3cm 以下の砂粒を多く含む。スサ直も少量みられる。色調は表面灰くが淡褐色で内面は白褐色を呈する。

25750355 出土遺物 (Fig. 62)

土師器

小皿 a (15 ~ 25) 復元口径 8.3 ~ 10.0cm, 器高 0.8 ~ 1.5cm, 復元底径 6.0 ~ 8.0cm, 底面は磨滅するものも全て同転へつ切りで、胎土直も残る。内面底面は不定方向のナメ。

丸底杯 a (26 ~ 29) 復元口径 14.4 ~ 15.3cm, 器高 2.95 ~ 3.45cm, 底面は同転へつ切り後に押し出し、27は胎土直に磨滅する。全体的に磨滅しミチガキ調整不明。

脚付鉢 (30) 鉢部分は欠損し全形は認めないが、高さ 4cm ほどの深い浅台を盛付する。高径 15.9cm, 胎土は 0.3cm 以下の砂粒を含む。明褐色を呈する。磨滅も目立つ。

土製品

土器 (31) 面が磨る土盤で、筋子は 0.4cm 以下の砂粒を多く含む。スサ直も多くみられる。色調は淡褐色や灰灰色を呈する。

砥石 (5) 欠損しているが、現状で3面が使用され、素焼も確認できる。

2573040 灰褐色土出土遺物 (Fig. 63)

土師器

丸底杯 a (6) 底辺不良で調整不明、赤褐色を呈する。

2573045 出土遺物 (Fig. 63)

土師器

小皿 a (20) 体部中央に僅かな凹溝を有する。杯 a の可能性もあり。

2573065 茶灰色土出土遺物 (Fig. 63)

土師器

小皿 a (7~9) 口径 8.9~9.8cm、器高 1.4~1.6cm、底径 6.6~8.2cm、底面切り磨しは不明だが、板状圧痕が残る。板状は良好で淡茶褐色を呈する。

丸底杯 a (10, 11) 復元口径はそれぞれ 14.0cm、14.7cm、底辺不良だが10の底面には板状圧痕が、11の内面にはミガキ b が残る。

2573065 茶灰色土出土遺物 (Fig. 63)

土師器

小皿 a (12~18) 口径 8.3~10.0cm、器高 1.3~1.7cm、底径 3.7~8.1cm、底面切り磨しは不明だが、板状圧痕が残る。板状は良好で淡白褐色を呈する。

杯 a (19, 20) 19は底辺不良で調整不明、色調は赤褐色白色を呈する。20は復元口径 15.6cm、器高 2.5cm、底径 11.4cm、内面底部ミガキ、その他は調整ミガキで、板状圧痕が残る。

丸底杯 a (21~25) 口径 14.8~15.4cm、器高 2.7~3.2cm、21・23は外底面に板状圧痕が残る。全体の底辺不良。

弁形

2573E60 灰褐色土出土遺物 (Fig. 64)

土師器

小皿 a (1~5) 口径 9.0~10.4cm、器高 0.9~1.3cm、底径 7.0~7.9cm、押痕も目立つが底面はへら切りで板状圧痕が残る。2は底部へら切り後大調整。

丸底杯 a (6, 7) 復元口径は 14.2cm と 15.6cm、7は内面にミガキ b が残る。

小皿 (8) 復元口径 5.8cm、器高 9.1cm、底径 5.9cm、全体の調整ミガキするが局部部分に3コナアが残る。

2573E60 茶灰色土出土遺物 (Fig. 64)

土師器

小皿 a (9) 復元口径 10.4cm、器高 1.5cm、復元底径 8.3cm、底面に板状圧痕が残る。

盤 (10) 内外面とも板状で赤褐色に変色し、表面が劣化している。胎土は 0.1cm 前後の砂粒を多く含む。

2573E70 茶褐色土出土遺物 (Fig. 64)

土師器

小皿 a (11) 復元口径 9.4cm、器高 1.1cm、復元底径 7.2cm、切り磨しは不明だが板状圧痕が残る。

丸底杯 a (12, 13) 12は復元口径 15.0cm、外周中央に凹溝が僅かに残る。13は復元口径 15.2cm、内面にミガキ b を呈す。

丸底杯 (14) 底辺不良で全体の調整ミガキする。

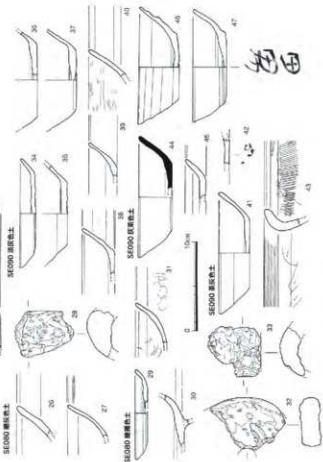
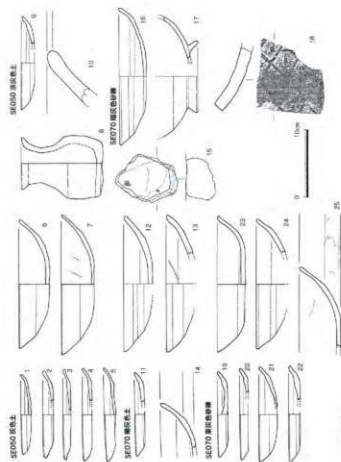


Fig. 64 2573E60・070・080・090出土遺物実測図 (1/3, 18は1/4)

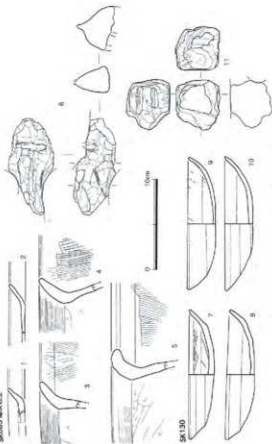


Fig. 65 2575005・130 出土遺物実測図 (1/3)

杯 a (35～39) 底部はへら切りで底部と体部に若干の欠損を有する。35～37の復元口径は4.8～8.2cm。

黒色土器

98 (40) 内面はミガキcで外面は刷毛ナズ、A類。

2575000 黒灰色土出土遺物 (Fig. 64)

土師器

杯 a (41) 復元口径13.6cm、器高3.6cm、復元口径7.7cm、底部は回転へら切り、その側は回転ナズ調整。色調は淡茶白色を呈する。  
 黒丸片 (42) 底部外面はへら切り裏に磨きされているが、文字の内容は不明。

黒丸片 (43) 口縁部内面はヨコハケ、体部外面はタテハケ、内面はへらナズリ。外面には縁が付着する。  
 2575000 黒灰色土出土遺物 (Fig. 64)

須恵器

杯 a (44) 復元口径13.6cm、器高3.75cm、復元口径7.6cm、色調は赤灰色を呈する。

土師器

黒丸 (45) 底部は回転へら切りで、その側は回転ナズ。

杯 a (46, 47) 46は口径13.0cm、器高4.6cm、口径7.3cm、内外面回転ナズ、外面底部は回転へら切り後ナズリナズ。色調は黒灰色を呈する。47は口径12.6cm、器高3.8cm、口径8.1cm、底部は回転へら切り後ナズリナズ調整。底が浅く傾く。内面底部は不定方向ナズで、その側は回転ナズ。外面底部には「田田刀」もしくは「田男」と読める書名が残る。

土師器

2575005 褐色土出土遺物 (Fig. 65)

土師器

黒丸 (1, 2) 2点とも色調は褐色を呈する。内外面回転ナズ。1は器高1.0cm、2は器高1.85cm。

土製品  
 土盤 (15) 外面とみられる平坦面を致す。胎土は0.3cm以下の砂粒を多く含む、裡かにはスサ感もみられる。色調は淡褐色を呈する。

2575070 褐色土出土遺物 (Fig. 64)

土師器

丸皿片 a (16) 口径16.2cm、器高3.05cm、内面はミガキb、外、面下半は回転へら切り後ナズリ出しで、底が圧痕が残る。底が良好で白褐色を呈する。

丸皿片 (17) 丸い楕円に字型に高低を配付する。復元口径8.0cm、底が不良。

瓦類

平瓦 (18) 凸面に大きな格子印を有する。断面には分断の切り込みと切筋がある。

2575070 褐色土出土遺物 (Fig. 64)

土師器

小皿 a (19～22) 復元口径9.6～10.8cm、器高0.9～2.1cm、底部切り履しはへら切りで一部底が圧痕が残る。21は底面にみみがある。色調は白褐色を呈する。

丸 a (23) 復元口径15.2cm、器高3.15cm、復元口径11.5cm、白褐色を呈する。

丸皿片 a (24, 25) 24は復元口径14.4cm、内面にはミガキbが残る。25は外前下半に押通し圧痕が残る。色調は白褐色を呈する。

2575080 褐色土出土遺物 (Fig. 64)

土師器

鉢 (26) 内外面回転ナズで、胎土は砂粒を含む。色調は淡赤褐色を呈する。

褐色土器

碗 (27) 全体的に磨滅し、ミガキcの単位は不明瞭である。口縁部外面も僅かに黒色化する。A類。

土師器

鬚口口 (28) 胎土には粉染痕が多くみられる。先端部に近いとみられる部分は灰色や淡灰色を呈し、底面を呈する。

2575080 褐色土出土遺物 (Fig. 64)

土師器

小皿 a (29) 復元口径9.7cm、器高1.4cm、復元口径8.0cm、褐色を呈する。底部切り履しは回転へら切りで、底が圧痕を致す。

鉢 c (30) 内外面回転ナズで、内面底部は一向向のナズ。色調は褐色を呈する。

丸皿片 a (31) 内面はミガキb、外、面中央に指印圧痕を残す。

土師器

用土不明品 (32) 中央に2cm程の凹みがあり、全体は直径15cm前後の円を描きそうなる形状である。厚さは2.5cm前後で砂粒を多く含む粗い。色調は淡茶褐色や淡褐色を呈する。

鬚口口 (33) 先端部とみられる。色調は淡灰色で、端が磨滅により変色し暗褐色を呈する。胎土は粉染痕が多く確認できる。

2575090 淡灰色土出土遺物 (Fig. 64)

土師器

黒丸 (34) 復元口径12.2cm、器高1.75cm、復元口径9.4cm、底部は回転へら切りで、色調は淡茶褐色を呈する。

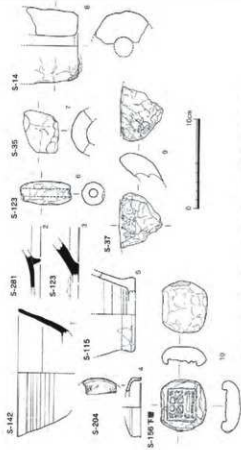


Fig. 66 第 257 次調査 1 面自その他の遺物出土遺物実測図 (1/3)

底面にヘラ切り。  
 甕 (3 ~ 5) 口縁部内面はヨコハケ、外面はカタハケ、体部内面はヘラケズリ。色調は茶褐色や褐色色を呈する。胎土は 0.3cm 前後の砂粒を多く含む。5 は肥厚した丸味のある口縁部である。  
 土器  
 土高 (6) 胴部や脚部は欠損し、頸から胴にかけての破片で、カタガミや輪を作り出し、胴部両側にヤズを入れて手綱も出現している。胎成は良好で製造質や灰色を呈する。

257X130 出土遺物 (F16. 65)

土製器  
 丸底杯 a (7 ~ 10) 復元口径 14.5 ~ 15.0cm、器高 3.0 ~ 3.15cm。底面は回転ヘラ切り後押し出し、胎成不良で白褐色や茶灰色を呈する。

土製器

第 1 面自の遺物出土遺物 (F16. 66)

土製器  
 杯 (1) 胎土は白褐色と茶褐色を多く含む。外周が厚縁がみられる。茶褐色を呈す。  
 土製器  
 第 1 面自の遺物出土遺物 (F16. 66)

杯 (1) 胎土は白褐色と茶褐色を多く含む。外周が厚縁がみられる。茶褐色を呈す。  
 土製器  
 第 1 面自の遺物出土遺物 (F16. 66)

杯 (1) 胎土は白褐色と茶褐色を多く含む。外周が厚縁がみられる。茶褐色を呈す。  
 土製器  
 第 1 面自の遺物出土遺物 (F16. 66)

杯 (1) 胎土は白褐色と茶褐色を多く含む。外周が厚縁がみられる。茶褐色を呈す。  
 土製器  
 第 1 面自の遺物出土遺物 (F16. 66)

杯 (1) 胎土は白褐色と茶褐色を多く含む。外周が厚縁がみられる。茶褐色を呈す。  
 土製器  
 第 1 面自の遺物出土遺物 (F16. 66)

杯 (1) 胎土は白褐色と茶褐色を多く含む。外周が厚縁がみられる。茶褐色を呈す。  
 土製器  
 第 1 面自の遺物出土遺物 (F16. 66)

杯 (1) 胎土は白褐色と茶褐色を多く含む。外周が厚縁がみられる。茶褐色を呈す。  
 土製器  
 第 1 面自の遺物出土遺物 (F16. 66)

杯 (1) 胎土は白褐色と茶褐色を多く含む。外周が厚縁がみられる。茶褐色を呈す。  
 土製器  
 第 1 面自の遺物出土遺物 (F16. 66)

土製 (6) 器高 5.7cm、径 2.6cm で、中央孔は 0.9cm。色調は茶褐色や茶灰色を呈する。S-123 より出土。  
 輪口 (7, 8) 7 は先端部が欠損し、7 以外の部分によって復元される。その他はよい茶褐色を呈する。S-35 より出土。8 は胎成で、胎成によって灰色に着色し、表面が磨解し痕やかな気泡がみられる。復元径 8cm 前後。S-14 より出土。

トリヤ (9) 胎土は 0.1cm 前後の砂粒を多く含む。淡灰白色を呈する。内面は胎成で表面が磨解している。S-37 より出土。

鍔型 (10) 器高 5.0cm、径 5.8cm、厚さ 1.7cm。胴部分分は 3.1 × 3.6cm、深さ 0.5cm。列面に縦り込みられた文部があり、その形状から帯金具と推測される。胎成は灰色に着色する。胎土は 0.2cm 以下の砂粒を含み、一部底土が付着し、左右に窪み口が認められている。S-156 下層より出土。

○第 2 面

遺物

257S0165 出土遺物 (F16. 67)

瓦類

平瓦 (1) 斜格子叩き。淡灰白色を呈する。

257S0010 灰色土器出土遺物 (F16. 67)

須臾器

甕 (2) 二重口縁の甕で、胴部に波状文を呈す。内面灰かぶり、外面は自然釉が掛かる。

土製器

小皿 a (3, 4) 胎成不良で厚縁する。3 は復元口径 9.5cm、器高 0.9cm、復元器径 7.7cm、4 は復元口径 9.8cm、器高 1.0cm、復元器径 7.4cm。

丸底杯 a (5 ~ 7) 全体的に胎成不良で厚縁する。5 は復元口径 14.8cm、6 は復元口径 16.0cm、器高 3.0cm、7 は外周中に窪み口が認められる。

土製器

埴 (8) 厚さ 9.2cm。胎土は 0.1cm 前後の砂粒を多く含む。胎成不良で淡白褐色を呈する。

257S0105 灰褐色土器出土遺物 (F16. 67)

土器

小皿 a (9) 器高 1.4cm。胎成不良で調整不明確。色調は淡茶褐色を呈する。

257S0165 出土遺物 (F16. 67)

須臾器

甕 3 (10 ~ 12) 10 は胎成不明確に磨けているが、ほか 2 点は僅かにつまみ出している。内外面縦ナゲで、12 は半部に回転ヘラケズリが認められる。

皿 a (13) 底面は回転ヘラケズリ、その他は回転ナゲ。内面底面ナゲ。

杯 c (14) 低くても筒筒な高台を呈す。色調は灰白色や茶褐色を呈する。

土製器

杯 a (15) 全面厚縁する。色調は明茶褐色を呈する。

257S0015 灰色土器出土遺物 (F16. 67)

須臾器

甕 3 (16) 復元口径 12.4cm、口縁部は僅かに曲げている。外面はやや斜回転ナゲ、上半部は回転ヘラケズリ。胎成灰色を呈する。





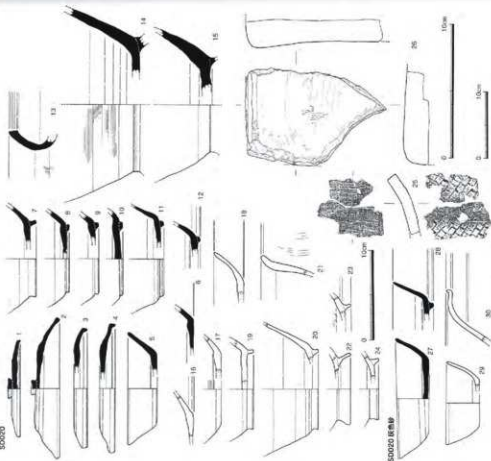


Fig. 68 2575020 出土遺物実測図 (1/3, 25 は 1/4, 26 は 1/2)

- 2 は復元口径 15.8cm, 器高 3.3cm, 外面上半部はへう切り後ナズ, 内面上半部は回転ナズ型にナズ。  
 蓋 3 (3, 4) 外面上半部は回転へうラケズリ, 内面上半部は不定方向のナズ, それ以外は回転ナズ, 3 は復元口径 13.4cm, 色調は淡灰色, 4 は復元口径 14.6cm, 色調は淡灰色を呈する。  
 坪 5 (5, 6) 5 は復元口径 12.6cm, 器高 3.3cm, 器底径 8.0cm, 外面底部に縦状瓦紋あり, 内外面回転ナズ調整, 形成はやや良く自然灰色を呈する, 6 は底部が回転へう切り後ナズだが, 縦状瓦紋が現る, 色調は淡灰色を呈する。  
 坪 7 (7~12) 7 は底面側にやや高い両台を貼付する, 内面はやや滑らかになっている, 8~12 は方型もしくは出隅れた低い両台を貼付する, 復元器台径は 7.6~8.6cm, 色調は青灰色を呈する。  
 壺 13 (13) 口縁端部に浅い凹溝を施す, 内外面とも回転ナズ。  
 壺 14 (14, 15) 底面付近の破片で両台も亦欠落する, 14 は内面回転ナズ, 外面中位は明きの後に同

転ナズ, その下は方台目を施す, 暗灰色を呈する, 15 は外面回転へうラケズリ, 内面は回転ナズだが裏面に瓦紋が出て凸面している, 色調は灰色を呈する。

## 土師器

外 a (16) 底成不良で全体的に厚縁する, 色調はにがい茶褐色を呈する。

坪 d (17, 18) 17 は復元口径 7.6cm, 底面はへうラケズリで, 内面は厚縁するがミガキが成る, 色調はにがい茶褐色を呈する, 18 は内面回転ナズだがその間は厚縁しない。  
 壺 e (19, 20) 19 は削り成形を露出部に施付する, 復元器台径 8.9cm, 外面底部は回転へうラケズリ, 底成不良で色調は黄褐色を呈する, 20 は復元口径 9.0cm, 底成不良で調整不明, 色調は茶褐色を呈す。

壺 21 (21) 口縁部を強かに外反させる, 外面に強かにへう目が見える。

## 黒色土器

坪 e (22~24) 22 は細く深い両台を貼付し, 復元器台径 8.0cm, A 類, 23 は内面に強かにミガキが成る, A 類, 24 は丸い底面の両台を貼付する, 復元器台径 9.9cm, A 類。

## 瓦類

瓦瓦 (25) 凸面にいわゆるミダタシ状の格子明きを施す, 凹面の端部や側面はへうラケズリを施す, 形成はやや不良, 色調は淡灰色を呈する。

## 石製品

砥石 (26) 扁平な砂岩質で, 使用面は 2 面で, 平坦面には磨痕が僅かにみられる。

## 25730030 灰色砂土土遺物 (Fig. 68)

## 須恵器

坪 a (27) 外面底部は回転へう切り後ナズで, 縦状瓦紋を現す, その他は回転ナズで, 内面底部はその底ナズ, 色調は茶褐色を呈する, 口径 13.4cm, 器高 3.6cm, 底径 8.3cm。

坪 c (28) 内面底部は不定方向のナズ, その他は回転ナズ, 色調は灰色を呈する。

## 土師器

小杯 d (29) 復元口径 9.2cm, 器底径 5.75cm, 復元底径 5.6cm, 底成不良で内外面とも厚縁する, 内面は淡灰色を呈する。

鉢 (30) 体部を大きく外反させ, 両面を粗く斜り面する, 体部中位に凹溝を施す, 底成不良で調整不明, 色調は明茶褐色を呈する。

## 25730035 淡灰色土土遺物 (Fig. 69)

## 須恵器

用茶不明品 (1) 粘土 0.1cm 前後の砂状を少量含み, 形成は良好で淡灰色を呈する, 全面ナズ調整されており, 粘土の上面部分には粘土の除去部分で調整したものと推測される, 下方の断面部分にもナズ調整があり, 全形がつかぬ状況である。

## 土師器

小皿 a (32~39) 復元口径 8.8~10.1cm, 器高 0.9~1.6cm, 厚縁するが底部回転へう切り, 縦状瓦紋も僅かに現る。

丸 10 (10) 復元口径 12.2cm, 器高 2.0cm, 復元底径 9.0cm, 色調は褐色を呈する。

丸底坪 a (11~16) 復元口径 13.7~15.7cm, 器高 2.7~3.8cm, 全体的に厚縁する。

壺 c (17) 底部部に両台を貼付し, 復元器台径 7cm, 底面には 1×1 所径 0.6cm の円孔を穿っている, 底成は不良で茶褐色を呈する。

器台 (18) 中央は 1cm はほどが空洞で, 外面はナズ調整, 底成不良で淡白褐色を呈する。

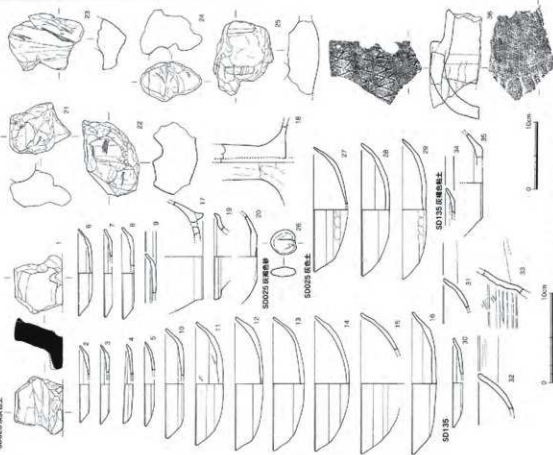


FIG. 69 25730025・135出土遺物美術図 (1/3、瓦は1/4、26は1/2)

灰釉陶器

壺 (19) 腹高口径9.6cm、胎土は微細な砂粒を含む、内外面とも胎土ナマで後に練灰色釉を薄く施す。

青白磁

杯 (20) 直径4.8cm、底部は窪み仕上げで、浅い枕型が通る。内外面に淡緑青色釉を薄く施し、

並部外面の外縁を灰を取り、細い光沢がみつて貫入あり。

土製品

土鏝 (21～25) 胎土には0.1cm前後の砂粒とヌカが混じっていて淡茶褐色を出す。厚3cmを越える青銅ひの痕跡が裡側に見られる。部分的に外面とみられるナマ面が露出が残る。

25730025 灰褐色砂土出土遺物 (Fig. 69)

石製品

平玉石 (26) 大きさは1.9cm×1.9cm、厚さ0.7cm、色調はにがしい褐色。

25730025 灰土出土遺物 (Fig. 69)

土製品

大底杯 a (27～29) 腹高口径14.0～15.6cm、器高2.7～3.8cm、全体的に磨滅が目立つ。色調は淡白褐色を出す。

25730135 出土遺物 (Fig. 69)

土製品

小皿 a (30) 腹高口径10.0cm、器高1.1cm、腹底径7.2cm、胎土磨滅不明。

碗 (31) 胎土磨滅不明、丸底杯の可能性もある。

黒色土器

杯 (32) 胎土磨滅するが内外面にミガキが確認できる。B類。

朝鮮系新形陶器

椀 (33) 内面コナナリ、外面は明きの浅ナマ面。色調は内面とも青黒灰色、外面は暗茶褐色を出す。

25730135 灰褐色粘土出土遺物 (Fig. 69)

土製品

小皿 a (34) 器高1.0cm、胎土狂振らしきものが残る。

杯 a (35) 胎土磨滅不明、腹底径7.6cm、色調は淡緑灰色を出す。

瓦類

瓦瓦 (36) 凸面に若干大きめの輪子明きを施す。色調は青灰色を出す。

25730150 出土遺物 (Fig. 70)

染土器

杯 c (1) 底部に細い溝台を胎付する。内外面胎土ナマで、青灰色を出す。腹高口径9.8cm、杯 c×皿 (2) 太く低い高台を胎付する。腹高口径9.0cm、内外面胎土ナマで内面底部は不足方向のナマ。淡灰白色を出す。

土製品

瓦類

瓦 a (3), (4) 3は腹高口径14.0cm、器高1.1cm、腹底径9.5cm、底部は胎土へ切りで飯粒江飯が窪みに残る。4は腹高口径16.3cm、器高1.65cm、腹底径12.4cm、外面にミガキのような痕跡を残す。

杯 a (5～10) 腹高口径7.1～8.2cm、胎土は磨滅できるものも含めて胎土へ切り後ナマ、内面胎土は胎土ナマ後にナマ面。7・8の底部はやや欠け。

壺 (11～14) 体部内面はヘラケズリ、外面タケハテ。口縁部はコナナリとみられる。14は磨滅が著しいが口縁部内面がコナナリ。

黒色土器

碗 c (15, 16) 胎土が目立つが内面に窪みにミガキが残る。A類。

小鉢 (17) 口縁部を大きく曲げ、腹高口径13.0cm、外面は磨滅するが内面は磨いたミガキが残る。

鉄輪陶器

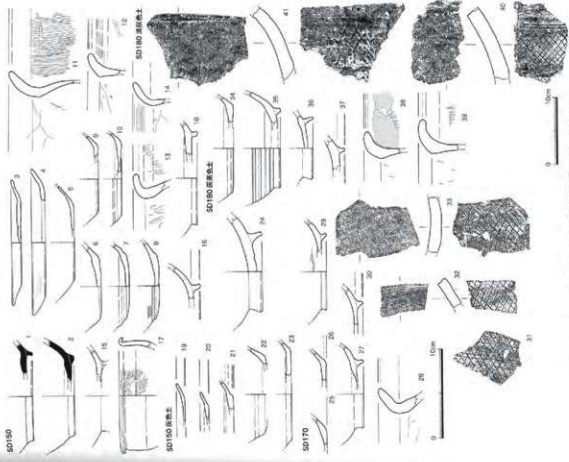


Fig. 70 2570150・170・180 出土遺物実測図 (1/3, 真は 1/4)

例 (4) 口縁部を細かに外反させる。B 型。  
石製品  
石製土器 (5) 滑石製の石製の口縁部で、内外ともにヘラケズリ加工している。径 0.75 ~ 0.8cm の円柱が 1ヶ所穿たれており、石槌を二次加工したものとみられる。  
瓦類

例 c (18) 内外面に丸状のある明緑色釉が厚く塗す。胎土は乳白色や灰色で土質質。復元高台径 10.6cm。  
土師器

2570150 灰土出土遺物 (Fig. 70)

小皿 a (19, 20) 器高は 2 点とも 1.6cm。器縁は不明。色調は白褐色を呈する。  
杯 a (21 ~ 23) 21 は底部へラ切り。22 は底部へラ切りで、復元口径 8.6cm。23 は復元口径 10.2cm。淡茶灰色や白白色を呈する。

黒色土器

大瓶 b (24) 深い腹部に径 9.0cm の高台を彫付する。外面に灰ナガを施す。胎土は白褐色を含み、暗茶色を呈する。A 型。  
2570170 出土遺物 (Fig. 70)

土師器

例 a (25, 26) 全面滑焼する。25 は淡褐色。26 は暗褐色を呈する。

杯 c (27) 復元口径 7.6cm。色調は淡褐色や淡灰色を呈する。

壺 (28) 滑焼するが、内部外面はナガもしくはケズリのような痕跡を残す。胎土は 0.1cm 以下の砂粒と第四石を含む。

黒色土器

例 c (29, 30) 2 点とも A 型。29 は復元口径 8.6cm。内部に窪かにミガキが確認できる。胎土は淡茶灰色を呈する。

瓦類

丸瓦 (31) 斜格子印きを施す。

平瓦 (32, 33) 格子印きを施す。32 は淡灰色。33 は茶灰色を呈する。

2570180 灰土出土遺物 (Fig. 70)

土師器

例 a (34) 復元口径 9.7cm。色調は黄褐色を呈する。

杯 c (35 ~ 37) 35 は内外面両面ナガで、内面底部は不定方向のナガ。外面の回転ナガは柱状状になっている。復元高台径 8.9cm。色調は白白色を呈する。36 は復元高台径 7.0cm。37 は体部に北べ丸い減台を彫付する。

壺 (38, 39) 2 点とも口縁部を肥厚する。内部内面はヘラケズリ。口縁部はココナガ。外面はタケハクを施す。38 は外面に傷が厚く付着する。

瓦類

平瓦 (40) 凸面に格子印きを施す。

2570180 灰土出土遺物 (Fig. 70)

瓦類

平瓦 (41) 凸面に浅い格子印きが施されている。側面近くはナガ削きされる。

2570200 出土遺物 (Fig. 71)

土師器

小皿 a (1 ~ 3) 復元口径 9.2 ~ 10.0cm。器高 1.25 ~ 1.7cm。復元口径 6.0 ~ 7.4cm。底部は傾斜へラ切りで、軟泥状が残る。内面底部は一方のナガ。その他は回転ナガ。

黒色土器

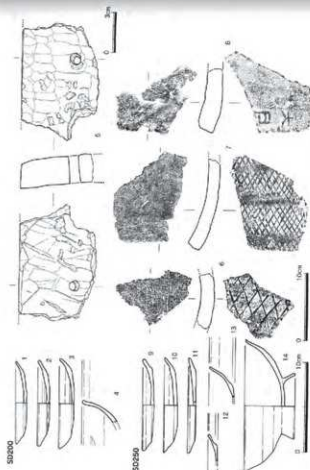


Fig. 71 25782000・250出土土器類実測図 (1/3, 5は1/2, 6~8は1/4)  
 平瓦 (9~11) 6はやや大きめの彫格子印き, 7は細かい彫格子印き, 8は半輪が目立つが, 「大瓦」  
 の文字瓦。  
 25782050 出土土器類 (Fig. 71)  
 土師器  
 小皿 a (9~11) 復元口径 10.2~10.6cm, 器高 0.9~1.5cm, 復元底径 7.8~8.2cm, 外  
 面底部は凹椀→凸切とみられ, 板状狂風が残る, 色調は白褐色を呈する, 12は漆成全体で内外面磨  
 属する, 器高 1.1cm, 色調は黒茶白色を呈する。  
 杯 a (13) 底部がやや丸底がある, 色調は淡褐色白色を呈する。  
 黒色土器  
 瓶 c (14) 復元口径 14.7cm, 器高 5.6cm, 復元高台径 7.3cm, 焼成不良で全体が磨属する, A 型。  
 井戸  
 25782075 茶褐色土出土土器類 (Fig. 72)  
 土師器  
 小皿 a (1~3) 復元口径 6.6~10.0cm, 器高 1.1~1.4cm, 復元底径 7.3~8.2cm, 板状狂風は僅  
 部で残るが, 底部切磨しは凹底し不明, 淡褐色を呈する。  
 丸底杯 a (4, 5) 復元口径は 4が 16.5cm, 5が 17.8cm, 板状狂風は残すが, 2点とも全体的に磨属  
 する。  
 罌 (6) 外面タテハク, 内面ヨコハク, 口縁部内外面はヨコナナ。  
 25782075 黒色土出土土器類 (Fig. 73)  
 土師器  
 小皿 a (7~15) 復元口径 7~10.0cm, 器高 0.9~1.9cm, 復元底径 6.6~8.0cm, 底部切磨し

は磨属できるものはへツ切りで, 板状狂風が残る。  
 罌 (10) 外縁の途中を欠けし, 内面にはミガキcが施される, 黒色に染められてなく, 色調は淡褐色  
 灰色を呈する, 復元高台径 7.6cm。  
 大底杯 a (17~24) 復元口径 11.2~16.0cm, 器高 2.2~4.2cm, 内面にはミガキbが施され, コ  
 ナで底が磨属である, 色調は主に陶白色を呈する。

黒色土器  
 脚付鉢 (25) 脚部は欠損するが, 配置からコナ所付いていたものと推測される, 胎土は砂粒を僅か  
 に含み, 色調は黒灰色を呈する, 内外面ナブ磨属, B 型。  
 深鉢形器  
 鉢 (26) 複製された胎土で, 内外面とも凹椀ナブで, 内面と口縁部に緑灰色色線を帯く属す。

土師器  
 脚付 (27) 胎土は 0.1cm 以下の砂粒を少量含む淡灰色を呈する, 表面には真土が付着する, 上面に  
 は 0.2cm 程度の深さで彫りがみられる, 半輪の輪痕と推測される。  
 埴 (28) 胎土は 0.1cm 前後の砂粒を多く含み, 黄褐色色を呈する, 表面はナブ磨属される, 縦  
 19.0cm 以上, 幅 11.6cm 以上, 厚さ 6.5cm。  
 石製品  
 皿 (29) 方形の黒色の粘板岩を加工した皿で, 背面は細かく磨属する, 断面の一部は欠損する, 表  
 面は浅い彫り込みがみられ, 緑がかった研削とキズがみられる, また断面の縁には浅い溝が彫り込まれている,  
 木製品  
 小皿 (30) 復元長 17.2cm, 厚さ 0.9cm, 柄の半分ほどを欠損する, 表面は凹椀に仕上げられ, 皿か  
 に加工痕が残っている。

25782075 緑内出土土器類 (Fig. 73)  
 須恵質土器  
 鉢 (31) 片口鉢で口縁部は凹椀に欠けて自然釉がみられる, 焼成は良好で胎土は暗灰色色を呈する,  
 外面は凹椀ナブ, 内面はやや欠けがみられる。  
 土師器  
 小皿 a (32~36) 復元口径 8.4~9.8cm, 器高 1.0~1.3cm, 復元底径 6.3~8.0cm, 32はへツ切  
 り, 35は底部へツ切り後未調磨, 35は底部付近の破片で, 内外面に磨属がみられるが, 残りが多く内  
 面はわからない。  
 丸底杯 (37~42) 復元口径 15.0~19.1cm, 器高 3.1~5.6cm, 内面にはミガキbを施す, 41・42は  
 やや大きく口縁部が陥凹に外反する。

瓦類  
 瓦工 (43) 大きさは 2.5×2.3cm, 厚さ 2.0cm。  
 25782075 黒方出土土器類 (Fig. 73)  
 須恵質土器  
 鉢 (44) 皿内に砂粒を含み, 淡灰色を呈する, 内外面凹椀ナブ, 重層赤点。  
 土師器  
 小皿 a (45~49) 復元口径 9.2~11.4cm, 器高 0.9~1.0cm, 復元底径 6.4~9.2cm, 底部切磨し  
 しはへツ切りで, 板状狂風を磨属す。  
 小丸底杯 a (50) 復元口径 10.2cm, 器高 2.5cm, 全体的に磨属するが, 底部へツ切りに押し出し,

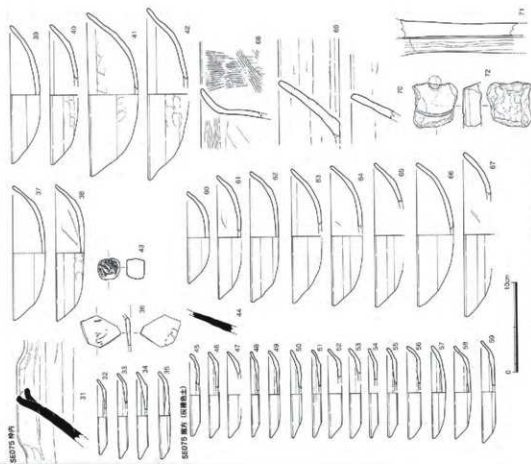


Fig. 73 2575075 出土遺物実測図② (1/3)

板状圧痕も残る。

丸底平 (61～67) 底元口径 13.7～18.2cm、器高 0.9～1.9cm、底部へう切りで板状圧痕を残す。

内面にミガキを施すか滑膩も目立つ。

縁 (68) 口縁部内面はヨコハテ、外面はタテハテ、体部内面はヘラクダズリ。胎土は 0.1cm 以下の砂粒を含み峰地灰色を呈する。

69 の胎土は 0.1cm 以下の砂粒を含み灰白色を呈する。内外面に胎土部の褐色斑が確認できる。内面と外面はヨコナテ、それ以外にナテ調整である。70 は 0.1cm 以下の砂粒を含む胎土で、外面はナテ、内面ヨコナテ、口縁部内面は強いヨコナテのみみられる。

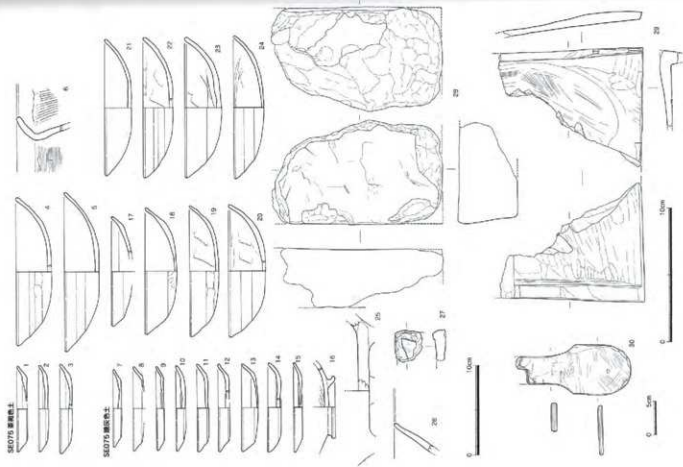


Fig. 72 2575075 出土遺物実測図① (1/3, 29 は 1/2, 30 は 1/4)

器台 (71) 器台の脚部で、中心に 1cm 程度の円孔を作り、外面は丁寧な縦方向のナガを施す。褐色良好で淡褐色を呈する。

土製品

脚管 (72) 脚土は 0.1cm 以下の砂粒を多く含む白灰色で、その上半部は黒灰色、その上面と側面に黄土が厚さ 0.2 ~ 1cm 程度あり、その面に 0.2cm の輪状の溝と窪みが施されている。底は淡灰色を呈する。

#### 2575E095 褐色色土出土遺物 (Fig. 74)

須弥器

外 e (1) 体部は直線的に外反する。底部周りに低い氷行を貼付する。

土器類

杯 a (2) 底部は底元直径 5.1cm と小さいが体部は大きく外反する。底部は凹輪へ手切り後ナガ調整する。底は良好で色調は茶灰色を呈する。

脚 c (3) 丸底のある杯部に高台を貼付する。色調は白褐色を呈する。

脚 (6, 7) 6 は体部外面がへつコナリ、それは外面の外面はヨコナゲ、7 は木味のある口縁部で、0.3cm 以下の砂粒を多く含む灰色や黒褐色を呈する。外面に担頭部の上のものもみえるが磨滅し不明。

黒色土器

杯 (4, 5) 丸底のある杯で、共に A 腹、4 は内外面ともミガキが施すが、内面のみ黒色化している。5 は凹輪が目立つが内面に僅かにミガキが残る。

#### 2575E095 褐色色土出土遺物 (Fig. 74)

須弥器

器 (8) 白色胎性を多く含む。底は良好で、褐色灰色を呈する。外面は明きの後凹輪ナガ、内面は凹輪ナガ。底部内外面はナガ調整される。底部外面には氷行が磨滅している。底部直径は 12.3cm。

大腹 (9) は脚部下半部分で、外面は凹輪ナガ、内面は凹輪ナガ。内面上半部はヨコナゲ。下半はナガ調整。色調は暗赤褐色を呈する。

土器類

杯 a (10 ~ 12) 復元口径 11.8 ~ 12.2cm、脚高 2.9 ~ 3.3cm、復元底脚径 5.3 ~ 7.1cm、10・11 は木味のある体部で、底部はへつコナリで外面は凹輪ナガ、内面は底はその後不定方向のナガ調整。12 は中腹に僅かな曲線を有する。色調は灰色を呈する。

外 e (13) 復元口径 15.0cm、脚高 4.0cm、復元高台径 8.0cm、三角形の高台を貼付する。内外面凹輪ナガで、底部外面には極圧痕が残る。

脚 c (14, 15) 14 は高台径 7.6cm、底部内外面が不定方向のナガ、その他は凹輪ナガ。15 は復元高台径 7.1cm、内面は僅かなミガキ、その他は凹輪ナガ。

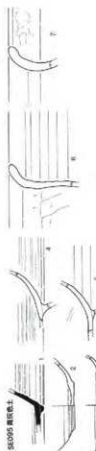
脚 c (16) 高い氷行部分で、内外面ともナガ調整。断上は磨滅した長石を少量含む、やや粗い。色調は褐色を呈する。復元高台径 11.4cm。

脚付杯 (17) 脚部のみで全形は不明で高台径 24.0cm、脚土は磨滅した雲母や長石を含み、明閃褐色を呈する。内外面とも凹輪ナガ。

黒色土器

脚 c (18 ~ 23) 18 は復元口径 12.9cm、脚高 5.7cm、復元高台径 8.0cm、細い高台を貼付する。内面下半はへつコナリナガ、その他は凹輪ナガ。底部内面には工具による線刻がある。19 は復元口径 15.0cm、脚高 5.4cm、復元高台径 9.9cm、外面は凹輪ナガ、内面は丁寧なミガキで高台までには磨滅できない。

5E095 須弥器上



5E095 須弥器上

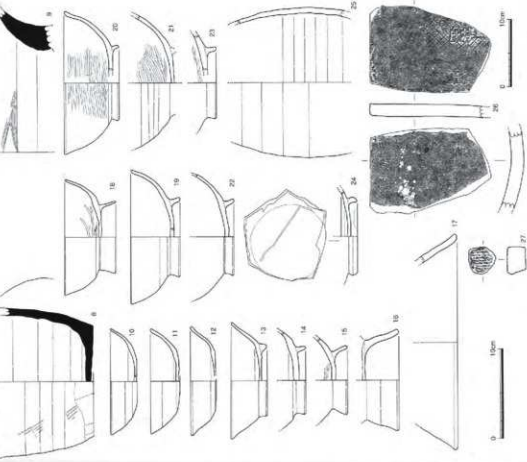


Fig. 74 2575E095 出土遺物須弥器① (1/3, 26 は 1/4)

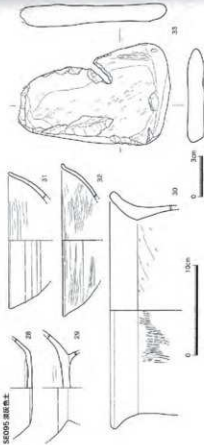


Fig. 75. 2575E095 出土遺物(複製) (17, 33は1/2)

A 皿, 20は復元口径16.0cm, 器高6.2cm, 復元高台径8.4cm, 内外面ともミガキを施すが、黒色化は内面のみで、外面下半には一部油跡のようなものが付着する。A 皿, 21は高台全てが剥落する。外面回転ナズ、内面ミガキ。胎土は精製され微細な長石を含み、灰白色を呈する。22は高台径9.0cm, 体部は丸みがあり、外面は回転ナズ、内面はミガキであるが、磨滅して単位は判別しない。A 皿, 23は復元高台径8.0cm, B 皿, 底部外面にヘラ記号のようなものがある。

## 灰土器

投重 (24) 高台径8.2cm, 内面底部はすりづ灰色釉を円形に焼き取り、ヘラ記号と重ね焼き痕がある。欠損するが僅かに蓋が付いている。高台外面は輪飾, 内面は縦線, 高台裏村は使用により磨滅している。

## 中国陶器

蓋 (25) 内外面回転ナズで、外面のみ褐色を施す。

## 瓦類

平瓦 (26) 「半片」の文字が入った格子印。器面は磨目瓦とナズ調整が見られる。

瓦瓦 (27) 大きさ3.0×2.7cm, 厚さ2.1cm。

## 2575E095 灰土土遺物 (Fig. 75)

## 黒色土器

杯 a (28) 復元底径8.2cm, 内面は全て黒色化しているが、一次焼成で土器が変色した可能性も考えられる。

杯 c (29) やや内湾する高い縁台を施す。色調は淡褐色で、内面に僅かにミガキが確認できる。A 皿

罍 (30) 復元口径36.4cm, 口縁部内面はヨコナズ, 体部内面は斜め方向のヘラケズリ。外面はタテハケ, 0.3cm以下の白色砂粒を多く含む。色調は淡紫灰色や褐色を呈する。

罍 (31, 32) 31は復元口径15.2cm, 胎土は白色砂粒を含む紫灰色を呈する。A 皿, 32は復元口径17.0cm, 内外面にミガキを施す。B 皿。

## 石製品

用途不明製品 (33) 縦11.5cm, 横5.6cm, 厚さ1.3cmの扁平な材料で表面が磨らかに凸凹している。一部に人形的に切り込んだ部分がある。砥石としても使用したとみられるが詳細な利用は不明。

## 2575E105 紫灰色土出土遺物 (Fig. 76)

## 土器類

小皿 a (1~2) 1は復元口径9.6cm, 器高1.3cm, 底部は回転ヘラ印。2は復元口径9.8cm, 器高0.9cm, 底部は磨滅するが似た瓦風が残る。3は底部ヘラ印。器高0.8cm。

罍 c (4) 体部中位がやや厚い。復元高台径9.7cm, 色調は淡紫褐色を呈する。

## 2575E105 紫灰色土出土遺物 (Fig. 76)

## 土器類

小皿 a (5, 6) 復元口径ともに11.8cm, 器高1.5, 1.6cm, 復元底径ともに8.6cm, 底部は回転ヘラ印。色調は淡褐色を呈する。

小皿 c (7) 復元口径13.2cm, 器高2.5cm, 復元高台径7.8cm, 全体的に磨滅する。

皿 (8cm) 口縁部の破片だが、全形がいまらぬ程にくい。内外面は丁寧な回転ナズ調整, 復元口径11.6cm。

杯 a (9) 復元底径7.0cm, 底部は回転ヘラ印で器内に斜状三角が残る。色調は淡紫白色を呈する。罍 (10) 口縁部が僅かに彫写している。復元口径13.2cm。

罍 c (11) 復元高台径7.2cm, 色調は淡紫白色を呈する。

罍 (12) 復元口径12.0cm, 内外面回転ナズ, 体部内面は不定方向のナズで、一部に工具痕がみられる。胎土は0.3cm以下の砂粒を少量含む。色調は淡褐色を呈する。

## 灰土器

罍 c (13) 復元口径14.2cm, 器高6.0cm, 復元高台径8.0cm, 口縁部磨滅を僅かに外反させる。内面はミガキ。外面は回転ナズを施す。A 皿。

## 石製品

瓦類 (14) やや内湾する形状で、内外面に成形のケズリ痕と使用時の磨痕がみられる。滑石製。

## 瓦類

平瓦 (15~18) 15-16は格子印に「半片」の文字。17は二重の格子印。18は二重格子にさらに細かく格子を入れた型書き目を施す。

## 2575E105 紫灰色土出土遺物 (Fig. 76~78)

## 土器類

小皿 c (19) 復元口径13.0cm, 器高1.75cm, 復元高台径7.3cm, 丸味のない低い杯に低い縁台を施す。内面底部は回転ナズ後不定方向のナズ, 外面底部は回転ヘラ印り重組いナズ調整, 色調は紫灰色を呈する。

杯 a (20~23) 底径は7.1~8.0cm, 底部は回転ヘラ印り後ナズ調整, 20は体部がやや厚い, 22は丸みのある器底である。

罍 c (24, 25) 内外面回転ナズで、内面底部はその後ナズ調整, 色調は紫灰色や褐色を呈する。

小皿 (26) 復元口径14.2cm, 外面は二次焼成による被膜で磨滅している。それ以外は回転ナズ。

## 黒色土器

罍 c (27) 方形の縁台を施す。胎土は砂粒を僅かに含む。内外面ともミガキを施す。B 皿。

## 灰土器類

罍 (28) 高台内面に僅かに蓋を有する高台を施す。高台径7.2cm, 内面には沈線が通る。内外面に淡い緑褐色を施すが、高台内面は磨滅で輪がバラバラ付着している。胎土は紫褐色で、近江面に削られる。

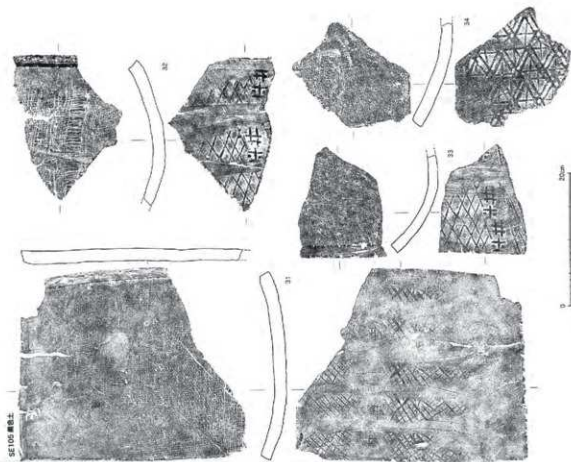


Fig. 77 257SE105 出土遺物家瀬段② (1/4)

反輪跡形  
 重 (29) 口縁端部を僅かに染げる。内外面に僅かに褐色染のある透明釉を施す。  
 反類  
 平瓦 (31 ~ 33) 31は小さな格子印有。色調は褐色色を呈する。32・33は格子目に「平井」の文字

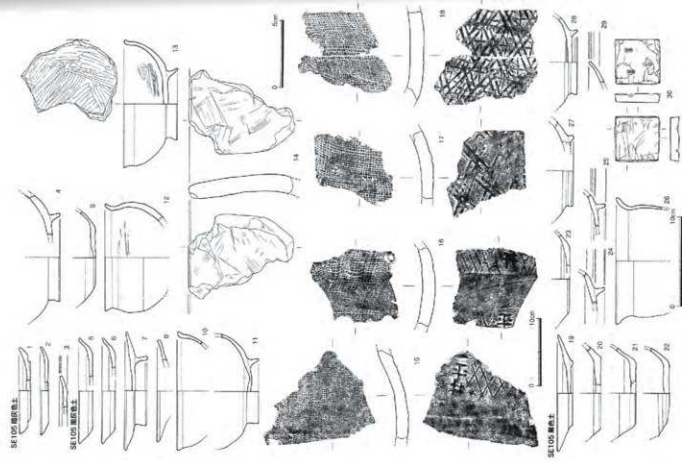


Fig. 76 257SE105 出土遺物家瀬段① (1/3, 14・30は1/2, 55は1/4)



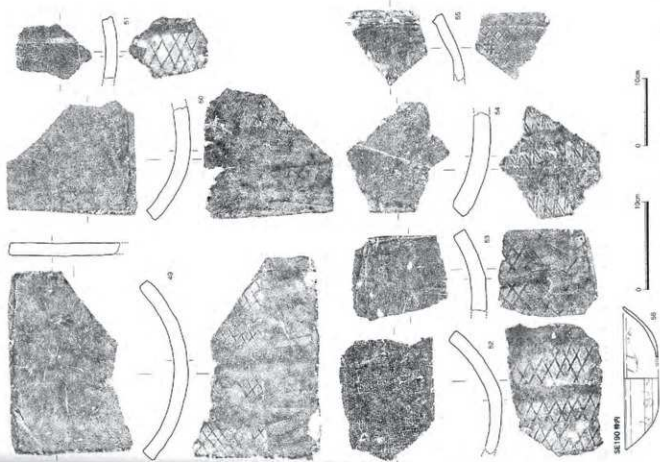
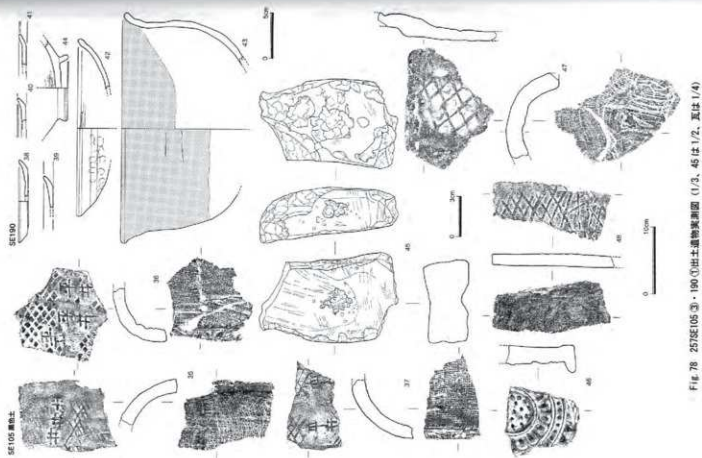


Fig. 78 257SE105③・190①出土遺物断面図 (1/3, 45 は 1/2, 真体 1/4)

Fig. 79 257SE190 出土遺物断面図之 (1/3, 45 は 1/4)

丸、34は二重格子に十字を入れた印を施す。31・32の側面は半分へう切りし切開している。35・34の側面は全面へう切りする。

丸瓦 (35～37) 全て格子に「字」と同じ文字瓦。断面端部は僅かにへう切りし切開している。その後長割型。36は刻線の格子である。

石製品 (30) 大きさは3.4×3.4cm、厚さ0.65cm、裏面に3ヶ所穿孔がある。色調は黒灰色を呈する。

#### 2575E190 出土遺物 (F1g. 78・79)

土師器

小皿a (38～41) 外面底部は回転へう切りで、38・39は板状圧痕が残る。38は復元口径9.3cm、器高0.9cm、復元底径7.2cm。

丸形器a (42) 復元口径19.8cm、内面にはミガキb、外面下半には指痕圧痕が残る。

丸形器 (43) 口径35.6cm、胎土は0.2cm以下の砂粒を少量含む。内外面ナゲ調整とみられ、外面には僅か印が付着している。

黒色土器

丸 (44) 復元口径7.1cm、外面底部にはへう形穿孔がある。A型。

瓦類

軒丸瓦 (46) 欠損しているが、中間は1/6:1/2とみられ、その外側に横脊、珠文、縦脊が施される。側面・裏面ナゲ調整。淡黒灰色や吹白色を呈する。

丸瓦 (47) やや大きめの格子印を呈す。

平瓦 (48～50) 全て格子で、48は若干不定形な斜格子印を、49は格子で、50は順・格子印を、51は大きめの斜格子印を、52・53はやや大きめの斜格子印を、54は二重格子印を、55は格子目に「字」の文字瓦。

石製品

碇石 (45) 4面使用が認められ、研削痕跡と共に敲打痕も残る。大きさは9.4×6.2cm、厚さ2.4cm、砂割製。

#### 2575E190 種別出土遺物 (F1g. 78)

土師器

丸形平瓦 (56) 復元口径16.0cm、器高3.7cm、口縁部は僅かに外反する。内面にはミガキbとコテ当て痕が残る。外面下半には指痕圧痕と板状圧痕が確認できる。

#### 2575E210 出土遺物 (F1g. 80)

須恵器

蓋3 (1) 口縁部を僅かに肥厚させる。外面上半部は回転へう切り痕ナゲで、縦脊のみ残る。その他内外面とも回転ナゲ。復元口径15.8cm、色調は淡灰色を呈する。

蓋4 (2, 3) 2の外周上半部は回転へう切り後横脊ナゲ調整。口縁部は僅か横脊のため白灰色を呈する。3は内外端部に僅かに僅か印がある。断面ナゲ調整。

平瓦 (4) 外面底部は回転へう切り後一重ナゲ調整。その他は回転ナゲ。黒灰色を呈す。

坏c (5) 底部部に縦い溝を刻削する。復元口径9.6cm、高台部分には板状圧痕が残る。

丸 (6) 口縁部に回転ナゲ、外面下半部は印を、内面は当て具痕が残る。

土師器

皿a (7) 復元口径16.4cm、器高2.3cm、復元底径12.6cm、外面底部は回転へう切りで、その端は回転ナゲ。内面底部はその不定方向のナゲ。色調は淡褐色を呈する。

丸 (8～13) 復元口径7.6～8.8cm。色調は灰茶褐色や淡褐色を呈する。内外面は回転ナゲで、内面底部の一部をナゲ調整する。

葉 (14) 凹部を十字形に凸削する。体部内面はラウクズリ、口縁部内面はコハケ、体部外面はタテハケで、一部凹部が付着する。色調は緑茶褐色を呈する。

灰緑陶器

段皿 (15) 内面に黒灰色釉を薄く塗す。外面は回転ナゲで縦筋。

#### 2575E210 棕色粘土出土遺物 (F1g. 80)

土師器

坏a (16) 復元口径6.0cm、胎土不良で乳白色を呈する。外面底部には板状圧痕が残る。

#### 2575E210 黒灰色粘土出土遺物 (F1g. 80)

須恵器

蓋3 (17) 隅内に口縁部をのみまみ出している。外面上半部は回転へう切り後長割型。

坏a (18) やや外に波状的に窪く体部を持つ。復元底径7.2cm、底部は回転へう切り後長割型。板状圧痕も残る。その他は回転ナゲで、その内面底部がナゲ調整。

坏c (19) 復元底径8.0cm、胎土がやや不貞で淡色や淡茶灰色を呈する。

段 (20) 二重口縁で、体部外面には表状文が凸削されている。

土師器

葉 (21, 22) 内面はへうラズリ、外面はハケの横ナゲ調整。器蓋はヨコナゲ。22は口縁部が肥厚し、体部は薄く、外面には炭化物が付着する。

#### 2575E240 出土遺物 (F1g. 81)

土師器

坏c (1) 高台は全て欠落する。坏部の底部はやや丸みがある。色調は暗褐色を呈する。復元口径10.8cm。

土師器

埴 (2) 胎土は0.3cm以下の砂粒を少量含む。淡灰色を呈する。断面一面に窪る。

石製品

碇石 (3) 4面使用されている。砂割製。

瓦類

平瓦 (4～6) 側面に不定形の格子印をナゲ調整を行う。5は「字」の文字瓦。6は器元不良で淡褐色を呈する。

土師器

#### 2575E240 種別出土遺物 (F1g. 81・82)

土師器

小皿a (7) 口径10.6cm、器高2.0cm、底径7.6cm、底部は回転へう切りで、板状圧痕が残る。内面は不定方向のナゲ。

坏a (8) 復元口径11.6cm、器高2.4cm、底径8.2cm、底部は回転へう切りで、板状圧痕が残る。色調は乳白色を呈する。

坏 (9) 復元口径13.4cm、外面は回転ナゲ。内面はミガキbで、コテ当て痕が残る。

坏c (10) 高台径7.0cm、内面は十字方向のナゲ。色調は吹乳白色を呈する。

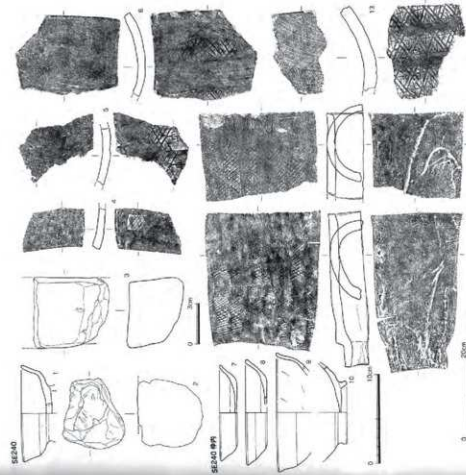


Fig. 81 2578240 出土遺物実測図① (1/3, 3は1/2, 瓦は1/6)

丸底杯 (1) 磨滅するが内面にミガキが残り、外面下半に指頭圧痕が残る。

2578245 黒灰色土出土遺物 (Fig. 84)

黒色土器

例c (2, 3) 2点ともに内面のミガキが半は輪と磨滅する。A 皿、2は高さ径7.6cm、3は復元高さ径7.8cm。

瓦類

平瓦 (4, 5) 4は格子明き、5は正格子に「平井瓦」と入れた文字瓦

2578245 黒色土出土遺物 (Fig. 84)

土器類

杯a (6) 全体が磨滅する。色調は灰い褐色を呈する。

例c (7, 8) 7は高さ径7.5cm、白褐色を呈する。8は復元径12.8cm、高さ3.7cm、高さ径7.3cm。

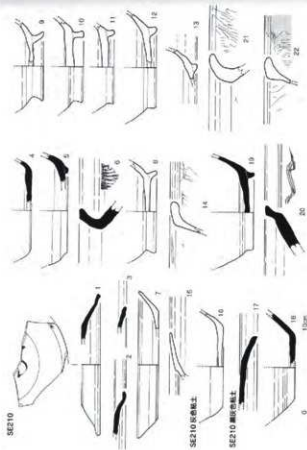


Fig. 80 2578210 出土遺物実測図 (1/3)

瓦類

丸瓦 (11, 12) 11は不定形な斜格子明きに「平井」の文字瓦、部分的に格子をナゲ落す。縦34.35cm、幅17.86cm、12は格子明きに「平井瓦」の文字瓦、部分的に格子をナゲ落す。一部に墨が付着する。

平瓦 (13~19) 13は二重格子に細かい格子を組み合わせた明きで、内面には糸切り痕が残る。14・15は格子明きで褐色色を呈する。両面は布目で一部ナゲ落す。側面断面は半分へラ切りし、折ったままであるが、片方はへラクズリで整形している。14は縦32.6cm、幅28.5cm、15は縦28.8cm、幅29.8cm、16~19は格子明きに「覆瓦」を入れた文字瓦、部分的に格子をナゲ落す。側面断面は半分へラ切りし、折ったままであるが、片方はへラクズリで整形している。色調は灰色を呈する。大きさは縦22.35~34.0cm、横26.7~28.1cm、厚さ1.6~1.85cm。

2578240 黒灰色土出土遺物 (Fig. 83)

黒色土器

托土板 (20) 復元高さ径7.7cm、内外面にミガキを呈す。皿類。

瓦類

丸瓦 (20, 21) 凸面はや不定形の斜格子に「平井」の文字が偏みに見える。内外面とも一部ナゲ落す。色調は褐色色を呈する。20は縦33.6cm、横18.3cm、厚さ1.8cm、21は縦33.1cm、横16.7cm、厚さ1.6cm。

平瓦 (22, 23) 22は縦34.2cm、横28.6cm、厚さ1.8cm。側面断面は分割線をも半分入れ切斷し、一方のみへラクズリしている。細い格子明きで、褐色色を呈する。23は格子に「平井」の文字瓦。

2578245 出土遺物 (Fig. 84)

土器類

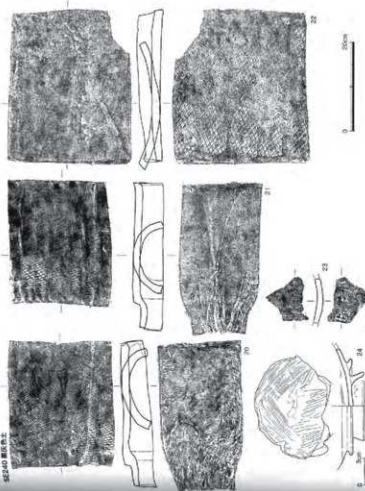


Fig. 81 2578240 出土遺物実測図① (1/3, 真は1/6)

徳政不貞でいふ、褐色を呈する。

鏡 (9, 10) 9は内部内面がヘラケズリ、外面はタテハケ。10は内部内面がヘラケズリ、外面は回転ナデで鏡が付着する。

黒色土器

鏡 (11, 12) 裏にA面で、外面は茶褐色を呈する。11は内面にミガキが確認できる。

金属製品

帯金具肥尾 (13) 大きさは3.2×2.5cm、厚さ1.6cmで、裏面を中心に鏡が覆うが、表面は緑青色で部分的に銜色を呈する。表面には4ヶ所に0.8cm程度の留め具の穴が開く。

2578245 葬内出土遺物 (Fig. 84)

土師器

杯a (15, 16) 15は急縁が直んでいる。口径11.5cm、器高2.5cm、底径7.1cm。底面はヘラ切りで板状に削られる。その縁は回転ナデで内面全部はその縁ナデ、灰褐色を呈する。16は底部ヘラ切り後細かなナデ磨製。

碗c (17, 18) 17は唇を口径12.8cm、器高4.4cm、高台径7.9cm、全面回転ナデ。18は唇を口径14.0cm、器高5.1cm、高台径8.9cm。外面底部に板状に削られる。外面は黒褐色で部分的に塗られてい

る可能性がある。

黒色土器

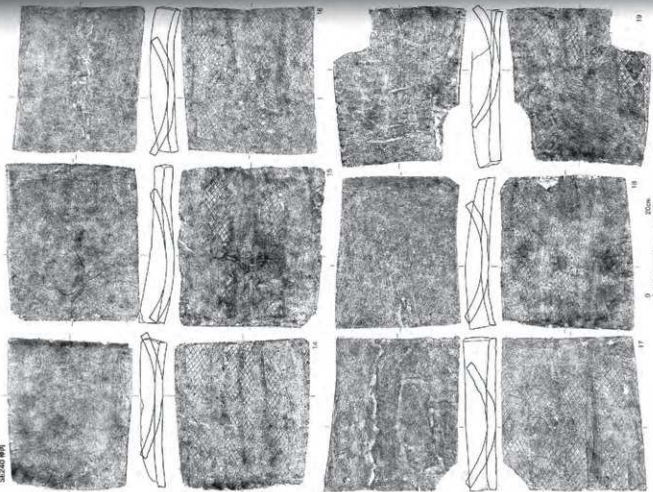


Fig. 82 2578240 出土遺物実測図② (1/6)

- 柄c (19) 復元口径12.0cm、器高4.7cm、復元高台径8.0cm。内面はミガキc、外面は凹輪ナズ。口縁部を僅かに外区させる。A類。  
土器品
- 樽 (14) 胎土は0.1cm以下の砂粒を多く含む。灰褐色を呈する。外面はヘラケグナズ溝部。厚さは5.9cm。  
瓦類
- 九瓦 (20) 凸面は除刷の格子印きで一般ナズ滑す。  
2575E245 黒青色土出土遺物 (Fig. 84)
- 土師器
- 壺 (22) 底面はヘラ切りで版刷し痕が残る。色調は淡褐色を呈する。器高1.1cm。  
厚 (22) 外周カタハケ、体部内部ヘラケグナズ、口縁部内面は凹輪ナズ。外面は壁が付着する。  
瓦類
- 九瓦 (23) 凸面の中央付近は斜格子印きでその前後はナズ調整する。色調は灰褐色等を呈する。器高37.0cm、横15.9cm、厚さ2.6cm。  
2575E265 黒茶色土出土遺物 (Fig. 85)
- 土師器
- 坪a (1) 全体的に磨減するが、底面はヘラ切りとみられる。色調は淡灰白色を呈する。  
2575E265 灰茶色土出土遺物 (Fig. 85)
- 土師器
- 例 (2, 3) 2点とも磨減し調整不明。色調は淡褐色を呈する。  
例c (4) 内面にはミガキ痕が確認できる。明茶褐色を呈する。  
例 (5) 口縁部を外面に部曲させる。外面凹輪ナズ。内面は磨減。  
砂粒陶器
- 例 (6) 内外面に緑灰色釉を薄く施すが、口縁部は僅かに剥けている。瓶底は良好で好位置。  
石製品
- 石錘 (7) 方形の把手を持つ古いタイプの石錘である。滑石製。  
砥石 (8) 使用面が4面で、部分的に研削時のキズも確認できる。砂岩製。  
2575E265 黒色土出土遺物 (Fig. 85)
- 土師器
- 坪a (9) 内面は不定方向のナズ。外底部は板状圧痕が残る。色調は淡白褐色を呈する。  
例 (10, 11) 10は焼成不良で磨減する。色調は淡茶褐色を呈する。11は原産不具で磨減し、にぶい茶褐色を呈する。  
黒色土器
- 例c (12) 復元高台径7.8cm、A類。  
2575E265 枠内出土遺物 (Fig. 85)
- 土師器
- 例c (13, 14) 13は復元高台径8.0cm、14は内面にミガキ、外面は凹輪ナズ。復元高台径9.2cm。外周底部にはヘラ記号がある。色調は灰褐色を呈する。  
黒色土器
- 例c (15) 内面にはミガキc、外面は凹輪ナズ。復元高台径8.0cm。色調はにぶい灰褐色を呈する。

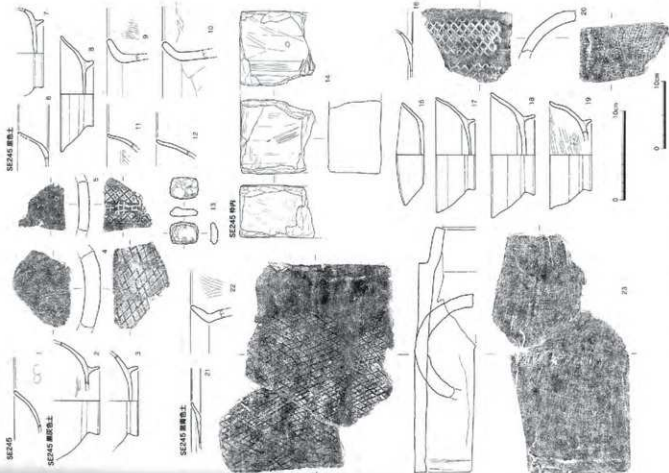


Fig. 84 2575E245 出土遺物実測図 (1/3, 真は1/4)

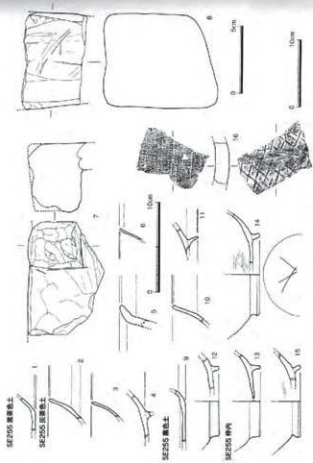


Fig. 85 2575E35 出土遺物実測図 (1/3, 7-8は1/2, 16は1/4)

A組

瓦類

平瓦 (16) 格子叩き

土坑

2575K195 出土遺物 (Fig. 86)

須恵器

外e (1-3) 底部に磨れた赤台を貼付する。1の復元高台付は8.9cm。

土器

坏a (4) 焼成不良で外表面摩滅する。色調は淡茶褐色を呈する。

丸底杯a (5) 焼成不良で内外面摩滅する。取込少。

壺 (6-9) 体部内面はヘラケズリ。その他は摩滅し磨整不明。胎土には僅かに角閃石を含む。

2575K200 黒灰色土出土遺物 (Fig. 86)

須恵器

皿×柄 (10) 柄り出し成台で、胎土は淡灰色で、内外面に薄く緑灰色釉を薄く施すが、柄ど刺けて

いる。内面には赤ズミもしくはヘラ身がある。復元高台付は6.6cm。

2575K205 黒色土出土遺物 (Fig. 86)

土器

小皿a (11) 底部は凹輪ヘラ切りで、胎土は淡茶灰色を呈する。

小皿a (12-15) 底部は凹輪ヘラ切り。12は復元口径10.2cm、器高1.6cm。復元底径6.6cm。底部

は凹輪ヘラ切り成十字調整。14の底部切り磨した成切りである。

細脚鉢 (16) 胎土は砂粒を多く含む。褐色がかった乳白色を呈する。内面はナツ調整で、若干滑ら

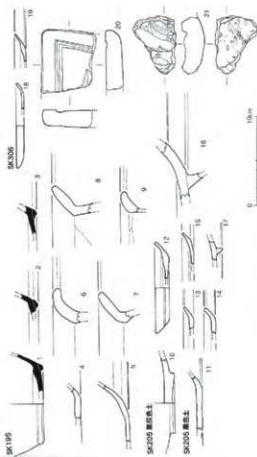


Fig. 86 2575K195, 205, 306 出土遺物実測図 (1/2)

かになっている。外面は凹輪ヘラケズリで成台付冠は凹輪十字調整。

灰陶器

杯e (17) 胎土は淡灰色で、白灰色釉を施す。内面は釉を吹き取り、底白焼き痕が残る。外面

は成台と底部が磨整。

2575K306 出土遺物 (Fig. 86)

土器

小皿a (18, 19) 18は復元口径9.6cm、器高0.9cm。復元底径7.1cm。磨滅し磨整不明。19は焼成

不良で磨整する。

土製品

脚型 (20, 21) 20は幅0.7-0.8cmの溝を作っている。胎土は0.1cm未満の砂粒が多く、明茶褐色

を呈する。21の胎土はモウズ肌が残る。表面は磨り込みみがあるが、全部はわからない。部分的に磨整し

ている。

畑状溝槽に切り及心須恵出土遺物

2575K220 黒灰色土出土遺物 (Fig. 87)

土製品

トリイ (1) 内面は磨削し淡褐色や灰褐色を呈する。

2575K230 黒色土出土遺物 (Fig. 87)

土器

小皿a (2-5) 復元口径9.2-10.6cm、器高1.1-1.6cm。復元底径6.4-8.0cm。底部は凹輪ヘ

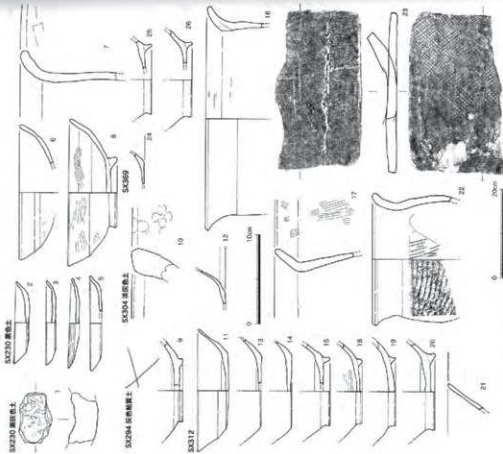
ラ切り。内面底部は不定方向のナツ。

丸底杯a (6) 復元口径15.0cm。全体的に磨整する。内面に明茶褐色の付着物がある。

壺 (7) 全体的に磨整するが、内面はナツ調整のように見える。胎土は0.5cm以下の砂粒を多く含

み、淡褐色を呈する。

黒色土器



F. 87 畑林遺構に切り及び遺構出土遺物類 (1/3, 23は1/6)  
 柄c (8) 口径16.4cm, 器高3.4cm, 高台径7.8cm, 脚高が目立つ部分が部分的にミガキeがある。B柄。  
 2575X294 灰色系黄土出土遺物 (F. 87)  
 緑釉陶器  
 柄 (9) 高台は削り出しで、復元高台径7.0cm, 胎土は粗灰質。胎土白緑色だが殆ど磨きうすうす  
 と残るのみである。内面には垂れ込め縦へラケズリが認められる。  
 2575X304 赤灰色土出土遺物 (F. 87)  
 土製品  
 甲冑 (10) 全形が製めにいが甲冑の可能性が考えられる。胎土は白色粉を多く含む。外面は指  
 甲正屈が残り、内面は須恵質材になって灰色を呈し、ヒビが多く入る。

2575X172 出土遺物 (F. 87)

土師器

杯a (11~14) 全体的に磨減が目立つ。11は復元口径13.6cm, 器高3.5cm, 底径8.5cm, に近い褐色  
 灰色を呈する。

例c (15) 復元高台径7.7cm, 磨減し調整不明。色調は濃い灰褐色を呈する。

例e (16, 17) 16は復元口径24.8cm, 口縁部内面はヨコハダ。その趣は磨減するが全体内面はヘラ  
 ケズリ。胎土は0.15cm以下の砂粒を多く含む。17は外面にタテハダが残り他は磨減する。

黒色土器

例c (18~20) 全体的に磨減が目立つ。A柄, 18は方形高台で復元高台径7.3cm, 内面にはミガキ  
 eが残る。19・20は三角形の高台で、19は復元高台径7.6cm, 20は復元口径8.6cm。

例 (21) 点線的な体部で、磨減するが特に内面にミガキが残る。色調は淡茶褐色を呈する。A柄。  
 割壊土器

例 (22) 復元口径14.7cm, 体部内面はナガズリ。外面は明き黒。胎土は0.2cm以下の砂粒  
 を多く含む。底成不良で暗茶褐色を呈する。

瓦類

平瓦 (23) 種子明きで半瓦ほどナガズリしている。周囲では数十のつなを並べ確認できる。縦  
 35.2cm。

2575X309 出土遺物 (F. 87)

土師器

杯a (24) 内外面磨減する。色調はやや濃い茶褐色を呈する。

例c (25, 26) 共に底部端に高台を削り出す。内外面とも磨減し調整不明で、色調は淡灰白色や淡  
 茶褐色を呈する。復元高台径は25が7.8cm, 26が8.4cm。

2575X380 (畑林遺構) 出土遺物

2575X215 出土遺物 (F. 88)

土師器

例 (1) 体部は高く立ち上がり、端部を僅かに外区させる。色調は淡褐色を呈する。  
 越州系高台器

例 (2) 縁が全て割落し、内外面両面ナガズリが確認できる。胎土は磨きされ白灰色を呈する。I柄。  
 須恵器

2575X272 出土遺物 (F. 88)

須恵器

例a (3) 復元器高10.8cm, 外面底部は即座へラ削り後継いナガズリで、根状正屈が残る。

例c (4, 5) 4は底部端に高台を削り出す。復元高台径9.0cm, 底灰色を呈する。5は磨き灰色を呈  
 する。

小鉢 (6) 復元口径10.7cm, 外面下半はケズリ。その他は即座ナガズリ。口縁部は自然釉が付着する。  
 例 (7) 復元器高11.3cm, 胎土は茶褐色をやや多く含む。外面は即座へラケズリ。色調は内面が  
 濃い褐色で、外面は明灰色を呈する。

土師器

例 (8) 体部内面へラケズリ。外面はタテハダ。胎土は0.5cm以下の砂粒を多く含む。  
 黒色土器

例c (9) 高台径8.2cm, 胎土は濃い褐色を呈する。内面は黒色化するが磨減し、調整不明。A柄。

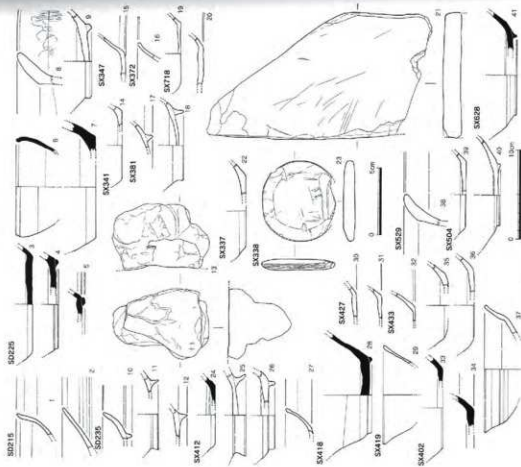


Fig. 88 畑取遺構出土遺物実測図 (1/3、右欄目は1/2)

- 2578235 出土遺物 (Fig. 88)  
土師器
- 陶c (10~12) 10は器高5.3cm、11・12とも細い管状を取付する、11は器高器径7.8cm、土壁 (13) 表面に生きている早稲目があり、断面に常盤みのような装飾がある。胎土は淡褐色白色スチや砂粒を含んでいる。
- 2578337 出土遺物 (Fig. 88)  
土師器

杯a (22) 復元器径8.4cm、胎土は白色砂粒や雲母を含み、色調は茶褐色を呈する。

2578338 出土遺物 (Fig. 88)  
石製品

印型状石製品 (23) 一部欠損する。径6.0cm、厚さ0.85cm、両面平坦で片面の端部をやや斜めに削りしている。全面磨研する。

2578341 出土遺物 (Fig. 88)  
土師器

杯a (14) 復元器径7.7cm、瓶状形状が残るが全体的に磨滅する。底面茶褐色を呈する。

2578347 出土遺物 (Fig. 88)  
土師器

杯a (15) 造成不良で全面磨滅する。色調は茶褐色を呈する。

2578372 出土遺物 (Fig. 88)  
埴輪陶器

輪 (16) 胎土は土師質で、外面に彫かに淡緑黄色繪を濃く施す。

2578381 出土遺物 (Fig. 88)  
土師器

輪c (17, 18) 17は全面磨滅、色調は白く濁茶褐色を呈する、18は器元高台径7.8cm、内外面磨滅する。淡白褐色を呈する。

2578402 出土遺物 (Fig. 88)  
須恵器

杯a (33, 34) 底部は回転→ラ切り後ナデ、その他は回転ナデ、33は器元底径6.6cm、色調は青灰色を呈する、34の色調はやや濃い灰色を呈する。

土師器

杯a (35, 36) 共に磨滅する、35はやや丸い底部で復元底径7.2cm、黄褐色を呈する、36は器元底径7.6cm、色調は黄褐色や暗茶褐色を呈する。

埴輪陶器

輪 (37) 体部中心で曲曲させ、若干外反させ口縁部に至る、体部下端は回転→ラケズリで、体部外反には深い沈線が定る。胎土は淡茶灰色で、内外面とも白濁した緑色繪を施す。復元器径14.2cm、器底径。

2578412 出土遺物 (Fig. 88)  
須恵器

杯a (24) 器元底径6.4cm、造成良好で青灰色を呈する。

土師器

陶c (25, 26) 25は器元高台径8.1cm、色調は淡黄褐色を呈する、26は小さく方形の高台で、復元器径7.5cm、色調は茶褐色を呈する。

陶 (27) 造成不良で内外面磨滅する。色調は白褐色を呈する。

2578418 出土遺物 (Fig. 88)  
須恵器

杯c (28) 底部端に深い管状を取付し、高台径8.5cm、体部内外面は回転ナデ、内面底部は不定方向のナデ、外面は回転→ラ切り後ナデ磨滅、色調は青灰色を呈する。



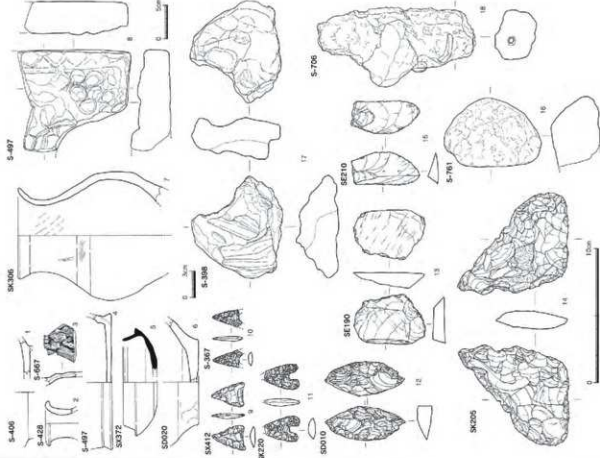


Fig. 89 第257次調査2面その他の遺物出土遺物番号表(1/3, 8は1/4, 石製品は1/2)

- 2573419 出土遺物 (Fig. 88)  
土師器  
小杯×小瓶 (23) 復元口径11.0cm, ほぼ直筒的な体部を持つ, 色調は茶灰色を呈する。  
2573427 出土遺物 (Fig. 88)  
土師器  
杯 a (30, 31), 2点とも底成不良で磨滅し磨擦不明, 色調は茶褐色を呈する。  
土師器  
杯 a (32) 底成不良で磨滅し磨擦不明, 色調は茶褐色を呈する。  
土師器  
杯 a (38) 復元口径7.4cm, 内外面磨滅する, 色調は茶褐色や白灰色を呈する。  
杯 a (40) 体部はかなりの外張りで, 低い三角形の肩台を呈する, 復元高台径6.6cm, 胎土は精削され, 赤褐色を呈する, 底成不良で磨滅し磨擦不明。  
2573432 出土遺物 (Fig. 88)  
土師器  
磨成不良で磨滅し磨擦不明, 胎土は0.2cm以下の砂粒を含み赤褐色を呈する。  
2573433 出土遺物 (Fig. 88)  
土師器  
東器  
杯 c (41) 若干深い底部に細くて直筒的な肩台を呈する, 復元高台径9.6cm, 内外面磨滅ナシで, 底部内面はその後のナシ磨擦, 色調は青灰色を呈する。  
2573718 出土遺物 (Fig. 88)  
土師器  
小瓶 a (19) 底径6.9cm, 底部はへら切り, 色調は明茶褐色を呈する。  
杯 a (20) 底成不良で磨滅する, 色調は暗茶褐色を呈する。  
石製品  
砥石 (21) 使用面は1面で研削層も成る, 欠損するが, 一回径1.3cm程度の穿孔がある。  
第2面その他の遺物出土遺物 (Fig. 88)  
埴器  
陶器 (1) 胎土は淡白灰色の土質で, 内外面には黄緑白色釉を施すが, 帯ん磨滅している, S-406より出土。  
木注ぎ (2) 復元口径5.6cm, 胎土は土質で内外面に明褐色を薄く施すが, 外面はやや剥落する, 内面は良好に成る, S-428より出土。  
長砂受皿  
水注 (3, 4) 3は基部とその付け根部分で, 暗茶褐色釉が施される, 内面は磨滅ナシ, S-407より出土, 4は高台径18.2cm, 胎土は黄褐色で底部外面は磨滅ナシ, 内面は磨滅ナシ後一方向のナシ, 体部外面は磨滅ナシ磨擦, S-497基灰色胎土より出土。  
須臾器  
灰身 (5) 復元口径12.0cm, 器高3.8cm, 口縁部内面がごく僅かに凹んでいる, 外面底部は凹陥ヘラツクスリ, 胎土良好で黄灰色を呈する, S372より出土。

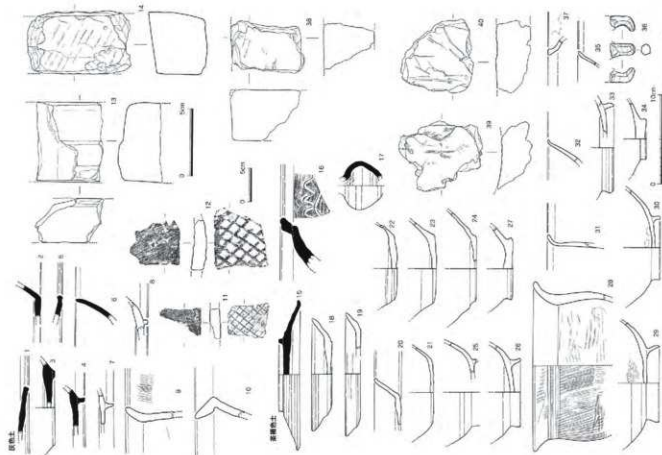


Fig. 90 第257次調査2番基層出土器物(要部) (1/3、石膏画は1/2、瓦は1/4)

発土土器  
 壺 (6) 底元泥部厚6.6cm、胎土は0.5cm前後の白色砂粒を多く含む、色調は白黄褐色を呈する、外生灰筋、S2029より出土。  
 蓋 (7) 底元厚10.2cm、口縁部は厚かに加厚されている、全体的に磨滅するが、内面はナガ調施、胎土は精製され、色調は淡黄褐色を呈する、S206より出土。

瓦類  
 瓦反 (8) 瓦瓦の右下方で、体底は不具で白灰色を呈し、表面の滑差が目立つ、縁部部分には三角形の断面が確認できる、S-097より出土。  
 石製品  
 石錐 (9~11) 9は縦2.5cm、横1.8cm、厚さ0.35cm、安山岩製、S3412より出土、10は基部を欠損する、現存長2.2cm、厚さ0.35cm、黒曜石製、S-07より出土、11は先端を欠損し、現存長2.6cm、横1.9cm、厚さ0.35cm、黒曜石製、S2209暗灰色粘土より出土。

ナイフ形石器 (12) 縦4.0cm、横2.5cm、厚さ1.0cm、押圧斜線による刀部を作り出している、黒曜石製。  
 削器 (13, 14) 13は縦5.4cm、横3.45cm、厚さ0.85cm、刃部縁を軽く加工している、安山岩製、S2100より出土、14は縦8.3cm、横6.9cm、厚さ1.3cm、内外面に細かく押圧斜線を呈す、一部自然面が残る、安山岩製、S2035黒灰色土より出土。

割片 (15) 縦5.1cm、横2.4cm、厚さ0.8cm、安山岩製、S2210暗灰色粘土より出土。  
 軋石 (16) 大きさは7.3×5.2×3.7cm、特に加工はない、S-761より出土。

土灰品  
 不明土灰品 (17) 胎土は0.2cm以下の砂粒を含み、蒸褐色を呈するが、部分的に灰基質で淡灰色を呈する、黄鼠ともナガ質や粗面圧灰が混る、S-208より出土。

高脚小瓶 (18) 中心に徑1cmほどの稜分のような部分があり、その周囲に花崗岩石や土師器破片を含む褐色粘土が体状を成している、これは植物の根などに蝕分などが著してできた自然物である、これ以外に2個この調査地で出土している、縦17.4cm、幅4.6~8.9cm、S-706より出土。

○塔2番基層層  
 灰色土出土遺物 (Fig. 90)  
 須恵器  
 蓋 (3) 口縁部を僅かに厚み三角形状に作り出す、外面は同転ヘラケズリで縁部近くが同転ナガ、内面の上半部はナガ、それ以外は同転ナガ、色調は淡黄褐色を呈する。  
 埴 (4) 外基部はへつり後ナガ調施、その他は同転ナガ、色調は淡灰色を呈する。  
 坏 (3, 4) 3は底面端に僅かに平らな高台を貼付する、形成不良で白灰色を呈する、腹元高台径8.3cm、4は高い方形高台を貼付する、色調は淡灰色を呈する。  
 高杯 (5) 胴部端部の破片で、内外面同転ナガ。  
 鉢 (6) 内外面同転ナガで、色調は黄灰色を呈する。  
 土師器  
 小皿 (6×7) 低い高台を貼付する、内外面同転ナガ調施不明、淡黄褐色を呈する。  
 甕 (6) 方形高台を貼付する、内外面同転ナガ、色調は淡灰色を呈する。  
 甕 (9) 底部カタナガ、体部内面はヘラケズリ、胎土は0.1cm以下の砂粒を多く含む。

源 (10) 複合口縁部の口縁部、地成不良で全面磨滅する。色調は乳若褐色を呈する。  
 瓦皿  
 平瓦 (11, 12) 11 は正格子向き。灰赤褐色を呈する。12 はやや大きい格子向きを呈す。外面は淡灰白色を呈する。  
 石製器  
 硃石 (13, 14) 13 は方形形の硃石で、全面がきれいで、磨滅は明確ではない。14 は玉面使用され、一部破損がみられる。砂岩製。

**黒色土出土遺物 (Fig. 90)**

須石器  
 土師器  
 丸×脚 (15) 輪状つまみ口径 8.5cm、復元口径 17.0cm、器高 2.35cm。外面上面は回転へつら切り後削り付。内面は回転ナズで、上面はそれ不定方向のナズ。砂粒を若干多く含む。色調は淡灰色や灰色を呈する。  
 大甕 (16) 二重口縁の口縁部で、回転ナズ後削部外面には瓦状文を呈す。  
 小甕 (17) 内外面回転ナズ。地成は良好でやや暗い青灰色を呈する。体積大径 5.4cm。

**土師器**

皿 a (18, 19) 18 は口径 12.75cm、器高 2.5cm、底径 7.7cm。底面外面は回転へつら切りで、色調は青灰色や淡灰色を呈する。19 は復元口径 14.0cm。

片 a (20 ~ 23) 20 の外面底部は回転へつら切り後削り付。色調は淡褐色を呈す。21 は復元底径 7.4cm。色調は淡灰白色を呈す。22 は底径 7.2cm。底面は回転へつら切りで、色調は淡灰白色を呈する。23 は復元底径 7.8cm。外面底部はへつら切り後削り付。色調は淡灰白色を呈する。24 は復元底径 7.4cm。色調は淡灰白色を呈する。

脚 e (25, 26) 25 は丸い体部で内面はミガキがみられる。26 は高台径 7.8cm。磨滅するが内外面にミガキのような痕跡を有す。

甕 (27, 28) 27 は高台が明確不明。地成不良で磨滅不明。色調は淡灰褐色や淡褐色を呈す。28 は復元口径 19.4cm。外面はタナハケで彫が付着。体部内面にココロコハケ後削り付調整。

**黒色土器**

皿 a (29, 30) 29 は復元高台径 8.8cm。外面下半は回転ナズ後削り付。内面はミガキ。A 類。30 は高台径 7.1cm。外面は回転ナズ。内面は磨滅するがミガキが僅かに残る。A 類。

甕 (31) 磨滅的な体部で外面には彫が付着する。胎土は精製されている。A 類。

脚 (32, 33) 32 の外面は淡灰褐色を呈し、外面は回転ナズで磨滅。33 は復元高台径 9.6cm。内面上面には地成が残り、淡灰褐色が僅かに残る。外面は磨滅。

**土師陶器**

皿×脚 (34) 高台は削り出しの円形高台で、高台径 4.5cm。底面は糸切り。輪は縁がかった淡灰色輪を呈す。削り外面は磨滅。須石製。

脚 (35) 胎土は地成良好の土師質。内外面とも彫のある緑褐色を呈す。  
 脚 (36) 断面のみで、へつらズで 6 面を削り出している。胎土は精製された乳白色で、全面削り。緑褐色を呈している。

**中国陶器**

甕 (37) 内外面は緑褐色輪が僅く残され、一部白化粧が垂れる。内面には淡褐色輪がまじらに厚く施されている。口縁部上面は彫がなくなっている。胎土は淡褐色を呈す。

**土師器**

片 (38) 欠損する器高 5.7cm。胎土は 0.5cm 以下の砂粒を含み淡灰色を呈する。  
 土師 (39, 40) 39 の胎土は 0.5cm 以下の砂粒を多く含む。スヤ質も多くみられる。面をなしている方に彫が付着する。40 の胎土は 0.3cm 以下の砂粒を多く含む。角閃石も少量含む。スヤ質も明確に。色調は淡灰褐色を呈する。

**黒色土出土遺物 (Fig. 91)**

**須石器**

土師器  
 丸×脚 (41, 42) 内面上半部はナズ磨滅。内外下半は回転ナズ。41 は復元口径 14.4cm、器高 1.8cm。つまみはかなり削れている。外面上半部は回転ナズ後削り付。42 は外面上半部は回転ナズ後削り付。43 は地部を僅かにつまみ削り付ている。44 の外面上半部は回転ナズ後削り付。内面上半部は不定方向のナズ。その他は回転ナズ。色調は灰褐色を呈する。45 は口縁部上面に僅かに其彫になる。内外面は回転ナズ。

甕 (43 ~ 45) 43 は地部を僅かにつまみ削り付ている。44 の外面上半部は回転ナズ後削り付。内面上半部は不定方向のナズ。その他は回転ナズ。色調は灰褐色を呈する。45 は口縁部上面に僅かに其彫になる。内外面は回転ナズ。

脚 e (46) 遺失で灰白色を呈する。

甕 (47) 内面は当て具痕が残る。底面はナズ磨滅し指頭痕が残る。外面中心は叩きの後回転ナズ。体部下半は回転ナズ後削り付。外面底部は回転ナズ後削り付調整。復元底径 9.8cm。

**土師器**

皿 a (48) 器高 1.4cm。内外面回転ナズ。色調は淡灰褐色を呈する。  
 杯 a (49 ~ 51) 49 は復元口径 12.8cm、器高 3.3cm。復元底径 6.4cm。底面外面は回転へつら切り。その他は磨滅するが回転ナズ。色調は淡褐色を呈する。50 は全面磨滅する。色調は乳若褐色を呈す。51 は丸味のある体部で、底面外面は軟状圧痕が残る。色調は淡灰褐色を呈する。

脚 e (52) 底面と体部の間に三角形高台を呈付する。色調は淡灰褐色を呈する。

甕 (53) 体部外面はタナハケ。内面ナズ。口縁部外面にココロコハケを施す。淡褐色輪を呈する。

**黒色土器**

皿 a (54) 復元高台径 8.0cm。胎土は淡褐色を呈する。内面ミガキが僅かに磨滅する。A 類。  
 土師陶器  
 脚 (55) 断面六角形に磨滅し成形している。胎土は土師質で全面に彫のある淡灰白色や淡灰色輪を呈す。

**古式土師器**

高杯 (56) 高脚的に広がる杯部で、復元口径 22.4cm。内外面回転ナズだが磨滅する。断面は僅かに残り。中央である。胎土は粗く若褐色や灰褐色を呈する。

**黒灰色土出土遺物 (Fig. 91)**

**須石器**

皿 a (57, 58) 底面外面がへつら切りの後ナズ。軟状圧痕も残る。内面底部は一方のナズ。その他は回転ナズ。57 は復元口径 16.5cm、器高 2.2cm。復元底径 14.6cm。色調は灰白色を呈す。58 は復元口径 17.6cm、器高 2.05cm。復元底径 13.7cm。色調は淡灰色を呈す。  
 杯 a (59) 復元口径 12.6cm、器高 2.6cm。復元底径 7.0cm。外面底部はへつら切り後ナズ。その他は回



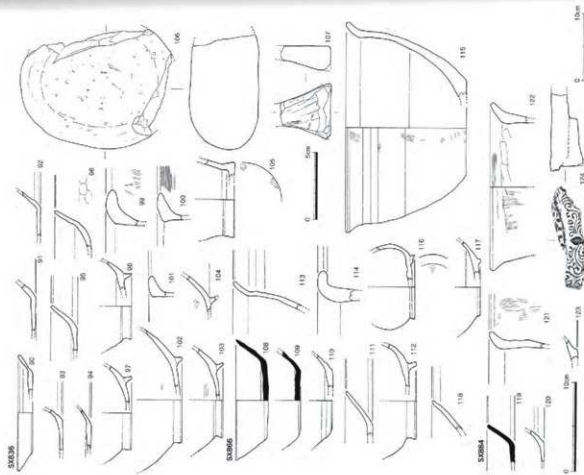


Fig. 92 第257次調査2西基層出土遺物実測図③ (1/3, 106・107は1/2, 124は1/4)

7.4 ~ 8.6cm, 色調は青灰色を呈する。81は復元口径12.6cm。

土師器

甗c (87) 高台径6.6cm, 構成不具で全面磨滅し, 色調は茶褐色を呈する。

瓦器

平瓦 (88) 格子印きで一線ナゲ物す。構成は不具で土質。断面形状は半分まで分割線を入れ, 切折し未磨面。

石版品

砥石 (89) 4面が使用されている。砂質割。

257S0336 出土遺物 (Fig. 92)

土師器

甗a (90) 復元口径13.0cm, 器高1.7cm, 復元底径9.4cm, 構成不具で磨滅不明。

甗b (91 ~ 95) 底部へろ切りで, 色調は褐色や茶褐色を呈する。

丸底a (96) 外面下半に指部圧痕が残る。

甗c (97, 98) 内外全面磨滅する。97は丸い体部で復元高台径8.2cm, 外面底部には縁状圧痕が残る。

98は復元高台径7.3cm, 磨滅褐色を呈する。

甗d (99 ~ 101) 体部内面はへろナゲす。99は体部外部タテハク。100は口縁部外面に強いヨコナゲとヨコハケで磨滅が存する。101は全面磨滅する。

黒色土器

甗c (102 ~ 104) 外面回転ナゲだが磨滅も目立つ。内面に僅かにミガキが残る。A面, 102は復元高台径9.6cm, 103は復元高台径8.4cm。

越前県高野層

水注 (105) 底部で, 内面回転ナゲで磨滅。外面はこぶい緑灰色釉を薄く塗す。底部外面は磨滅後口縁と共に黒に種々染まっている。復元口径8.4cm。

石版品

砥石 (106) 丸い河原石を利用したものとみられる。

砥石 (107) 研磨面には磨も残る。

257S0366 出土遺物 (Fig. 92)

瓦器

甗a (108, 109) 108は復元口径13.4cm, 器高3.6cm, 底径9.1cm, 109は復元口径9.1cm, 底部外面はへろ切り後薄ナゲす。

土師器

甗b (110, 111) 110は内外全面磨滅するが, 底部はへろ切り, 色調は淡白褐色を呈する。復元底径7.1cm, 111は全面磨滅する。色調は淡白褐色を呈する。

甗c (112) がらりとした高台で, 復元高台径8.7cm。

甗d (113 ~ 115) 113は内外全面磨滅し, 外面は回転ナゲで口縁部下側に強いヨコナゲ, 色調は明茶褐色を呈する。114は全面磨滅。115は復元口径22.4cm, 器高13.5cm, 復元底径10.4cm, 内外全面磨滅するが外面には僅かにハゲ目が残る。甗土は0.1cm以下の砂粒を多く含む。色調は明茶褐色を呈する。

緑釉陶器

小甗 (116) 内外面とも緑灰色の透明釉を塗す。甗土は地質良好で磨滅。甗三高台径は1.1cm, 高台内面には目輪が残る。

甗c (117) 体部内外面はこぶい緑灰色釉を薄く塗される。底部は削り出し高台で磨滅。甗土は地質良好で磨滅である。

甗d (118) 甗土は淡灰色の土質である。内外全面磨滅するが, 外面にはこぶい緑灰色釉が点々と残る。

25730884 出土遺物 (Fig. 92)

須恵器

杯 a (119) 底部はヘラ型で、内外面回転ナズ調整。色調は灰青色を呈する。

土師器

杯 a (120) 内外面磨減し調整不明。色調は黄褐色を呈する。

罎 (121, 122) 121 は外面タテハケ。内面はヘラカズリ。122 は覆元口径 18.8cm。外面タテハケで

底が付着する。口縁部内面はコホヤク。

緑釉陶器

瓶×皿 (123) 胎土は土師質で内外面に緑灰色釉を薄く施す。口縁部に磨光されている。

瓦器

軒平瓦 (124) 瓦当面は中央部に有輪本葉状文で、それを中心に均整な葉文である。外区には流文を施す。裏面には細かな書子印きを施す。

○第3面

竪立柱遺物

25730295

25730295a 柱礎出土遺物 (Fig. 93)

須恵器

外 (1) 内外面回転ナズ。底成形好で淡白色を呈する。

25730295b 榑方出土遺物 (Fig. 93)

土師器

杯 c (2) 焼成不良で全体が磨滅する。低い流台が付与される。色調は黄褐色を呈する。榑方高台 径 9.4cm。

25730300

25730300a 榑方出土遺物 (Fig. 93)

須恵器

蓋 2 (3) 覆元口径 12.0cm。器高 1.5cm。口縁部を細く長く曲けている。外面上半部は早出で周縁へラ型内面磨減。その他は回転ナズで内面は一部ナズ。色調は黄灰色で一部自然釉で白色を呈する。

25730300b 出土遺物 (Fig. 93)

木製品

椀底 (19) 長さ 27.6cm、幅 14.9cm、厚さ 8.2cm。断面三角形状に加工されている。

25730300c 出土遺物 (Fig. 93)

土師器

杯 a × 皿 (4) 底部の榑片で内外面磨滅する。胎土は 0.1cm 以下の磨光を含み、色調は白褐色や白色を呈する。

25730300d 出土遺物 (Fig. 93)

須恵器

杯 (5) 内外面回転ナズ調整。色調は淡灰色を呈する。

25730300e 出土遺物 (Fig. 93)

木製品

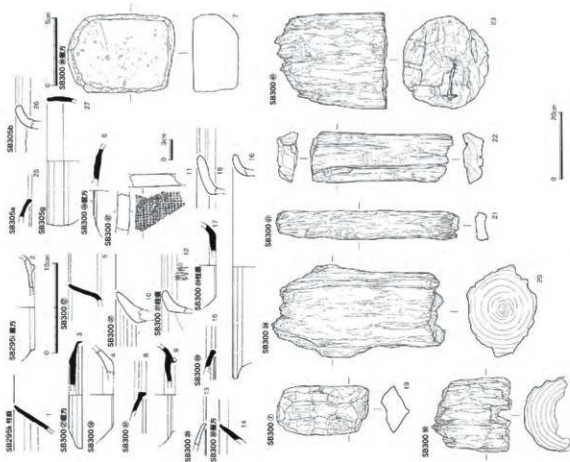


Fig. 93 25730295・300・305 出土遺物家測定 (1/3, 7は1/2, 19～24は1/8)

柱 (20) 長さ 51.6cm、径 20.8～27.7cm。表面は即凸部が立っているため、当初の大ききより磨滅していると考えられる。

25730300 出土遺物 (Fig. 93)

木製品



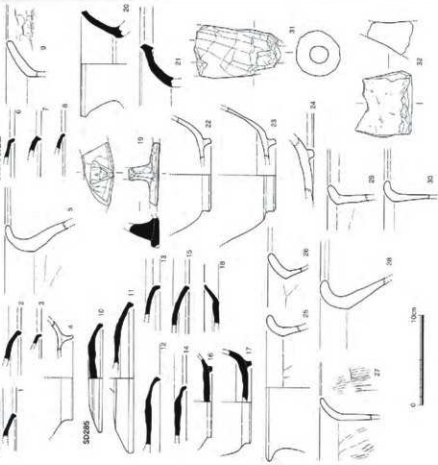


Fig. 94 2585出土遺物実測図 (1/3, 32は1/2)

皿a (18) 外周底面はナズ調整。その皿は胴輪ナズ。底青灰色を呈する。円形段 (19) 胴部部分と輪状の部分である。即ち断面三角形を成す。粘土は割製され、色調は淡青灰色を呈する。

蓋 (20) 直径口径 11.8cm。内外面胴輪ナズ。焼成不良で管線が直立し調整不明。色調は明茶褐色を呈する。

大瓶c (24) 好い体面に方形の高弁を帯付する。焼成不良で調整不明。粘土は僅かに0.1cm以下の砂粒を含む。色調は茶褐色や成灰褐色を呈する。

鉢 (25-30) 全体的に磨滅し、体部内面はヘラケズリが確認できるが、その皿は調整不明。25は直径口径 16.2cm。27は粘土に僅かに角粒を含む。体部内面は外面タテハケ。29の粘土は角質石を含む。土質品

輪郭口 (31) 先端部で考化が目立ち、底部で赤灰色を呈した部分から離れた部分に淡青褐色を呈する。径5.0-5.8cmで、中央が5cm前後空洞である。

石質品  
砥石 (32) 4面使用が認められる。砂岩製。

角芦  
25782345 淡茶色シルト質土出土遺物 (Fig. 96)

須器器  
上脚器

外 (1) 内外面胴輪ナズで、色調は灰色で口縁端のみ暗灰色を呈する。

裳 (2) 体部内面はヘラケズリ。口縁部外面タテハケ。内面ヨコナズ。外周には一部腹が付着する。

黒色土器  
皿 (3) 内面にミガキが施る。A類。

25782345 灰色粘土出土遺物 (Fig. 96)

須器器  
上脚器

外c (4) 底面端に方形の高弁を帯付する。その皿はナズ調整。暗青灰色を呈する。

土質品  
皿 (5) 体部内面はヘラケズリ。外面はタテハケ。口縁部外面ヨコナズ。内面ヨコナズ。外周には僅かに腹が付着する。

土質  
2578X175 出土遺物 (Fig. 96)

上脚器  
須器器

裳 (1) 全体的に磨滅するが、口縁部内面ヨコナズ。外面ヨコナズ。体部外面タテハケ。内面はヘラケズリ。外周には二次焼成で暗褐色を呈する。皿上は0.5cm以下の砂粒を多く含む。

和手舞 (2) 直径口径 16.0cm。器高 14.9cm。口縁端で小さな紐下が付くが管線が直立つ。外面タテハケで下には紐が深く付着し、最下面には表面が剥落する。内面はヘラケズリで底部付着は指節状の塊り。成化部が著しく付着する。口縁部外面は僅かに腹が付着する。

須器器  
2578X175 灰褐色土出土遺物 (Fig. 96-97)

須器器  
裳 (3) (3-5) 口縁部面を僅かにツヤミ出す程度。内外面は胴輪ナズ後。内面上半部は不定方向のナズ調整。色調は青灰色で口縁部は重なりで暗灰色を呈する。3は直径口径 16.6cm。器高 2.58cm。4は直径口径 14.5cm。外面上半部は胴輪ナズ切り後相いナズ調整。5は直径口径 13.2cm。

蓋 (3) (6) 口縁部面を僅かに調整させる程度で、外面上半部は胴輪ナズ切り後相いナズ調整。口縁部は重なりで暗灰色を呈する。直径口径 14.0cm。

皿a (7-9) 8は及みのある底面で、直径口径 15.0cm。器高 2.2cm。復元口径 12.0cm。外面底面はヘラケズリナズ調整で、腹状高弁が残る。9は直径口径 16.2cm。器高 2.4cm。復元口径 14.0cm。内外面胴輪ナズで、内面が付着からなっている。

環a (10-14) 底面は胴輪ナズ切り。体部は胴輪ナズ。色調は暗灰色を呈する。11は底部外面に磨滅が施る。13・14は内面底面がナズ調整。

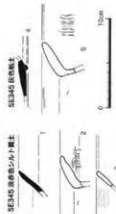


Fig. 95 25782345出土遺物実測図 (1/3)



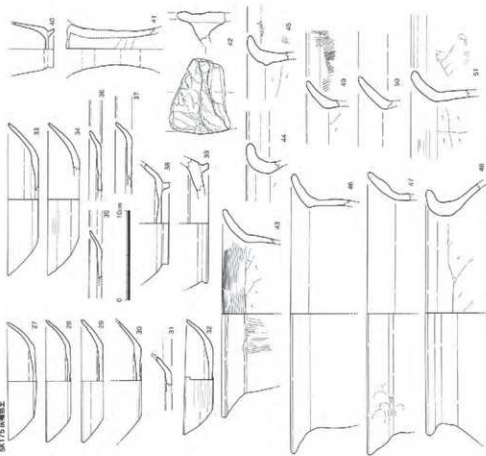


Fig. 97 25SK175出土遺物実測図② (1/3)

小壺 (24) 底径 6.2cm。外面は同軸ヘラクエズリ、底面はその後ナグ調整。内面はナグ。軸土は 0.5cm 以下の白色砂粒を含み、色調は暗灰色を呈する。

鉢 (25, 26) 25 は内外面同軸ナグ。内面下半は斜め方向のナグ。暗灰色を呈する。26 は底元径 31.4cm、器高 15.7cm。底元底径 13.4cm。軸土は 0.3cm 以下の砂粒を含み、底成良好で暗茶色や赤褐色を呈する。外面には黒が付く。基部は同軸ヘラクエズリ印が重なり、外面下半は同軸ヘラクエズリ、上半は横線状の暗黒。内面は同心円状の当て具残の残り。下半はその後不定方向のナグ調整。

杯 (27~31) 色調は黒茶色や暗茶褐色を呈する。内外面同軸ナグ。復元口径 13.7~13.7cm。器高 2.48~3.25cm。27 は全面調整する。底部外面に縦状圧痕のようなるものがみられる。29 は内面外面にヒビが入る。30 は全面調整するが、底部外面は明確に同軸ヘラクエズリ印と縦状圧痕が残る。

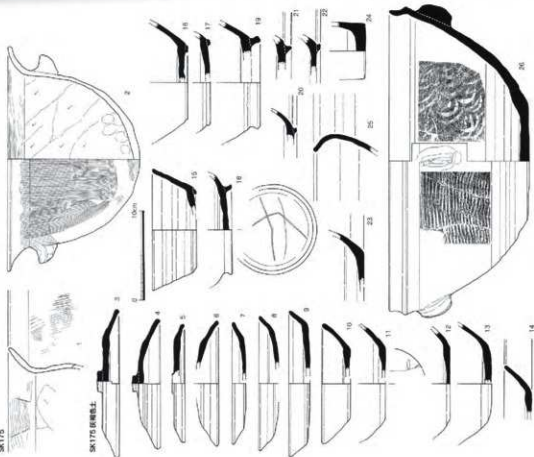


Fig. 96 25SK175出土遺物実測図① (1/3)

杯 c (15~22) 底部に高台を附付する。色調は灰色や暗灰色を呈する。15 は斜明な高台を附付する。復元口径 18.6cm、器高 5.0cm。底元高台径 8.6cm。16~17 は低い高台を附付する。16 は底元高台径 8.2cm。17 は底元高台径 9.6cm で、斜状圧痕があり、内面底部は丁寧にナグ調整される。18 は底元高台径 10.0cm で、基部外面にヘラクエズリを施す。19 は底元高台径 10.3cm。

壺 (23) 内外面同軸ナグ。外面底部は同軸ナグで縦状圧痕が残るが、若干滑らかになっている。色調は黒灰色を呈する。

杯口 (32~34) 32は外周にミガキを有する。復元口径 12.9cm、器高 6.8cm、淡茶色を呈する。33は全面磨光する。復元口径 17.0cm、器高 3.45cm、淡黄褐色を呈する。34は全面磨光するが外周上面にミガキ痕が僅かに残る。復元口径 17.0cm、器高 3.55cm、復元器径 8.4cm、淡褐色を呈する。

皿 (35~37) 35は器高 1.45cmで、淡茶褐色を呈する。36は磨光するが底部に粘土組織のようなものがみられる。器高 1.4cm。

杯 (38) 復元器径 9.2cm、胎土は 0.3cm以下の砂粒を含み、にがい褐色を呈する。

鉢×大鉢 (39) 復元器径 13.6cm、磨光するが全面同輪ナズ。胎土は 0.2cm以下の砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。

小皿 (40) 高台径 4.3cm、色調は淡褐色を呈する。全面磨光する。

高杯 (41) 磨光し磨整不明。中央には 3cm 前後の突起がある。色調は淡白褐色を呈する。

カマド (42) 脚部分で内外面ナズ磨整。胎土は 0.2cm以下の砂粒を含み淡茶褐色を呈する。

鉢 (43~51) 体部外面はヘラケズリ。色調は淡褐色や茶灰色を呈する。43は復元口径 23.2cm、口縁部内面はヨコナヅ、外面はヨコナヅ、体部外面はタテナヅ。45は壺がけにタテナヅがわかる。46は復元口径 31.2cm、全面磨光し磨整不明。47は復元口径 31.6cm、胎土は 0.3cm以下の砂粒を多く含む。48は口縁部を肥厚させ丸曲げる。復元口径 27.5cm、胎土は 0.3cm以下の砂粒を多く含む。49はタテナヅ。51は口縁部内面ヨコナヅ。外面は壺がけにハケ目があり、炭化物が付着する。

#### 2575K175 藤原朝臣土遺物 (Fig. 98)

須臾器

蓋 (52) 口径 14.8cm、器高 2.7cm、ボタン状のツマミを呈付する。外面上半部は同輪ヘラケズリ後側ナズ磨整、その他は同輪ナズで内面の一部にナズ磨整が見られる。外面は壺お焼きのため、口縁部が灰色に着色する。

蓋 (53) 外面上半部は同輪ヘラケズリ、その他は同輪ナズ。肩部は壺お焼きで着色している。

小皿 (54) 復元口径 9.8cm、器高 2.1cm、復元器径 5.8cm、内外面同輪ナズ。

皿 (55) 復元口径 15.2cm、器高 2.1cm、復元器径 11.6cm、内外面同輪ナズ。外面底部は同輪ヘラケズリで飯状に丸曲る。内面底部には赤褐色の付着物があり、磨き付着している。

杯 (56, 57) 56は復元口径 13.9cm、器高 2.7cm、復元器径 9.6cm、外面底部に「唐」と書かれた墨跡がある。57は器高 3.9cm、外面底部に壺お焼きがみられる。

杯 (58~60) 58は底部に高台を呈付する。復元高台径 6.8cm、色調は淡黄褐色を呈する。59は復元高台径 5.6cm、外面底部には墨が付着し、転用履として用いられたものと推測される。60は復元高台径 9.3cm、内外面同輪ナズ。

鉢 (61) 口縁部を壺がけに肉内する。復元口径 16.2cm、淡黄褐色を呈する。外面下半部はナズ、その他は同輪ナズ磨整。

鉢 (62) 二瓶口縁で、復元口径 13.0cm、肩部は同輪ナズ、体部は外面磨光の向きで、内面は同輪ナズの当て具状がわかる。胎土は 0.2cm以下の砂粒を含み、色調は黄褐色を呈する。

平鉢 (63) 口縁部や把手の一部欠損する。内外面とも体部外面は同輪ヘラケズリ、内面は同輪ナズ。口縁部は同輪ナズ。胎土は 0.7cm以下の砂粒を多く含む。一部底部時に膨張している部分がある。色調は淡灰白色を呈する。高台径 14.7cm。

蓋 (64) 外面上半部は同輪ヘラケズリ、その他は内外面ともミガキを呈する。

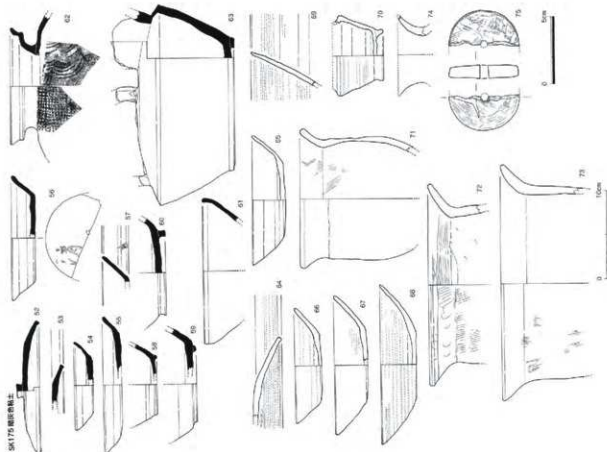


Fig. 98 2575K175出土遺物(須臾器) (1, 2, 75, 76は1/2)

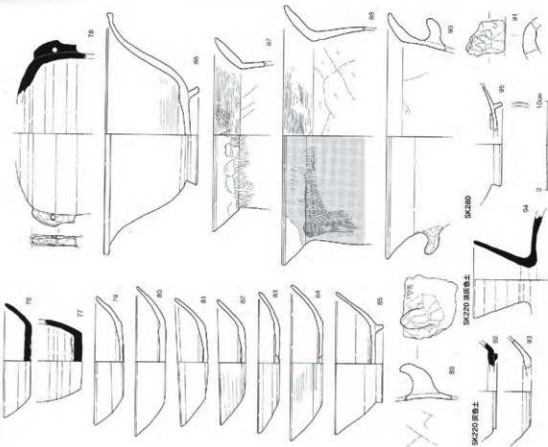


Fig. 99 25SK175 (a)・220・230 出土遺物実測図 (1/3)

杯 a (65) 復元口径 14.4cm、器高 8.8cm、底径 8.4cm、外面底部は凹陥→ラ切り素ナズ、その縁は凹陥ナズで、内面底部はその底不定方向のナズ。色調は暗灰色を呈する。  
 杯 d (66 a-b) 復元口径 13.0～18.0cm、器高 3.0～4.0cm、底径 7.4～7.9cm、外面は凹陥が目立つ内面にはミガキ a が明顯に残る。色調は淡褐色や暗褐色を呈する。  
 甗 (69) 外面下半は凹陥→ラケズリ、その他の内外面はミガキ a を呈す。色調は暗白色を呈する。  
 小壺 c (70) 口縁端部を欠損する。内面は凹陥ナズ、内面底部は粗い→ラ切り素ナズ、外面はミガキ a を呈す。

高台径 5.7cm、色調は暗灰黄白色を呈する。

甗 (71～73) 71 は復元口径 15.6cm、内外面凹陥するが、内面に僅かに斜めハケがある。胎土は 0.5cm の砂粒を多く含む暗褐色を呈する。72 は復元口径 22.8cm、外面タテハケ、内面→ラケズリ、口縁部内面はヨコハケである。胎土は 0.2cm 以下の砂粒を含み、暗褐色を呈する。73 は復元口径 26.6cm、凹陥するが外面に僅かにタテハケがある。

## 鉢形甗器

甗 (74) 頸部の腹弁で、胎土は乳白色の土質で、内外面に淡灰のある暗色輪と粗い→ラ切り暗褐色が散在に残されている。内面は外面より磨光が目立つ。

## 石製品

鉢形甗 (75) 平方欠損する。大きさ 5.25cm、厚さ 0.95cm、中央に 0.65cm の円孔を穿つ。表面側面ともきれいに研磨され、胡粉痕が残る。

## 25SK175 動物出土遺物 (Fig. 99)

## 須臾型

須臾 a (76) 復元口径 12.8cm、器高 3.05cm、復元高台径 7.6cm、外面底部は粗い→ラ切り、内外面は凹陥ナズ、内面底部は一方角のナズ。色調は灰色を呈する。

小壺 (77) 内面は凹陥ナズ、外面・底部は凹陥→ラケズリ。復元底部径は 6.2cm、色調は暗灰色を呈す。

双耳甗 (78) 胴部に自然輪が深く付いている。耳には 0.6～0.8cm の円孔を穿つ。内外面凹陥ナズで、胎土は灰色を呈する。

## 土師器

杯 a (79～81) 復元口径 14.3～16.7cm、器高 3.2～3.4cm、底径 8.1～9.0cm、色調は淡褐色を呈する。79 は外面下半が凹陥→ラケズリその他は凹陥ナズ。81 は全体的に磨減する。

杯 d (82～84) 復元口径 13.9～17.4cm、器高 2.4～3.6cm、高台径 7.5～9.2cm、色調は淡褐色を呈する。底部は凹陥→ラケズリ、内面凹陥ナズ、外面ミガキ a を呈す。83 は全体的に磨減するが外面も凹陥ナズのように見える。

杯 c (85) 復元口径 16.0cm、器高 5.3cm、高台径 8.8cm、内外面は凹陥ナズ。色調は暗褐色を呈す。杯 e (86) 復元口径 22.0cm、器高 10.4cm、高台径 10.9cm、全面磨光が目立つが、内面底部付近にミガキ a が確認できる。外面底部は凹陥→ラ切り素い→ラ切りナズ。淡灰褐色を呈す。

甗 (87, 88) 内面はヨコハケ、外面はタテハケ、内面は→ラケズリ。色調は淡灰色を呈す。87 は口縁端部が若干肥厚し、復元口径 23.6cm、88 は外面全体に粗が付着する。

把手付甗 (89, 90) 89 は把手部分で、内面は→ラケズリ。淡灰色や暗褐色を呈する。90 は復元口径 28.0cm、口縁部内外面はヨコナズ、外面内面は→ラケズリ。胎土は粗く、表面に砂粒が厚くほど磨減している。

## 土師器

鉢形口 (91) 胎土は暗褐色で、表面は黄鉄で明灰色に変色している。

## 25SK220 灰色土出土遺物 (Fig. 99)

## 須臾型

杯 c (92) 復元高台径 8.4cm、色調は暗灰色を呈する。

## 土師器

杯 a (93) 復元口径 7.7cm、底部外面は凹陥→ラ切り、色調は濃い褐色を呈する。

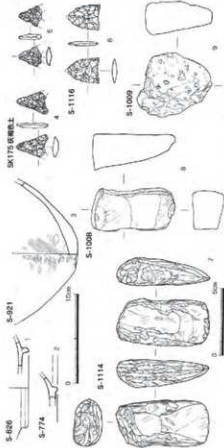


Fig. 100 新 257 次調査 3 箇その他の遺構出土遺物 (1 ~ 3 は 1/3, 1/2)

257SK220 淡灰色土出土遺物 (Fig. 99)  
須磨器  
平瓶 (94) 底元口径 8.7cm, 口縁部内面には茶褐色の漆が付着している。外面の一部にも若干漆が付着する。  
257SK280 出土遺物 (Fig. 99)  
灰槌内器  
槌×皿 (95) 淡緑色を帯びた淡白灰色を呈する。内面は釉を著しな曇り色を呈している。外面は回転ナズで磨製。高台内面は回転ナズで磨製。底元高台径 9.3cm, 高台径付には回転が残る。  
新 257 次調査その他の遺構出土遺物 (Fig. 100)  
灰槌内器  
槌×皿 (1) 底元高台径 9.0cm, 高台内面は磨製。内面底部も回転ナズで一部磨製。外面も部分的に磨製される。側面は淡灰褐色を呈する。高台より出土。  
槌×皿 (2) 胎土は須磨質で、内外面に淡灰色釉を多く塗す。高台内面は磨製。S-774 より出土。  
古式土師器  
志甕 (3) 小さい底面が内外面へ向目。外面下部は緑ナズ。胎土は 0.1cm 以下の砂粒を多く含む淡白色を呈する。S-921 より出土。  
石製品  
石鏡 (4 ~ 6) 4 は現存長 2.4cm, 厚 0.6cm, 直径 0.6cm。5 は現存長 1.7cm, 4・5 は SK175 灰褐色土より出土。6 は先頭部を欠落する。現存長 2.2cm, 幅 1.5cm, 厚さ 0.3cm, S-1116 より出土。  
磨製石斧 (7) 縦 7.0cm, 幅 3.3cm, 厚さ 2.1cm, 刃部を作り出したため丁寧に磨製する。断面は折れられているのだが、研削した痕跡がある。安山岩製。S-1114 より出土。  
砥石 (8) 大きさは、長さ 6.3cm, 幅 3.1 × 2.1cm, 4 面研削痕があり、側面に一部磨打痕がみられる。S-1008 より出土。  
磨り石 (9) 大きさは 5.6 × 4.7 × 2.4cm, 一部に磨り面がある。S-1009 より出土。

○第 3 調査遺物  
257SK30 出土遺物 (Fig. 101)  
須磨器

蓋 (1) 底元口径 12.8cm, 高 1.4cm, 外面上部は回転へう切り後木製。その他は回転ナズで、内面上部はその残り部分。色調は有灰色で口縁部は濃褐色を帯びた淡灰色を呈する。  
蓋 (2) 底面を僅かに肥ませる。有灰色を呈する。有灰色を呈する。

257SK32 出土遺物 (Fig. 101)  
須磨器

蓋 (3) 外面上部は回転へう切り、内面上部は不定方向のナズ。その他は回転ナズ。色調は有灰色を呈する。  
土師器  
鉢×高杯 (4) 鉢の口縁部もしくは高杯の脚部端もしくはは、色調は茶褐色を呈する。

257SK33 出土遺物 (Fig. 101)  
石製品

スクレイパー (6) 大きく割製させる。剥片や石核の可能性もある。大きさは 6.25 × 8.75cm, 厚さ 1.2cm, 安山岩製。

257SK34 出土遺物 (Fig. 101)  
須磨器

高杯 (5) 底元口径 29.4cm, 全体的に磨製するが、内外面とも放射状のミガキが残る。  
磨製淡灰色土出土遺物 (Fig. 101)  
石製品  
石鏡 (7) 縦 10.9cm, 幅 4.0cm, 厚さ 1.5cm, 断面三角筒状に打ち欠く。先端は自然面も残るため、未製品かもしれない。安山岩製。

灰褐色土出土遺物 (Fig. 102 ~ 106)  
須磨器

志甕 (1) 底元口径 10.8cm, 外面上部はへうナズでその他は回転ナズ磨製する。底成良好へうや暗い灰色を呈する。  
槌 (2) 円錐状高台で、胎土は精製され、淡灰色を呈す。内外面は回転ナズ磨製。腰部系。  
鉢 (3) 外面は回転ナズで、その他内外面は回転ナズで、内面は磨製により滑らかになっている。胎土は 0.1cm 以下の砂粒や炭化物を多く含む。磨製。  
大甕 (4) 口縁部で内外面は回転ナズ、側面に放射状文を施す。色調は淡灰褐色を呈する。  
槌 (5) 内外面は回転ナズで、側面内面は粗いナズ。体部内面は同心円状で磨製する。胎土は砂粒を少量含む。うっすらと淡灰色の自然面を呈する。

257SK35 出土遺物 (Fig. 102 ~ 106)  
須磨器

蓋 (6) 磨製が目立つ。胎土は 0.2cm 以下の砂粒を多く含む。淡い白色を呈する。  
土師器  
鉢 (7) 口手部分で 3 本の指孔が穿たれている。色調は暗褐色で底下部は厚層が付着。  
鉢 (8) 胎土は 0.2cm 以下の砂粒を多く含む。底面不良で淡白褐色を呈する。高台径は 2.6cm くらいと推定される。全体的に磨製し磨製不調。  
ミニチュア土器 (9) 底元口径 4.0cm, 高 1.8cm, 半円状成形され指環状に磨製する。胎土はきめが

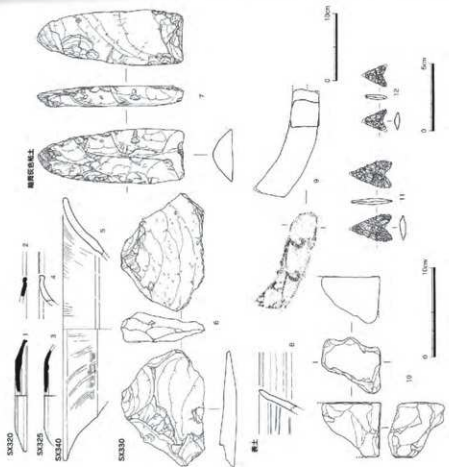


Fig. 101 第 257 次調査 3 重蓋遺構、表土出土遺物実測図 (1/3、石製物は 1/2、9 は 1/4)

柄く淡白黄灰色を呈する。  
 製土器  
 鏃 (10) 射上は 0.6cm 以下の部位を多く含む。橙紅色を呈する。表面はかなり荒れていて、砂粒が浮き出ている。基部内面は頸部圧痕があり、外面は向き直跡を残す。  
 緑釉土器  
 坪 (11) 表元は径 3.2cm、器高 2.9cm、底部 3.2cm。射土は淡黄灰色で土師質である。全面薄黒し釉の剥落が目立つ。内外面に面に淡い緑色釉が残る。  
 皿 (12) 内外面には緑白色釉に斑点状に薄緑色釉を塗す。外面には僅かに輪が剥落する。  
 輪 (13) 高台径 3.3cm、内外面薄緑色釉を塗す。射土は地成良好で淡黄色を呈す。  
 瓶 (14、15) 14 は雨り出し高台で、復元高台径 7.7cm。射土は白黄色の土師質である。輪は赤褐色だが、内外面とも殆ど剥落している。15 は地成良好で土師質。全面に淡黄緑色へやや軽い緑色釉を塗す。

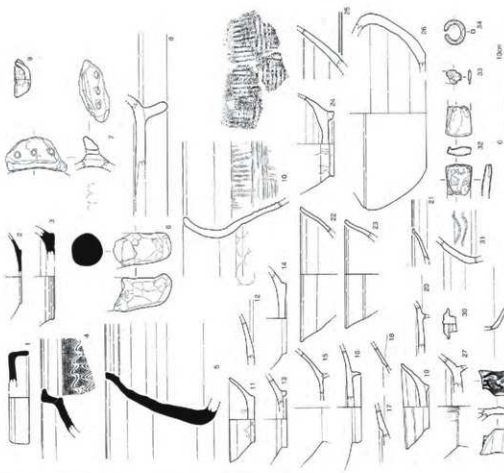


Fig. 102 第 257 次調査 4 重蓋遺構、表土出土遺物実測図 (1/3)

灰銅器  
 刀 (16) 復元高台径 7.5cm。高台部分には使用により滑らかに削られている。外面底部は凹陥へラケズリ、その他は凹陥ナゲで、内面上半部のみ灰土と薄い緑灰色を塗す。  
 段重 (17、18) 17 は射土が淡灰色で外面は下半が凹陥へラケズリ。それ以外は凹陥ナゲで、内面のみやや軽いのある灰茶色釉を塗す。18 の射土は淡灰色で、輪は緑灰色の透明釉で、内面は薄く、輪軸さね、外面上半はへラケズリで磨削である。  
 小斧 (19) 口径 9.5cm、器高 2.9cm、底部径 4.8cm。底部は凹陥糸切り。その部内外面は凹陥ナゲで、

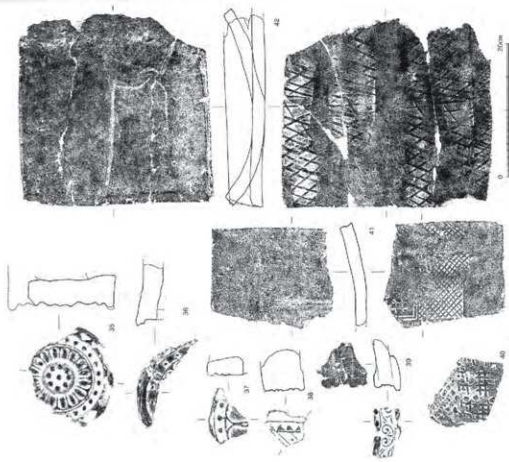


Fig. 103 第25次調査区鏡類出土遺物複製図②(1/4)

内面と外面上半部が淡灰色の透明釉を施す。射土は0.1cm以下の砂状や黒色灰を含み緑灰色を呈する。  
 鏡×重 (20) 射土は精製された珪砂質で、内面には褐色黒の透明釉が施されるが射土が目立つ。また内面には目跡が残る。外面裏面は銅板ヘラケスリ。その間は回転ナズ。内外面回転ナズ後に若干緑色染  
 黒 (21) 口縁部を僅かに外反させる。射土は淡茶灰色を呈する。内外面回転ナズ後に若干緑色染  
 のある白灰色で彫かれた彫入があり、外面を中心に彫部が深い。  
 鏡 (22, 23) 22は鏡元口径15.0cm。射土はきり崩れかけた淡灰色を呈す。内外面回転ナズ。23は鏡元  
 口径12.0cm。射土は0.1cm以下の白色砂状や黒色灰を含む。内外面回転ナズ後、内面のみやや褐色が  
 かった透明釉を施す。

面 (24~26) 24は鏡元口径17.5cm。外面は回転ヘラケスリ。内面は回転ナズで、外面には淡緑灰  
 色釉が施されている。内面にも一部彫部が残る。25は外面に回転ナズの彫部で、下方に溝が走る。内  
 面は良い状態で淡灰色釉と淡緑灰色釉がまばらに施されている。26は鏡元口径13.2cm。彫部後  
 21.9cm。その最大径付近に灰黒部分を有す。外面下半はケズリ気味の回転ナズ。内面に回転ナズ。外面底  
 部は彫部により磨滅する。射土は0.1cm以下の砂状を含み、淡緑灰色の透明釉を施す。

透明釉染黒者磁  
 水注 (27) 体部下面に彫部が施されている。釉は灰白色で、内面は回転ナズの後に一部黒釉  
 され、外面も施されるが彫部も目立つ。1部高。

長尖常葉青磁  
 水注 (28, 29) 28は其の付け部部分で、暗緑色釉を施す。29は水注の肩部分で、外面は淡灰褐色釉を  
 施し、内面は回転ナズで磨滅。

白磁  
 ツマミ (30) つまみの彫部部分の上にはやや緑褐色釉を厚く施す。その他は回転ナズで磨滅である。  
 朝鮮系黒釉銅器

葉 (31) 葉部付近とみられ、内外面回転ナズで、外面には淡灰褐色を施す。射土は紫褐色系、外面  
 灰色を呈する。

瓦類  
 軒土瓦 (35~37) 35は中国の蓮子が1/8で、16弁の蓮華葉母文と菊瓣文を施す。36の外反は小さ  
 な灰文があり、裏面はない。37は小片だが、蓮華と外反の灰文が残る。

軒土瓦 (38, 39) 38は軒土瓦の彫部で格式と彫部が確認できる。39は軒土瓦の中央部分で、彫部  
 格式の均正彫部である。

瓦瓦 (40) 彫部の格子印きは「甲井」の文字瓦。  
 平瓦 (41, 42) 41は小さな格子印には二重線で重んだ「甲井」を入れた文字瓦。色調は淡灰色を呈す  
 る。42は若干大きめの格子印きで、部分的にナズ消している。表面は布目で一部ナズ消している。  
 内外面間には分割彫部が確認できる。横30.0cm。

金属品  
 滑金鈔瓦 (32) 横2.5cmで寸の厚みは0.1cm程で内面は空割で、一部削れている。基部の方には  
 留め具がミッテ所埋まっている。表面は緑灰色釉に覆われ、彫部部分が磨滅し基部部分は金色部分を多く残る。

鉄線 (33) 先端部は欠損する。  
 耳環 (34) 縦2.4cm、横2.8cm、径0.5cm。胴で緑灰色を呈する。やや磨がっている。

土製品  
 埴 (35~43) 43の表面はヨコナズで、その反対面はナズ削り部が残り、粘土がはびこりくくり外れた  
 ような状態に見える。射土は0.4cm以下の砂状を多く含む。還元不灰で土質である。41は磁化後  
 好で須賀質である。射土は0.4cm以下の砂状を多く含む。生きている砂状はナズ磨滅されている。厚さ  
 6.3cm。45は地味不良の土質で、彫部欠損で残りが悪い。色調は淡褐色を呈する。46の生きている  
 面にはナズの工具痕が残る。色調は淡茶灰色を呈する。47は厚さ5.7cm。射土は0.2cm以下の砂状を  
 多く含む。色調は褐色を呈する。48は欠損し、面は1面しか残っていない。射土は0.3cm以下の砂  
 粒を含み茶灰色や明褐色を呈する。49は目跡に平らな面があり、断面部分に竹のような骨髄質が残る。  
 骨髄質の間は6.8cmである。

土器 (50~52) 50は背黒み磁器が残る。射土は0.3cm以下の砂状を多く含む。僅かに土層部破片

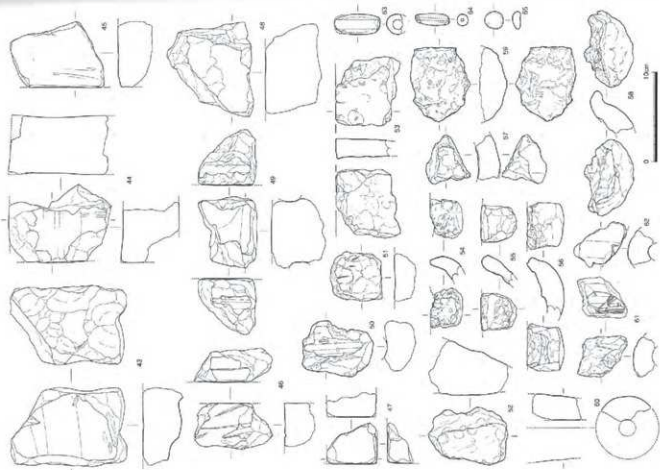


Fig. 104 第 257 次調査区褐色土出土遺物集画③ (1/3)

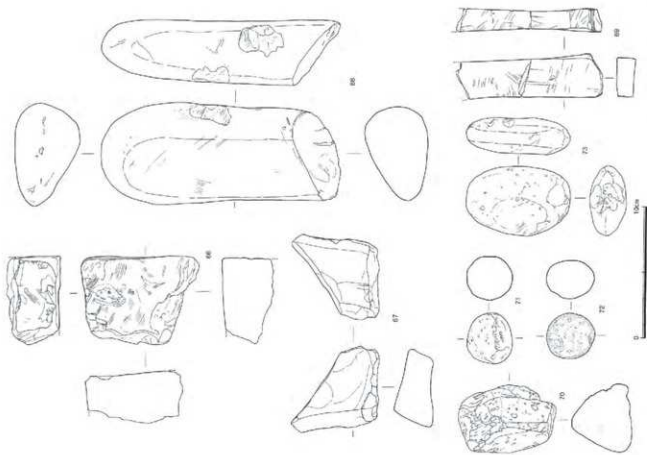


Fig. 105 第 257 次調査区褐色土出土遺物集画④ (1/2)

も念んでいる。81は半円状の表面にとどが入っている。射土は0.3cm以下の白色砂粒を多く含む。82は片面にナマ割された面が残る。その面と平行ではない反対側にも面が存在する。埋溝(83)上面部を平坦にナマ割する。外面は折面が確認できる。内面は被膜で融解し灰白もみられる。射土は0.3cm以下の砂粒を多く含む。粗面も確認できる。

トリペ(84~88)内面に茶褐色の底質などの融解付着物が付いている。内面はいくは灰色に藍色に変色している。86は器高4.1cm、88は融解した底面が外面にせり出している。

配厚(89)底が欠くようになって、いわゆる船型。入りきは8.4×0.7cm、深さ3.1cm。輪郭口(90~92)60は内外面ナマ割面、外面は粗面で黒色化もしくは剥落する。61の射土は0.6cm以下の砂粒を多く含む。内面は淡褐色で、外面は被膜によって灰色を呈す。82は折口の破片だが、欠損部分の断面が検出している。

土埴(93、94)83は器高5.0cm、径3.3cm。色調は茶褐色を呈する。84は径3.8cm、径1.35×1.3cm。色調は淡褐色を呈する。

大玉(95)大きさは2.0×2.05cm、厚さ0.9cm。色調は淡褐色白色を呈する。

#### 石製物

砥石(96~99)96は3面が研磨され、その1面にはキリ状のもので、深さ0.1~0.2cm程の小きな穴が彫られている。97は径6.6cm、幅6.4cm、厚さ2.9cm。4面が使用される。98は径18.9cm、幅7.6×4.8cm。2面が使用されている。99は4面が使用され、きれいな断面方彫をなしている。現存長10.9cm、幅3.3×1.1cm。

砥石(99)大きさは7.3×5.1×4.4cm。

大石(97、92)細かく削打して作り上げ砥石を作る。97は3.3~4.8cm、92は大きさ2.6~3.6cm。砥石(93)長さ7.8cm、幅2.7~5.25cm。両面に磨打による細かい彫刻がある。

石舟(94)器身長7.8cm、幅3.4cm、厚さ0.8cm。緑色片貫製。

用漆不明品(95)スクレイパーもしくは磨石製品と考えられる。4面加工し端面を平らせ、対する端面は細かく加工し刀端のようなものを作り出している。安山岩製。大きさは径6.3cm、幅2.95×1.9cm。

石棒(96)扁平な滑石は幅1cm、深さ0.3cm程の溝を彫り込んで、欠損が目立つが形状から石棒ではどうかと推測される。

石面磨石(97)半分ほど欠損する。色調は褐色を呈する。幅3.3cm、厚さ0.75cm。

石磨(98~99)98は内外面にケズリ痕が確認される。滑石製。99は底面付近で、外面はケズリ出し、使用のためなどで割滅し一部うすらと裏が付着する。内面はケズリ出しの工具痕が明確に残り、底面近くでは横方向の細かいケズリのみがみられる。滑石製。80は滑石製石磨の底面付近で、内外面ケズリたが外面は剥離する。

滑石加工品(81~84)81は欠損が目立つが、溝が深さされている。欠損部分も多い。82は長方形で、径5.2cm、幅2.1cm、厚さ1.0cm。2ヶ所目耳を穿つ。83は欠損し全形は不明だが、径0.8cmの円孔が穿たれている。84は3.8×3.95×2.35cmで全面ケズリを施す。

#### 土出土遺物 (Fig. 10)

##### 灰燼類

灰(8)内外面凹削ナマ割で、内面には灰燼がある。内外面とも緑褐色白粒を多く含むが、外面は剥落が目立つ。射土は砂粒を少量含む。淡灰色を呈する。

##### 瓦類

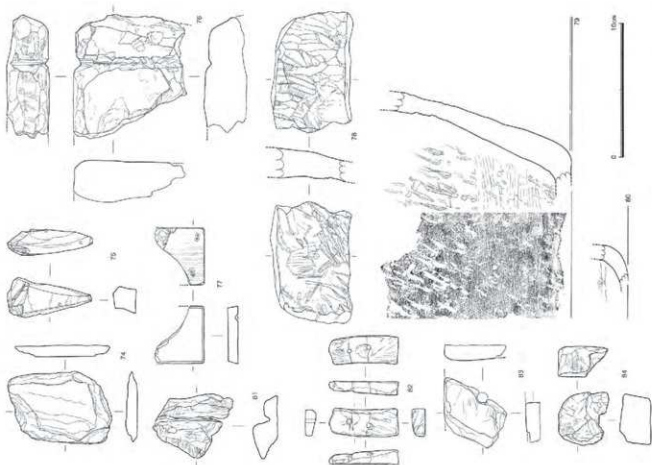


Fig. 106 新 257 次調査が得た土出土物(断面図) (1/2)



解平瓦 (9) 築成不良で全体が崩壊する。瓦当はやや大きな唐草文が彫る。凸面は調目付き。色澤は淡灰白色を呈する。

土蔵基

溝 (10) 厚さ 5.9cm。敷土は 0.3cm 以下の砂粒を含む。土質質で黄褐色や暗茶灰色を呈する。全面腐蝕する。

石瓦石

石蔵 (11, 12) 11 は先頭部が僅かに欠損する。現存長さ 3.0m、幅 2.1cm、厚さ 0.4cm。頭端石製。12 は先頭部と基部が僅かに欠損する。現存長さ 1.55cm、幅 1.55cm、厚さ 0.35cm。黒曜石製。

#### (5) 小結

基本的に竪溝の第 206-1 穴調査と同じような発見を得ることができた。特に予へき事は大型亂立建物である SK300 の発出である。SK300 は南北 11 間 (23.6m) × 東西 5 間 (6.8m) で、跡地する第 206 穴調査でも南北 16 間 (29.6m) × 東西 3 間以上 (6m 以上) の建物が確認され、南北に 2 棟の亂立建物が並んでいる状況を確認した。SK300 と関連するようには発掘時代後半の亂立建物 (SK295、306) があるため、SK300 はる前期後半には消滅していた可能性が高い。

SK295 や SK308 の建物崩壊後の 9 ~ 10 世紀代には格子状の溝が掘られていた。これらの溝は部で畝を作る際に掘削した溝の痕跡と推測される。10 世紀代の建物は確認できていないが、併設遺構の竪溝を中心に発出されている。

11 世紀後半前後には亂立建物や区画溝など他の条田域と同様に土地利用が活発である。これらの条田や区画溝が明後した後は、建物遺構こそ奈良時代のものには及ばないものの、多くの建物が発見された。ちょうど大宰府執行機関であり、かつての条田の区画に左右されない土地利用がなされたことを示している。

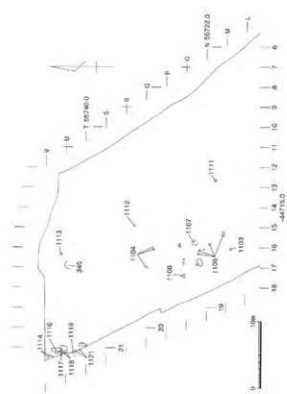


Fig. 107 4 期首略測図 (1/400)

表 9 掘り穴調査 遺構 要目

番号	遺構名	位置	形状	規模	層位	備考
1	土蔵基	東 10.0m 南 1.0m	2.1m x 2.1m	0.4m	1	先頭部欠損
2	溝	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
3	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	3.0m x 2.1cm	0.4cm	1	先頭部欠損
4	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
5	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
6	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
7	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
8	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
9	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
10	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
11	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
12	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
13	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
14	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
15	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
16	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
17	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
18	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
19	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
20	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
21	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
22	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
23	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
24	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
25	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
26	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
27	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
28	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
29	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
30	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
31	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
32	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
33	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
34	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
35	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
36	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
37	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
38	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
39	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
40	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
41	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
42	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
43	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
44	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
45	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
46	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
47	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
48	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
49	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
50	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
51	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
52	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
53	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
54	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
55	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
56	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
57	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
58	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
59	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
60	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
61	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
62	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
63	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
64	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
65	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
66	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
67	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
68	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
69	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
70	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
71	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
72	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
73	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
74	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
75	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
76	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
77	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
78	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
79	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
80	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
81	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
82	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
83	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
84	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
85	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
86	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
87	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
88	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
89	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
90	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
91	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
92	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
93	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
94	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
95	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
96	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
97	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
98	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
99	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損
100	石蔵	東 10.0m 南 1.0m	1.55m x 1.55m	0.35cm	1	先頭部欠損

















































JAPAN		KOREA		INDONESIA		MALAYSIA		PHILIPPINES		THAILAND		INDIA		SRI LANKA		BURMA		CEYLON		
1950	1951	1950	1951	1950	1951	1950	1951	1950	1951	1950	1951	1950	1951	1950	1951	1950	1951	1950	1951	
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...

JAPAN		KOREA		INDONESIA		MALAYSIA		PHILIPPINES		THAILAND		INDIA		SRI LANKA		BURMA		CEYLON		
1950	1951	1950	1951	1950	1951	1950	1951	1950	1951	1950	1951	1950	1951	1950	1951	1950	1951	1950	1951	
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...

JAPAN		KOREA		INDONESIA		MALAYSIA		PHILIPPINES		THAILAND		INDIA		SRI LANKA		BURMA		CEYLON		
1950	1951	1950	1951	1950	1951	1950	1951	1950	1951	1950	1951	1950	1951	1950	1951	1950	1951	1950	1951	
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...

JAPAN		KOREA		INDONESIA		MALAYSIA		PHILIPPINES		THAILAND		INDIA		SRI LANKA		BURMA		CEYLON		
1950	1951	1950	1951	1950	1951	1950	1951	1950	1951	1950	1951	1950	1951	1950	1951	1950	1951	1950	1951	
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...











合して散在する。道管は単管孔を有し、壁層は交互状に配列する。放射組織は放射形、1-3細胞層、1-10細胞高でやや微細粒状に配列する。柔組織は同型状〜異状。柔組織には油細胞は認められる。

#### 4. 考察

S-300の年代は、柔組織の高所から8世紀と考えられているが、柱高 (No. 50) の修正年代は1,660 ± 80Pで、享年年代はcalAD2095-432となる。また、礎板 (No. 7) は、修正年代が1,400 ± 300P、享年年代がcalAD550-660であり、礎板の方が100年代を示し、いずれも調査箇所より古い年代を示す。これらの樹輪は、礎板が分竹、柱高がマキキ属を示し、礎板と柱高で樹輪が異なる結果が得られた。カヤとマキキ属は、いずれも針葉樹で成長速度が速いため、柱材等に利用するためには相当の断断の木材を利用したと考えられる。そのため、樹齢によって年代幅が相定数よりも広い値を示している可能性がある。カヤとマキキ属は、針葉樹材としては比較的樹高・断面で強度や弾性率が低い材質を示しており、柱や礎板として用いるとは異なる。いずれも暖温帯常緑広葉樹林中に生ずる樹材であり、大分県赤松崎でこれまで広く採られた花輪分析などの古生葉葉高結果 (バリー・サー・グーエイ株式会社, 2004, 2005等) を考慮すれば、周辺に生育していた可能性は高い。

S-300の年代は、第256次調査でも柱高の層相測定を要しているが、クスノキ科やイヌノキ等の広葉樹材材が利用されており、針葉樹材材は確認されていない。このうち、クスノキ材については年代測定を実施しており、今回の礎板と柱高の間に入る8世紀前半〜6世紀前半の享年年代が得られている。また、イヌノキの柱材は平安朝前期と推定されており、いずれも今回の柱材と時間的にも近い。そのため、木材利用が異なる場合には、各種物の用途・用途・機能等の違いが関係している可能性がある。

一方、9世紀後半と考えられる月刀跡は、広葉樹のクスノキであった。クスノキは、交脚木部があるために加工はやがて困難であるが、積層を多く含む樹水部があることから月刀跡としては適材といえる。本調査の跡跡は、第256次調査で抽出された平安前期とされる月刀でもクスノキが確認されており、今回の結果とも調和的である。

#### 引用文献

伊藤 浩三, 1993, 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学農学研究所発行。  
 伊藤 浩三, 1995, 日本産広葉樹材の解剖的記載 1, 木材研究・資料・31, 京都大学農学研究所発行, 91-101。  
 伊藤 浩三, 1996, 日本産広葉樹材の解剖的記載 2, 木材研究・資料・32, 京都大学農学研究所発行, 99-112。  
 伊藤 浩三, 1997, 日本産広葉樹材の解剖的記載 3, 木材研究・資料・33, 京都大学農学研究所発行, 90-91。  
 伊藤 浩三, 1998, 日本産広葉樹材の解剖的記載 4, 木材研究・資料・34, 京都大学農学研究所発行, 90-96。  
 伊藤 浩三, 1999, 日本産広葉樹材の解剖的記載 5, 木材研究・資料・35, 京都大学農学研究所発行, 97-106。  
 バリー・サー・グーエイ株式会社, 2004, 自然科學博物館「日本の文化財第76集 大分県史跡集 25」, 大分県教育委員会, 14-14。  
 バリー・サー・グーエイ株式会社, 2005, 自然科學博物館「大分県史跡集 27」, 大分県教育委員会, 207-209。  
 Fischer, R.G., Grewer, S., Jilka, I., and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 1003による光学顕微鏡的検査システム, 伊藤 浩三・伊藤 浩三・伊藤 浩三・伊藤 浩三・伊藤 浩三 (日本建築学会), 建築資料の中心, 276。  
 Fischer, R.G., Grewer, S., Jilka, I., and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 1003による光学顕微鏡的検査システム, 伊藤 浩三・伊藤 浩三・伊藤 浩三・伊藤 浩三・伊藤 浩三 (日本建築学会), 建築資料の中心, 276。  
 Gasson P.E. (2004) IMA Lists of Microfossils Features for Softwood Identification. [http://www.ima.ac.uk/ima/ima\\_lists\\_of\\_microfossils\\_features\\_for\\_softwood\\_identification/](http://www.ima.ac.uk/ima/ima_lists_of_microfossils_features_for_softwood_identification/).  
 高橋 隆一, 伊藤 浩三, 1992, 同定針葉樹材, 建築資料の中心, 176。  
 Wheeler, R.A., Bass, P., and Gasson P.E. (編), 1996, 広葉樹材の識別 1AWAによる光学顕微鏡的検査システム, 伊藤 浩三・伊藤 浩三・伊藤 浩三・伊藤 浩三・伊藤 浩三 (日本建築学会), 建築資料の中心, 129。  
 Wheeler, R.A., Bass, P., and Gasson P.E. (2000) IMA List of Microfossils Features for Hardwood Identification. [http://www.ima.ac.uk/ima\\_lists\\_of\\_microfossils\\_features\\_for\\_hardwood\\_identification/](http://www.ima.ac.uk/ima_lists_of_microfossils_features_for_hardwood_identification/).

層年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場等の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、及び半減期の違い (気の半減期5730 ± 40年) を修正することである。層年較正に関しては、本来10年単位で数々の段階であるが、将来的に層年較正プログラムや層年較正の改正があった場合の再計算、再検定に資するため、1年単位で表されている。いずれも炭化材であることから、北半球の大気中濃度から由来する修正曲線を用いる。

層年較正は、測定誤差の±0.5σ双方の値を計算する。σは統計的1σの値が68%の確率で存在する範囲、2σは1σの値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内でデータの存在する確率を相対的に示したものである。測定誤差をσとして計算させた結果、S-300No. 7はcalAD1050-606、S-300No. 50はcalAD2095-432である。

一方、柱高・礎板・月刀跡は、針葉樹 2種類 (マキキ・カヤ) と広葉樹 1種類 (クスノキ) に同定された。各種樹材の解剖学的特徴等を要す。

#### ・マキキ属 (Podocarpus) マキキ

輪材の放射組織は放射管と細胞組織で構成される。放射管の早材部から晩材部への移行は緩やか、細胞組織は早材部および晩材部に存在する。放射組織は基礎部のみで構成される。分界線はヒノキ型で1分野に1-2個、放射組織は単列、1-10細胞高。

#### ・カヤ (Torreyas nuceifera Sieb. et Zucc.) イチイ科カヤ属

輪材の放射組織は放射管のみで構成され、細胞道および細胞組織は認められない。放射管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。年表管内には2本の筋をなしたらせん配列が認められる。放射組織は放射管のみで構成される。分界線はヒノキ型〜ヒノキ型で、1分野に1-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。

#### ・クスノキ (Gleasonia camphora (L.) Presl) クスノキ科クスノキ属

輪材は、道管管は比較的太く、管壁は薄く、横断面では個別形、単個または2-3個が放射方向に種

遺構名	番号	修正年代 (BP)	種別	樹種	種別	修正年代 (BP)	測定年代 (BP)	測定誤差 (1σ)	測定誤差 (2σ)	Code No.
S-300	No.7	1400 ± 31	木	礎板	カヤ	1490 ± 30	1490 ± 30	100 ± 30	100 ± 30	IAAA-42470
	No.50	2095 ± 80	木	柱高	マキキ	1880 ± 40	2256 ± 52	100 ± 40	100 ± 40	IAAA-42471
	No.25	550 ± 35	木	月刀跡	クスノキ	—	—	—	—	—
S-300	No.50	1655 ± 42	木	柱高	マキキ	1692 ± 35	1692 ± 35	100 ± 35	100 ± 35	IAAA-42471
	No.20	432 ± 20	木	礎板	カヤ	466 ± 30	466 ± 30	100 ± 30	100 ± 30	IAAA-42471
	No.47	660 ± 30	木	礎板	カヤ	648 ± 30	648 ± 30	100 ± 30	100 ± 30	IAAA-42470

表 16 放射計年代測定結果

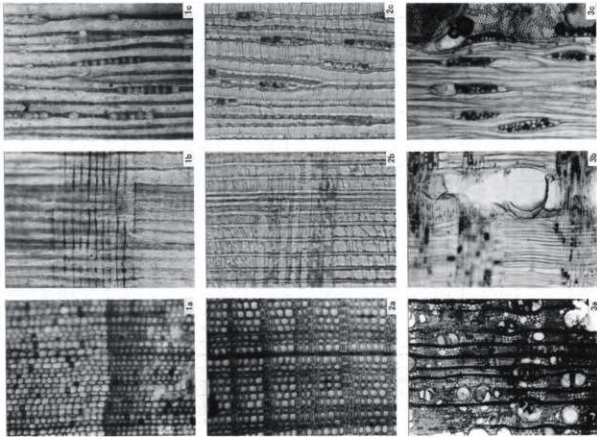
遺構名	番号	修正年代 (Cal)	種別	樹種	種別	修正年代 (Cal)	測定年代 (Cal)	測定誤差 (1σ)	測定誤差 (2σ)	Code No.
S-300	No.7	1400 ± 31	木	礎板	カヤ	1490 ± 30	1490 ± 30	100 ± 30	100 ± 30	IAAA-42470
	No.50	2095 ± 80	木	柱高	マキキ	1880 ± 40	2256 ± 52	100 ± 40	100 ± 40	IAAA-42471
	No.25	550 ± 35	木	月刀跡	クスノキ	—	—	—	—	—
S-300	No.50	1655 ± 42	木	柱高	マキキ	1692 ± 35	1692 ± 35	100 ± 35	100 ± 35	IAAA-42471
	No.20	432 ± 20	木	礎板	カヤ	466 ± 30	466 ± 30	100 ± 30	100 ± 30	IAAA-42471
	No.47	660 ± 30	木	礎板	カヤ	648 ± 30	648 ± 30	100 ± 30	100 ± 30	IAAA-42470

1) 修正年代は、RADIOCARBON CALIBRATION CALIB REV 01 (Copyright 1986-2005 M. Stuiver and P.J. Reimer) を使用して計算されたものである。測定誤差は、測定年代の標準偏差を考慮して計算されたものである。測定誤差は、測定年代の標準偏差を考慮して計算されたものである。測定誤差は、測定年代の標準偏差を考慮して計算されたものである。測定誤差は、測定年代の標準偏差を考慮して計算されたものである。

2) 測定年代は、1950年を基準としたものである。

3) 測定年代は、0.2σのずれをそれぞれとした場合、理論的に100%の確率で存在する分布を個別に示したものである。

#### 表 17 層年較正結果



1. 平千歳 (S-300 No.50)  
 2. カヤ (S-300 No.7)  
 3. クスノキ (S-95 No.25)  
 a: 木口, b: 断面, c: 断面

## VI. 調査まとめ

特筆すべき所見を列挙すると以下のとおりである。

- ・大型楕円柱建物の検出。
- ・東西道路 (長さ15・16条筋) の検出。
- ・桑切区画の検出。
- ・土版の遺体の検出。
- ・畑状遺構の検出。
- ・奈良三部の出土。
- ・重葺文相平瓦の出土。

### 遺構の変遷

#### ○6代以前

今回の調査区では古代以前の目立った遺構は確認されていない。また、遺物も弥生土器や古式土器類、石器類は出土しているものの、目立った出土量ではない。

#### ○7世紀末～8世紀前半

政庁1期になると、桑切区画があったことが窺われる遺跡が確認されている。25380035は土層が11世紀前半～12世紀前半、下層が7世紀末～8世紀前半の層段と明確に分類される。この層が政庁1期に相当し、8世紀前半には一帯完全に埋没し、奈良時代には掘り直しが行われたことがなかったため、埋土が累らされることがなかったとみられる。また、第236-2次調査で検出された256・253804やS302が2538035の延長上にあり、その南側4.8mの所に256・253035が平行して出土していることを考えると、2538022を対した道路であったと考えられる。15条筋でも256・150115下層で7世紀末の遺物がまとって出土したことを考え合わせると、遺構が重複せず、奈良時代以降の掘り直しを免れた場合、政庁1期の遺構が確認される例はあり、政庁1期の時点で桑切区画がある程度出来ていたと考えられてもよい。

この頃の遺物として25158050や256・15040 (3×2間建柱)、256・258060 (2×3間建柱) が検出されている。この2種の木製柱建物の第19次調査でも8世紀前半建造の3×3間の楕円柱建物(2505010)が検出されている。これは25158060と256・258060のほぼ東に位置している。そのほか般若寺丘段では、塔塚周辺の般若寺4次 (S3010、身舎3間延5間)・般若第231次遺構 (S3010、2×2間以上建柱) で、7世紀後半から8世紀前半にかけての楕円柱建物が確認されている。また、第257次調査の北側の第277次調査でも8世紀初頭の3×5間の東西向棟が確認されている。

また、重葺文相平瓦やそれと同じ目のような格子目き目を持つ平瓦が、第251次(28△)、第255次(6△)、第257次(△) 出土した。ほとんどが東部の遺構から出土するものだが、2538005より出土したものは、7世紀末～8世紀前半の遺物を伴うものであった。東部丘陵にあった般若寺の前身と考えられている塔塚寺 (鳳雲野印) で出土する瓦と同じ目き目瓦を使用しているため、塔塚寺が移築した際に瓦も再利用された可能性が考えられるのだが、般若寺塔塚周辺の調査でこれらの瓦が出土したという報告を見ない。上記のように、礎石建物が存在している状況を考え合わせると、般若寺階級がある丘陵上面ではなく、それ以外の丘陵部周辺にこの瓦を使用した建物があつたと考えざるを得ない。

以上のように、政庁1期に般若寺丘陵南端でほぼ同一の瓦を使用した建物があつたと考えられるが、どのような形で建造されたかは不明であるが、礎石建物が比較的多いのが特徴的である。

## ○ 8世紀後半～9世紀初め

染坊跡として、第251次調査では8世紀代の溝が多く検出されている。それらの中にS0915と605を相関する251SF196があり、井上条坊家の16条路と相関される。これに取り付く南道遺構(251SF203)があるが、これは251SR060(築後)に造られ、16条路より先に掘設している。第257次調査で、平安時代の溝を重複しながら、8世紀後半半頃の257S020・185を掘出した。この溝を15条路(257SF375)と相関している。この251SF196と257SF375の中間部の距離は約48.7mを測る。251SF196が東側圧路に所在する般若寺の跡跡の溝30m付近を通ることから、染草本邸から般若寺に向かう道路のひとつであったと考えられる。

この溝の中心の形的な建物遺構は、257S300(15×11間、8.6×23.6m)の大基壇柱建物で、北側の236・(S0180)67×16間、8.6×29.6m)と10.7mの間隔を置いて南北に並んでいる。このような大型建物が南に並ぶのは、大宮野では政府の邸第のみである。また、第236次調査で多く出土した刺繍彫刻の扉は調査が済んだ大宮野でも特異な出土事例を有する。また、引き絞せられた周の調査から、彫をほととじてする佐原甲斐名女が生きている。この軒北側がある場所は、政府内門から927mで、中央大宮(徳定天皇大宮)から59mと大宮に隣接した位置にある。このような調査例は多岐の市川川跡であり、政府内門から約1050m(垂直に大宮の東側)に11×2間(33×6m)の大基壇彫刻2棟市川北に建ち並んで検出されている。このような位置関係は平安京遺構跡(左7条一坊)の染草本邸の両側にあり、外国使節を安置した客館の風習が推測される。257S300と16条路間の257S020・185の埋設はほぼ同時期の8世紀後半と推測されるため、15条路が大基壇柱建物の埋設約6.5mの位置を通っていたことになる。この間に明確な築造や修繕の痕跡は確認できていない。

## ○ 8世紀後半～9世紀初め

第257次調査では大基壇柱建物(257S300)に切り込む形で、南北(257S2085)が掘られ、8世紀後半前後に埋設された2520・305の両方に柱建物が発見され、9世紀初めにかけて存在している。252S300も同時期の建物の可能性が考えられる。これらの建物が時代の客館のような官制の施設としての機能を有していたかはわからないが、建物の規模が他の客館内のものと変わらないものとなっている。

今回の3つの調査地点からは、奈良時代埋設の井戸は未検出であるが、9世紀前半頃の257S000・210・345と257S2095・305の両方にあり、これらが奈良時代の掘立柱建物と併存していた井戸の可能性が考えられる。

## ○ 9世紀後半～10世紀代

この時期は奈良時代の掘立柱建物から一変して、第257次調査では格子状の遺構を狭す様式遺構(33X380)に及び、第251・255次では、目立った遺構が存在しない。和歌遺構(33X380)は東西約46m、南北30mに及んでいて、西側壁の溝から西側に続く溝があり、15条路から約22m付近に区画割られている。和歌遺構とそれ以外の所と区画されている状況にも見とれる。

また、この時期の建物跡は、今回の調査区内では検出されていないが、奈良時代の西側に若干時期が異なる10世紀代の井戸が5基検出されている。これによって、西側地区外に建物が展開するの、礎石建物などが埋没されたと考えられることもできる。しかし、礎と左右する一併作りの井戸とも考えられ

るが、この時期の事例を知らず得ていない。

15条路付近では長さ5m程度の、252SD180・170(9世紀後半～10世紀前半頃)が掘られ、側溝状となっている。

## ○ 11世紀～12世紀初め

この時期の井戸は5基、建物は時期が明確でないものも多いが約1棟確認されている。調査範囲の溝には少ない一方で切り合いが多いが、平安後期の遺物は、他の条坊跡の溝に多く出土し、この時期の遺物を相対的時間として見ると、15条路がほぼ前期代を同じ場所を掘っているのに対し、16条路が約12m南に移動している痕跡が窺える。また、15・16条路の中間に位置する257S035が第1期掘削の溝と全く同じ位置に深い地溝が掘られており、7世紀代と同じ区画ラインであったことを物語っている。また、15条路を横切る257S040や257S005など東部方向の溝が明確に掘削されており、条坊区画内を掘削していた区画線と推測される。

第251次調査範囲の土取り遺構(251S3001・025・000)は、出土建物から平安後期の埋設であると考えが強く、その北側から第255次調査にかけて広がる土取りより若干古い層相である可能性が考えられる。

## ○ 12世紀後半頃

土取り遺構は15条路の南側に広がる。土取り遺構の掘土の遺物は11世紀後半から13世紀代のもので、土取り遺構の上に取り込み形で、12世紀には251S030・180、S135が掘られ並んでいる。条坊の東西道路上にも257S3001・005・005などがあるが、条坊の埋設が全くなくなってきた後に生活空間が狭まったことと関連する。第257次調査で、12世紀の建物群とも、建物は切り合いや方位が最低1回は建物の建て替えがあったことが窺えるが、12世紀中頃～13世紀代の井戸は本遺構より、遺物も7層程度で検出されている可能性がある。

これらの建物群は明確な遺構や遺物の検出は未確認であり、鎌倉時代以降以降から近代に至るまで生活空間として利用されることと推測される。

## 参考文献

- 井上正臣「大宮野条坊の基礎的考察」『大宮野学』第6号、大宮野市史資料集 2011。  
井上正臣「大宮野条坊大基壇の大型建物群と出土品」『和歌山』第7号(2010)。  
大宮野市教育委員会「大宮野市の文化財90名、2007」。  
大宮野市教育委員会「大宮野市史跡38」大宮野市の文化財99名、2008。  
大宮野市教育委員会「大宮野市史跡38」大宮野市の文化財99名、2008。  
大宮野市教育委員会「大宮野市史跡38」大宮野市の文化財99名、2008。  
多岐川正徳「大宮野市史跡38」大宮野市の文化財99名、2008。  
多岐川正徳「大宮野市史跡38」大宮野市の文化財99名、2008。





## 写真図版

写真図版には遺構の主な写真に掲載している。その他の遺構写真および遺物写真は、付録のCDにカラー情報で収録している。

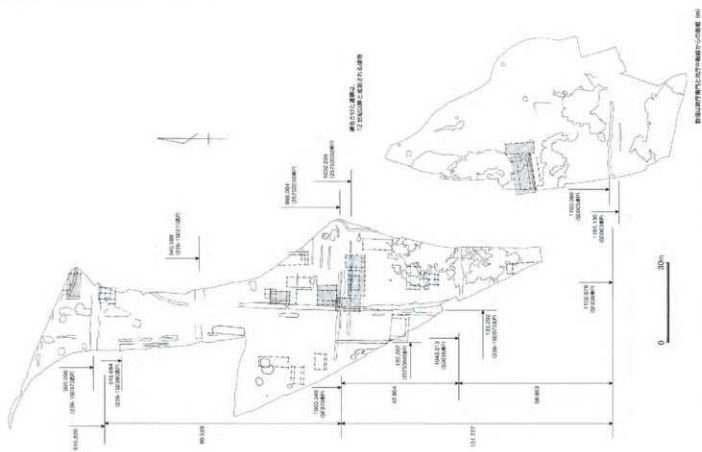


Fig. 10 平安時代後期以降の主要遺構（第236・251・255・257次調査）（1/1000）



第 251・255・257・258 次調査第 2 調査面全景 (合成写真、上向き)



第 251 次調査南半部 1 画面全景 (上が西)



第 251 次調査指定 16 条路付近 (上が西)



251SX001 全景 (真から)



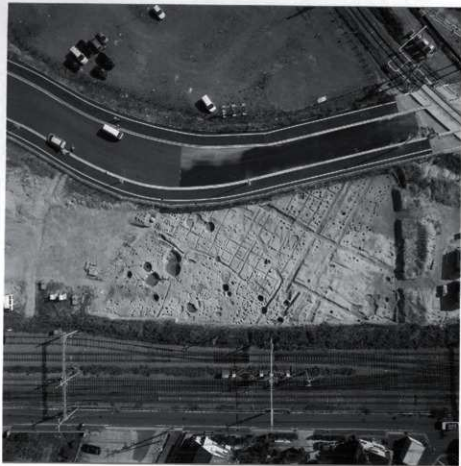
第 251 次調査南半部 2 画面全景 (上が南)



第 257 次調査 1 箇所全景 (上の南西)



第 257 次調査 S8001 - 005 - 055 - 120 全景 (上の西)



第 257 次調査 第 2 箇所全景 (上の北西)



2575E095 井戸枠検出状況 (南から)



2575E095 井戸枠検出状況 (北から)



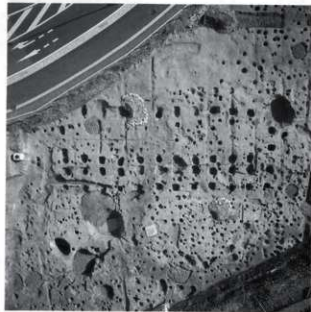
2575E245 井戸枠検出状況 (北から)



焼伏遺構完壁状況 (北から)



第257次調査 第3面全景 (上が北西)



2578300 全景 (上が北)



2578300 ⑦ 土層断面 (東から)



2578300 ⑧ 敷石 出土状況 (東から)



2578300 ⑨ 礎石 出土状況 (北から)



2578300 ⑩ 柱礎 出土状況 (北から)





付図1 第251次調査第1面遺構全体図 (1/200)

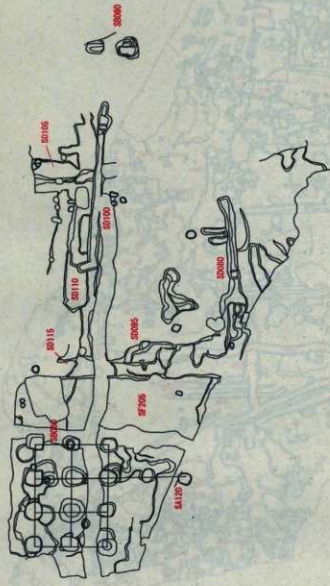


X55620.0

X55610.0

X55600.0

X55590.0



Y-44610.0

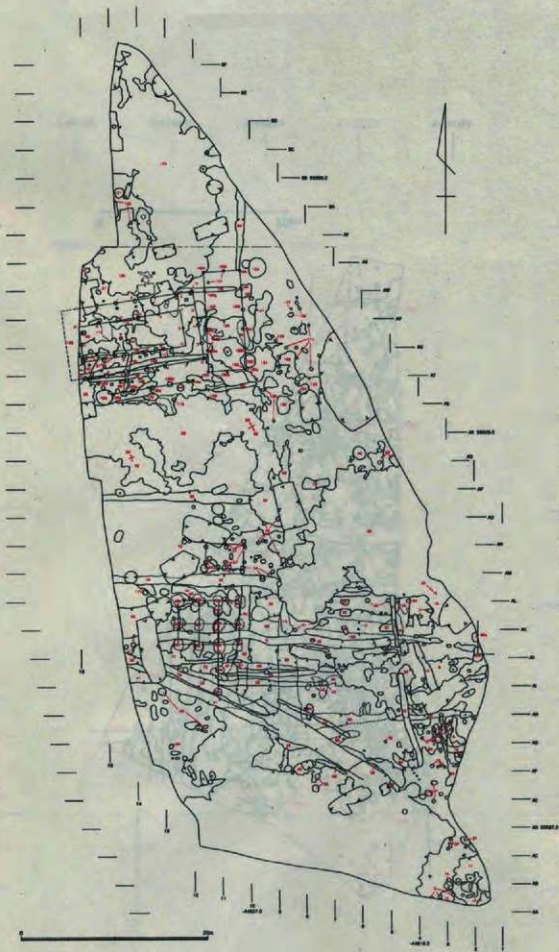
Y-44620.0

Y-44630.0

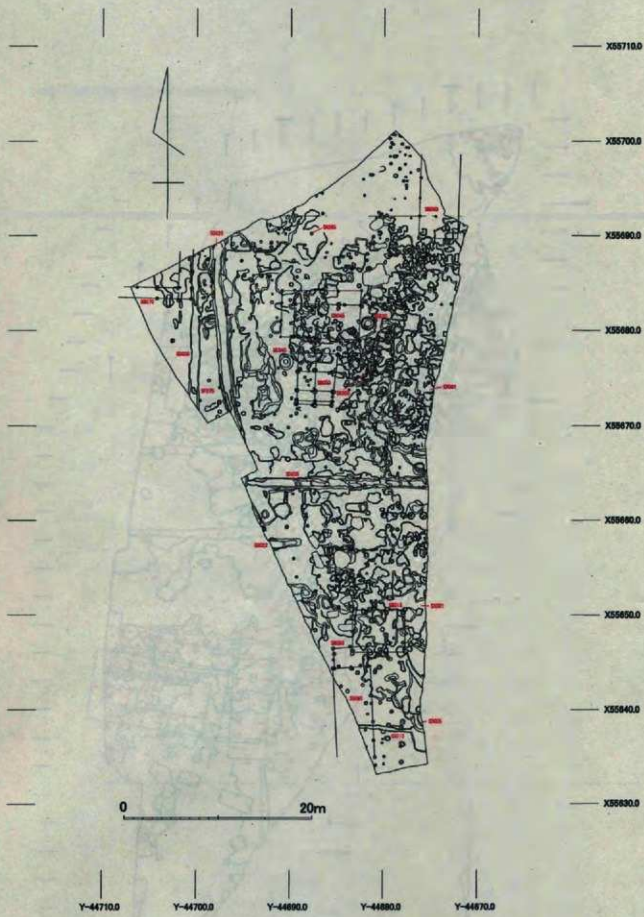
Y-44640.0

Y-44650.0

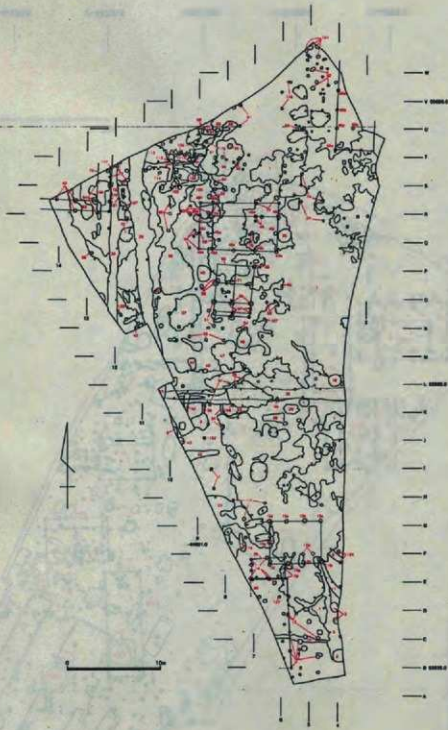
付図 2 第 251 次調査第 2 面遺構全体図 (1/200)



付圖3 第251次調査遺構略測圖 (1/200)



付圖4 第255次調査遺構全体圖 (1/200)



付圖 5 第 255 次調査遺構略測圖 (1/200)



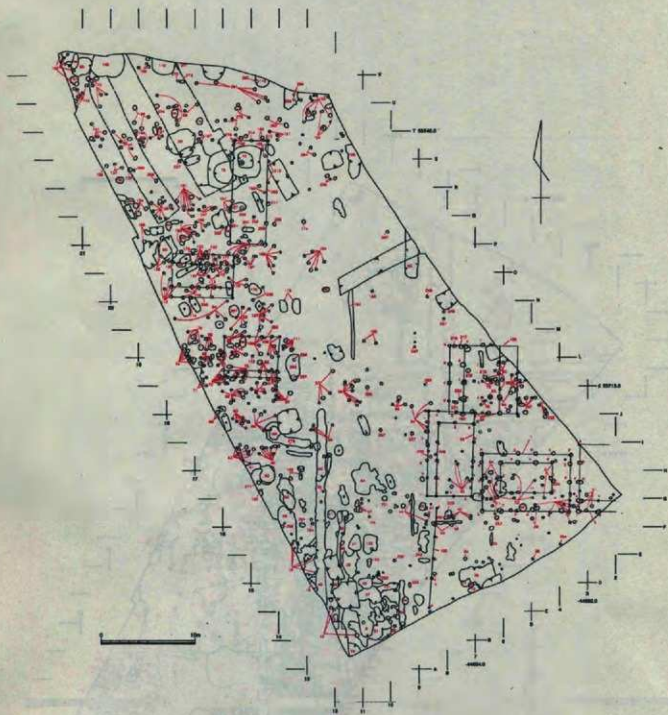
付図6 第257次調査第1面遺構全体図 (1/200)



付図7 第257次調査第2面遺構全体図 (1/200)



付圖 8 第 257 次調査第 3 面遺構全体圖 (1/200)

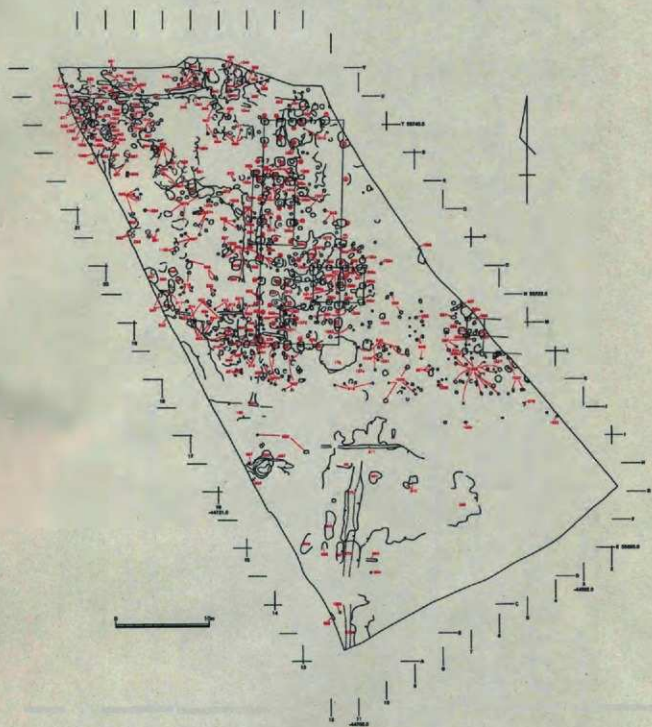


付圖9 第257次調査第1面遺構略測図(1/200)





付圖 10 第 257 次調査第 2 面遺構略測圖 (1/200)



付圖 11 第 257 次調査第 3 面遺構略測圖 (1/200)